

佐用郡佐用町

延吉遺跡

－中国横断自動車道姫路鳥取線事業に伴う発掘調査報告書－

平成 22 (2010) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

佐用郡佐用町

延吉遺跡

－ 中国横断自動車道姫路鳥取線事業に伴う発掘調査報告書 －

平成 22 (2010) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



調査地近景（南から）



1区全景（南から）

巻頭図版 2

森ノ本地区



1区南部遺構群（南東から）



配石土坑SK 19（南から）



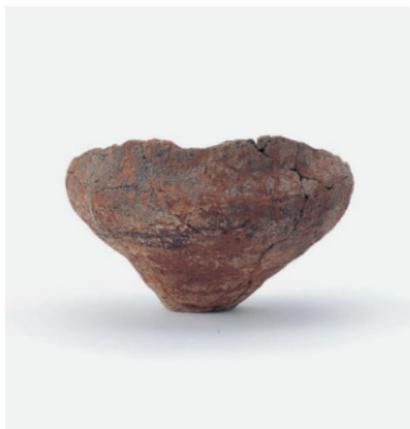
森ノ本地区出土の縄文土器



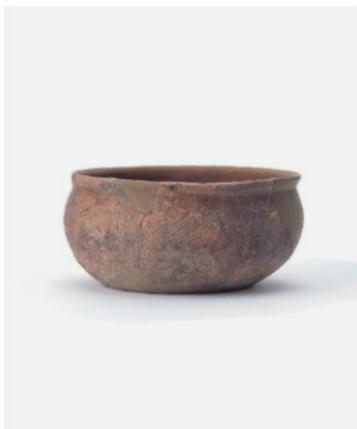
SK17 出土の縄文土器

巻頭図版 4

森ノ本地区



SK 10 出土縄文土器深鉢



SK 17 出土縄文土器鉢



石皿



1区全景（東から）



1区主要部（南から）



SH03 (東から)



SH03出土弥生土器

例 言

1. 本書は、佐用郡佐用町延吉に所在する延吉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線建設に先立つもので、日本道路公団中国支社の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成14年度に確認調査、平成15・17年度に本発掘調査を実施した。なお、本発掘調査については、(株)安岡建設及び(株)船曳建設に作業委託を行った。
3. 整理作業は、国土交通省近畿地方整備局阪神国道事務所の委託を受け平成20・21年度に兵庫県立考古博物館にて実施した。なお、遺物写真については(株)堀内カラーに委託した。
4. 調査は道路事業用に設置されている基準点を基に実施した。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本書の編集・執筆は池田征弘、上田健太郎、青木哲哉、バリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社加速器分析研究所が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県立考古博物館に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

青木哲哉、岡田憲一、千葉豊、中村剛彰、深井明比古、藤木久志

本文目次

第1章	調査の経緯	
	第1節	調査に至る経緯……………(池田征弘) ……1
	第2節	調査の経過……………(池田) ……1
	第3節	整理作業の経過……………(池田) ……2
第2章	位置と環境	
	第1節	地理的環境……………(池田) ……3
	第2節	歴史的環境……………(池田) ……3
第3章	森ノ本地区の調査	
	第1節	調査の概要……………(池田) ……7
	第2節	遺構……………(池田) ……7
	第3節	遺物
		1 土器……………(池田) ……12
		2 石器……………(上田健太郎) ……16
第4章	岡地区の調査	
	第1節	調査の概要……………(池田) ……19
	第2節	遺構……………(池田) ……19
	第3節	遺物
		1 土器……………(池田) ……23
		2 金属製品……………(池田) ……27
		3 石器……………(上田) ……28
第5章	自然科学的分析	
	第1節	延吉遺跡の地形環境……………(青木哲哉) ……29
	第2節	延吉遺跡出土土器の胎土分析……………(バリオ・サーヴェイ株式会社) ……39
	第3節	延吉遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)……………(株)加速器分析研究所 ……51
第6章	まとめ	
	第1節	縄文時代……………(池田) ……54
	第2節	弥生時代……………(池田) ……58
	第3節	中世……………(池田) ……60

巻頭図版目次

巻頭図版1 森ノ本地区	2 SK17出土縄文土器鉢
1 調査地近景(南から)	3 石皿
2 1区全景(南から)	巻頭図版5 岡地区
巻頭図版2 森ノ本地区	1 1区全景(東から)
1 1区南部遺構群(南東から)	2 1区主要部(南から)
2 配石土坑SK19(南から)	巻頭図版6 岡地区
巻頭図版3 森ノ本地区	1 SH03(東から)
1 森ノ本地区出土の縄文土器	2 SH03出土弥生土器
2 SK17出土の縄文土器	
巻頭図版4 森ノ本地区	
1 SK10出土縄文土器深鉢	

挿図目次

第1図 延吉遺跡の位置図……………1	第5章第2節 図2 胎土中の砂の粒径組成……………44
第2図 周辺遺跡分布図……………4	第5章第2節 図3 砕削物・基質・孔隙の割合……………45
第3図 配石土坑に用いられた礫の摩耗度別長辺規 模の度数分布……………18	第5章第2節 図版1 胎土薄片(1)……………48
第5章第1節 第1図 佐用川上流部の地形分類図…30	第5章第2節 図版2 胎土薄片(2)……………49
第5章第1節 第2図 岡・森ノ本地区周辺の地形 分類図……………32	第5章第2節 図版3 胎土薄片(3)……………50
第5章第1節 第3図 岡地区における西壁断面図…34	第5章第3節 参考 暦年較正年代グラフ……………53
第5章第1節 第4図 森ノ本地区における南北 セクション断面図……………36	第4図 森ノ本地区出土の縄文土器……………55
第5章第2節 図1 各粒度階における鉱物・岩石 出現頻度……………43	第5図 森ノ本地区の配石土坑……………57
	第6図 弥生時代の岡地区……………59
	第7図 中世の岡地区……………61

表目次

第1表 調査一覧……………2	第5章第2節 表2 薄片観察結果1)……………41
第2表 調査地区対照表……………2	第5章第2節 表2 薄片観察結果2)……………42
第3表 遺跡地図地名表……………5	
第5章第2節 表1 胎土分析試料一覧……………40	

付 表

付表1 土器一覧表	64	付表3 石器一覧表	67
付表2 金属製品一覧表	66	付表4 未図化石皿一覧表	68

図版目次

図版1 調査区配置図	図版20 岡地区 竪穴住居跡3 SH03中央土坑・柱穴
図版2 調査区周辺地形図	図版21 岡地区 竪穴住居跡4 SH03変遷図
図版3 確認調査位置図	図版22 岡地区 竪穴住居跡5 SH04 ・掘立柱建物跡 SB01
図版4 森ノ本地区 全体図	図版23 岡地区 段状遺構1・2
図版5 森ノ本地区 土層断面図	図版24 岡地区 土坑1 SK03・04・10・12
図版6 森ノ本地区 南部遺構群	図版25 岡地区 土坑2 SK19・32・35・37
図版7 森ノ本地区 埋設土器 SK10・36・ 配石土坑1 SK02	図版26 森ノ本地区 縄文土器1
図版8 森ノ本地区 配石土坑2 SK03・04・08・09・12	図版27 森ノ本地区 縄文土器2
図版9 森ノ本地区 配石土坑3 SK19	図版28 森ノ本地区 縄文土器3・その他の土器
図版10 森ノ本地区 配石土坑4 SK14・15・ 土坑1 SK05～07	図版29 森ノ本地区 石器1
図版11 森ノ本地区 土坑2 SK13・16・18	図版30 森ノ本地区 石器2
図版12 森ノ本地区 土坑3 SK17	図版31 森ノ本地区 石器3
図版13 森ノ本地区 土坑4 SK24・32～35	図版32 森ノ本地区 石器4
図版14 森ノ本地区 溝 SD01～04	図版33 森ノ本地区 石器5
図版15 岡地区 全体図	図版34 森ノ本地区 石器6
図版16 岡地区 土層断面図	図版35 岡地区 弥生土器1
図版17 岡地区 ブロック配置図	図版36 岡地区 弥生土器2
図版18 岡地区 竪穴住居跡1 SH01-02	図版37 岡地区 古代の土器・中世以降の土器・陶磁器1
図版19 岡地区 竪穴住居跡2 SH03	図版38 岡地区 中世以降の土器・陶磁器2・金属製品
	図版39 岡地区 石器

写真図版

写真図版1 調査地遠景（南から） 調査地近景（南から）	写真図版3 森ノ本地区 1区全景（南から） 1区全景（東から）
写真図版2 森ノ本地区 1区全景（真上から）	写真図版4 森ノ本地区

	1区全景(南東から)	写真図版14	森ノ本地区
	1区南部遺構群(南東から)		SK13(南から)
写真図版5	森ノ本地区		SK16(北から)
	1区南部遺構群(西から)		SK16遺物出土状況(西から)
	1区南部遺構群(東から)	写真図版15	森ノ本地区
写真図版6	森ノ本地区		SK17(南から)
	2区全景(南から)		SK18(東から)
	2区南部遺構群全景(東から)		SK24(南から)
	3区全景(西から)	写真図版16	森ノ本地区
写真図版7	森ノ本地区		SK32(西から)
	SK10(西から)		SK34(西から)
	SK36(西から)		SK35(西から)
	SK10断面(西から)	写真図版17	森ノ本地区
	SK36断面(西から)		P003(西から)
写真図版8	森ノ本地区		SD01(北から)
	SK02(南西から)		2区北部土師器出土状況(南から)
	SK02下層(南西から)	写真図版18	岡地区
	SK03(北から)		1区全景(真上から)
写真図版9	森ノ本地区	写真図版19	岡地区
	SK04(南から)		1区全景(東から)
	SK08(東から)		1区全景(南から)
	SK09(南から)	写真図版20	岡地区
写真図版10	森ノ本地区		1区主要部(南から)
	SK12(東から)		1区主要部(北から)
	SK12底部(東から)	写真図版21	岡地区
	SK14(南から)		SH01(北から)
写真図版11	森ノ本地区		SH01中央土坑(東から)
	SK15(北から)		SH01土器(北東から)
	SK19(西から)	写真図版22	岡地区
	SK19(北から)		SH02(東から)
写真図版12	森ノ本地区		SH03(東から)
	SK19(南から)		SH03中央土坑(南から)
	SK19断面(南から)	写真図版23	岡地区
	SK19底部(南から)		SH03 P064(南東から)
写真図版13	森ノ本地区		SH03 P067・068(北東から)
	SK05(南から)		SH03 P063(南東から)
	SK06(北から)		SH03 P072・073(北東から)
	SK07(西から)		SH03 P071・070(南東から)

	SH03 P062 (北東から)	写真図版33	森ノ本地区	縄文土器 5
	SH03 P081 (北から)	写真図版34	森ノ本地区	縄文土器 6
	SH03 P079 (北から)	写真図版35	森ノ本地区	縄文土器 7
写真図版24	岡地区	写真図版36	森ノ本地区	
	SH03土器 (北から)			縄文土器 8・その他の土器
	SH03土器 (北から)	写真図版37	森ノ本地区	石器 1
	SH03石斧 (東から)	写真図版38	森ノ本地区	石器 2
	SH03台石 (西から)	写真図版39	森ノ本地区	石器 3
写真図版25	岡地区	写真図版40	森ノ本地区	石器 4
	SH04 (西から)	写真図版41	岡地区	弥生土器 1
	段状遺構 1 (南東から)	写真図版42	岡地区	弥生土器 2
	段状遺構 1 (南から)	写真図版43	岡地区	弥生土器 3
写真図版26	岡地区	写真図版44	岡地区	弥生土器 4
	段状遺構 2 (南から)	写真図版45	岡地区	
	SK03 (東から)			古代の土器、中世以降の土器・陶磁器 1
	SK04 (東から)	写真図版46	岡地区	
写真図版27	岡地区			中世以降の土器・陶磁器 2
	SK12 (西から)	写真図版47	岡地区	
	SK32 (東から)			中世以降の土器・陶磁器 3
	SK35 (東から)	写真図版48	岡地区	
写真図版28	岡地区			中世以降の土器・陶磁器 4
	SK19 (西から)	写真図版49	岡地区	
	P002土器 (南から)			中世以降の土器・陶磁器 5
	P114銅銭 (東から)	写真図版50	岡地区	
写真図版29	森ノ本地区			中世以降の土器・陶磁器 6
	縄文土器 1・土師器			
写真図版30	森ノ本地区	写真図版51	岡地区	金属製品
	縄文土器 2			
写真図版31	森ノ本地区	写真図版52	岡地区	石器
	縄文土器 3			
写真図版32	森ノ本地区			
	縄文土器 4			

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

広く山陰・中国地方と関西圏との連携を強化し、地域の経済・産業・文化の交流を図り、一体的な発展と活力ある地域づくりを目指して、山陽自動車道・中国自動車道に連結する高速自動車道として中国横断自動車道姫路鳥取線の建設が計画された。路線は姫路市を基点に兵庫県・岡山県・鳥取市を結び鳥取に至る、延長約86kmである。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所ではこの計画を受けて、日本道路公団中国支社より依頼を受け、平成7年度～平成19年度に分布調査・確認調査・本発掘調査を実施した。



第1図 延吉遺跡の位置図

第2節 調査の経過

1 分布調査

平成7年度に路線予定地を兵庫県内の区間延長約9.5kmについて分布調査（遺跡調査番号950130）を実施した。その結果、9地点において遺物の散布や地形などから埋蔵文化財の存在する可能性があることを確認した。このうち、No.4地点が延吉遺跡にあたる。

2 確認調査

平成14年度

No.4地点（確認調査時は末宗遺跡と呼称）は佐用川以西、末宗集落に至る延長約740mの区間である。この区間については平成14年度に確認調査（遺跡調査番号2002126）を実施した。路線幅35～70mの範囲内に幅2m、長さ5mのトレンチを59箇所設定した。このうち、遺構・ピットなどの存在から対象地中部の11・13・16・57T付近（森ノ本地区）と29～33・59・60T付近（岡地区）の2箇所まで遺跡が存在することが確認された。対象地南部と北部では遺物の散布は認められたが、佐用川旧河道や湿地と考えられた。調査の結果、遺跡は末宗地区には広がっていないことが判明したため、遺跡名を延吉遺跡と変更した。なお、各地区名は小字地名による。

平成19年度

延吉遺跡付近にインターチェンジが設置されることになったことから、本線部分の東西両側について2m×3mのトレンチを19箇所設定した。本線部分の西側の一部で遺物包含層を確認した。

3 本発掘調査

本発掘調査は工事計画の変更などにより平成15・17・19年度の3回に分けて行われた。各年度の調査

第1表 調査一覧

道路調査番号	調査種別	調査担当者	調査期間	調査面積	備考
950130	分布調査	井守徳男、森内秀造ほか	平成7年4月18・19日	延長約9.5km	No.4地点が延吉道路
2002126	確認調査	池田征弘、上田健太郎	平成14年11月18日～ 平成15年1月10日	590㎡	T11・13・16・57が森ノ本地区、T29～33、T59・60が岡地区
2003189	本発掘調査	山田清朝、池田征弘	平成16年1月6日～ 3月19日	4687㎡	1区が森ノ本1区、2区が岡1区
2005005	本発掘調査	吉識雅仁、池田征弘	平成17年7月29日～ 10月3日、11月28日～ 12月1日	1414㎡	3・4区は森ノ本2・3区
2007105	確認調査	種定淳介	平成19年9月10日～ 9月14日	114㎡	T10・11は岡2区
2007113	本発掘調査	種定淳介	平成19年10月22日～ 11月2日	191㎡	岡2区

とも、遺物を包含する層までを重機により掘削し、以下を人力により掘削し、調査を進めた。検出された遺構については写真の撮影、実測図の作成などを行った。平成15年度と平成17年度の3区については空中写真撮影及び測量を実施した。

平成15年度は本線部分のうち佐用川に近い森ノ本地区部分を1区、丘陵裾部の岡地区部分を2区として実施した。森ノ本地区では縄文後期の配石土坑、埋設土器など、岡地区では弥生時代の堅穴住居跡、中世の土坑、ピット群などを検出した。調査にあたっては調査補助員森崎由起子・柴田紀三光の協力を得た。

平成17年度は平成15年度の森ノ本1区の東側に予定された付帯施設部分を3区として実施した。さらに工事用道路を3区内に振り替えた後、3区南側を4区として調査を実施した。調査の結果、縄文時代の埋設土器やピットなどが検出された。

平成19年度は2区西側のインターチェンジ敷設部分について実施した。土坑、焼土坑、ピットなどが検出された。

今回、報告に当たっては本発掘調査の地区名を第2表の通り変更する。

第2表 調査区対照表

報告地区名	調査時調査区名
岡地区	1区 平成15年度2区
	2区 平成19年度
森ノ本地区	1区 平成15年度1区
	2区 平成17年度3区
	3区 平成17年度4区

第3節 整理作業の経過

出土品整理事業は日本道路公団の民営化によりH18年度より国土交通省近畿地方整備局阪神国道事務所へ移管となった。出土品整理作業は平成21年度に行った。調査で出土した遺物（土器281入りコンテナにして17箱・石製品77点・金属製品9点）について、当博物館にて接合・復元・実測・拓本・写真撮影などを行い、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。

作業は整理保存班菱田淳子（平成21年度）の補助のもとに調査第2班池田征弘、調査第1班上田健太郎が担当した。金属器の保存処理作業は整理保存班岡本一秀が担当した。写真撮影については（株）タニチフに委託した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

鳥田 留里 前山 三枝子 眞子 ふさ恵 大前 馬子 川村 由紀 藤井 光代
長濱 重美 藤池 かづさ 嶺岡 美見 前田 恵梨子 有馬 利那子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

佐用町の地理と地形

延吉遺跡の所在する佐用郡佐用町は兵庫県南西部の内陸部に位置し、西は岡山県備前市・美作市に隣接している。現佐用町は平成17年に佐用郡の佐用町・上月町・南光町・三日月町が合併したもので、延吉遺跡はこのうち旧佐用町域に位置している。

佐用町は瀬戸内海より約30km内陸に位置し、北から南へ流れる千種川の中流域及び千種川の支流である佐用川流域に広がっている。延吉遺跡の位置する旧佐用町は佐用川中上流域に広がる。南部の佐用川中流域では佐用盆地が広がり、北部では横坂より北側に延びる佐用川流域及びその支流に沿う谷筋と佐用盆地の北西部に流れ込む江川川とその支流に沿う谷筋が延びている。

佐用町は内陸の山間地に位置するものの、佐用盆地を中心にして川筋に延びる谷筋を伝う交通路が四方八方に延び、古くから現在に至るまで交通の要衝である。現代においては佐用町を東西に通る中国縦貫自動車道には佐用ICが設けられ、ここからは鳥取方面に向かう国道373号と竜野方面に向かう国道179号線につながっている。また現在、佐用から鳥取方面に向かう中国横断自動車道姫路鳥取線の建設が進んでいる。鉄道についても東西にJR姫新線が通り、南北には鳥取と関西を結ぶ智頭急行智頭線が通っている。近世には佐用を分岐点として美作・出雲方面へは出雲街道、鳥取方面へは因幡街道が通り、ルートの変更はあるものの古代の官道である美作道、因幡道まで遡るものである。

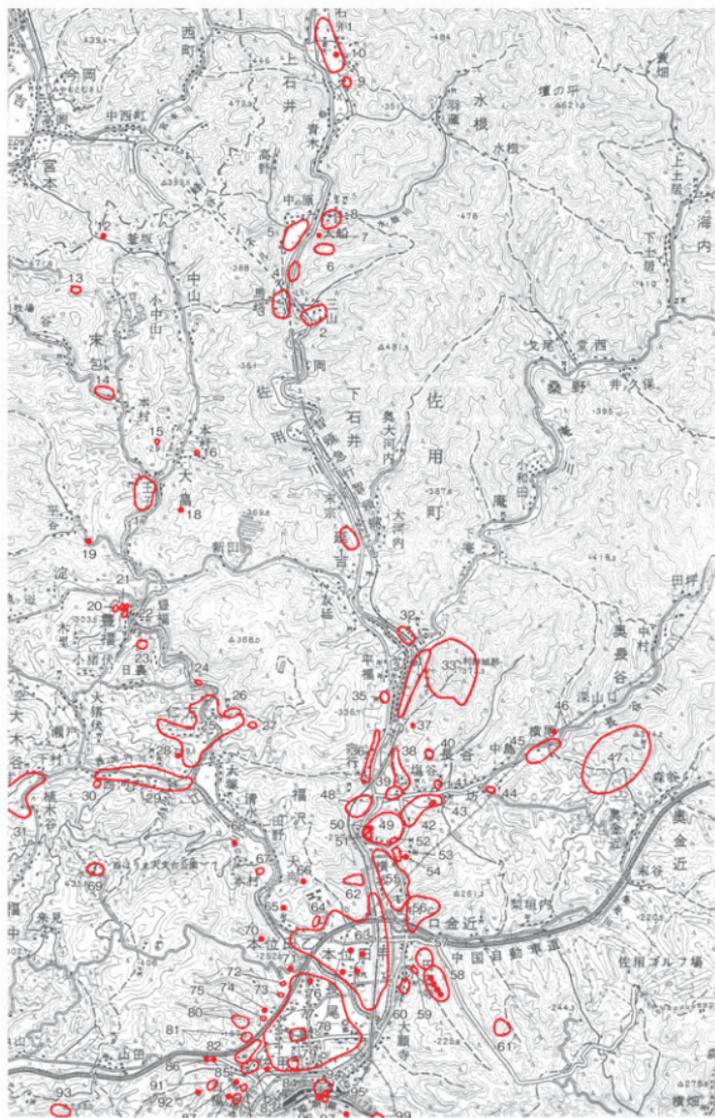
延吉遺跡の地理と地形

延吉遺跡は佐用盆地の北側に延びる佐用川流域に沿う谷筋の佐用盆地の北側4km、平福の北側約15kmに位置している。佐用川沿いの谷は南北に細く延び、東側には長谷川、庵川などの支流に沿う谷が延びている。佐用盆地の北側から延吉遺跡の北側までは幅500m以下の平野がほぼ連続して延び、以北は狭窄部が多くなり、平野が断続的になるとともに幅が減少してゆく（詳しくは第5章第1節延吉遺跡の地形環境参照）。

延吉遺跡付近の佐用川東岸では丘陵が川縁に位置し、段丘や扇状地はあまり発達していない。それに対して佐用川西岸部では段丘や扇状地が比較的広く存在している。岡地区は高位に位置する斜度のきつい扇状地上（支流性扇状地Ⅰ）に位置し、山山には土石流による巨礫が多く含まれている。森ノ本地区は低位に位置する斜度の緩い扇状地上（支流性扇状地Ⅳ）に位置している。この扇状地の大半は地下水位が高く低湿で、森ノ本地区調査区付近のみがわずかに微高地となっている。このように延吉遺跡付近では利用できる平地は少なく、岡地区のような斜度のきつい扇状地や森ノ本地区のような低湿な扇状地の微高地部を利用している。

第2節 歴史的環境

旧佐用町内の遺跡は南部の佐用盆地の平野部とその周囲において数多くの遺跡が分布し、この地域の中心地であることを示している。佐用盆地から北側へは佐用川流域に沿って平福までは比較的遺跡の分布は稠密である。平福以北については延吉、中の原、上石井と狭小な平地や緩斜面に占地した遺跡が断続的に存在している。ただし、佐用川の支流の庵川の流域では遺跡の分布は知られない。佐用盆地から



第2図 周辺遺跡分布図 縮尺 1/50000

第3表 遺跡地図地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	延吉遺跡	26	仁方神庭神社遺跡	51	麩石遺跡
2	中土居二山遺跡	27	仁方安井遺跡	52	横坂古墳群
3	中土居小野遺跡	28	向山古墳	53	神田遺跡
4	大獅子遺跡	29	西河内遺跡	54	横坂塚塚
5	中の原遺跡	30	西河内古墳	55	横坂遺跡
6	旧大船寺跡	31	大木谷遺跡	56	高山城跡・西ノ土居墳墓
7	下サラス遺跡	32	平福遺跡	57	平の上古墳群
8	大船遺跡	33	柯神城跡	58	円応寺古墳群
9	橋の段遺跡	34	平福御殿屋敷跡	59	円応寺山城跡
10	上石井古墳	35	平福陣屋跡	60	円応寺跡
11	上石井遺跡	36	井谷遺跡	61	皆谷古墳
12	釜坂古墳	37	夏村遺跡	62	水谷古墳群
13	小中山遺跡	38	中尾遺跡	63	本位田遺跡・本位田古墳群
14	末包古墳群	39	別所構跡	64	池の堤遺跡
15	上野殿古墳	40	口長谷B遺跡	65	塩田古墳
16	成友古墳	41	長谷陣屋跡	66	高田古墳
17	大島遺跡	42	口長谷遺跡	67	本村遺跡
18	大島古墳	43	口長谷A遺跡	68	福沢古墳
19	平谷古墳	44	口長谷岡田遺跡	69	鍛冶屋敷遺跡
20	豊福構跡	45	横尾遺跡	70	玉落台古墳
21	豊福遺跡	46	穴の尾古墳	71	玉落古墳
22	豊福古墳群A	47	長谷寺田伽藍	72	長尾森谷遺跡
23	豊福古墳群B	48	宗行遺跡	73	長尾岡の平遺跡
24	尾崎遺跡	49	横坂丘陵遺跡	74	長尾古墳2号墳
25	仁方遺跡	50	麩石古墳	75	福地遺跡
				76	長尾古墳1号墳
				77	長尾・沖田遺跡
				78	長尾庵寺
				79	佐用橋の段跡
				80	永谷遺跡
				81	水高山城跡
				82	西山遺跡
				83	西山薬師遺跡
				84	山王タラ遺跡
				85	吉溝古墳
				86	吉見土古墳
				87	たたん谷遺跡
				88	大成古墳群1号墳
				89	吉福遺跡
				90	上吉福遺跡
				91	かんだに遺跡
				92	吉福古墳
				93	京谷古墳群
				94	上方満願寺跡
				95	佐用陣屋跡
				96	上町遺跡
				97	山の元遺跡
				98	佐用坂製鉄遺跡
				99	佐用坂遺跡

北西に延びる江川川の流域でも因幡道推定ラインに沿うように美作方面に向かって点々と古墳などの遺跡の存在が知られている。

旧石器時代 旧佐用町域では明瞭な遺跡は知られていない。長尾・沖田遺跡(77)で黒曜石製ナイフ形石器・剥片、本位田遺跡(63)でサヌカイト製削器が採集されているのみである。

縄文時代 本位田高田遺跡(63)で高山寺式(早期)の土器が出土しているが、遺跡が急激に増えるのは後期である。旧南光町上三河遺跡(中期末)、本位田伊勢田遺跡(63)、本位田円応寺遺跡(63)、長尾遺跡(77)、中の原遺跡(5)など中・後期の竪穴住居跡が多く検出されていることが注目される。延吉遺跡(1)はこれらの集落遺跡に対して後期の墓塚の様相を示すものとして貴重である。その他、本位田池尻遺跡(63)では後・晩期の石製耳飾・勾玉、平福遺跡(32)では石棒が出土している。

弥生時代 前期は本位田池尻遺跡(63)、上石井遺跡(11)で土器が出土しているのみである。中期後半より集落の存在が明らかとなる。中期後半の住居跡が検出されているのは口長谷岡田遺跡(44)、横坂丘陵遺跡(49)である。このうち、佐用盆地の北側に位置する横坂丘陵遺跡では丘陵斜面及び尾根上で中期後半～終末期にかけての住居跡約20棟や段状遺構などが検出されている。延吉遺跡でも高位の扇状地斜面に住居が造られている。後期になると延吉遺跡(1)、別所構跡(39)、横坂丘陵遺跡(49)、本位田高田遺跡(63)、本位田権現谷A遺跡(63)、本位田権現谷B遺跡(63)、福地遺跡(75)、長尾・沖田遺跡(77)、仁方遺跡(25)などで住居跡などが検出され、遺跡数が急激に増加している。横坂丘陵遺跡、本位田権現谷A遺跡、延吉遺跡、仁方遺跡などで依然丘陵部の遺跡が顕著であるとともに、本位田や長尾の平地部でのやや散漫ながらも遺跡の存在が明確になっている。

また、弥生時代には平地部での木棺墓の存在が顕著となっている。本位田高田遺跡(63)や口長谷遺跡(42)で中期後半の木棺墓が検出されている。以後本位田高田遺跡や長尾・沖田遺跡で副葬品をもつ

ものが少ないものの数多く木棺墓が検出され、古墳時代初頭まで造り続けられていると考えられている。後期には丘陵上にも墳墓が造られている。西ノ土居墳墓(56)では後期の竪穴式石塚2基、小墓坑1基が検出され、竪穴式石塚より銅鏡(破鏡)、刀子状鉄製品、管玉が出土している。横坂丘陵遺跡(49)では丘陵頂部で墳丘墓が検出されている。埋葬主体は石棺で、女性の人骨が埋葬されていた。弥生時代末期から古墳時代初頭と推定されている。

古墳時代 古墳時代に入ると集落の様相は明らかでなくなる。本位田池尻遺跡(63)で前期の竪穴住居跡、本位田高田遺跡(63)・延吉遺跡(1)で竪穴住居跡が検出されているのみである。墳墓については佐用盆地周辺の丘陵部に多く、また江川川流域などに点々とその存在が知られるが、その内容の明らかなものは多くない。古墳時代初頭においては弥生時代後期から引き続き長尾・沖田遺跡などで木棺墓が造られている。また前期の吉福遺跡(89)で丘陵上の石棺墓・木棺墓が13基検出されている。後期の古墳は本位田権現谷B遺跡や本位田高田遺跡で円墳、横坂丘陵遺跡で横穴式石室2基が検出されている。そのほか本位田古墳群内から龍鳳環頭大刀柄頭が出土している。

奈良・平安時代 奈良時代に入ると遺跡数が格段に増加する。長尾・沖田遺跡八反田地区(77)では大型の掘立柱建物跡や区画溝などが検出され佐用郡衙の関連施設と考えられている。またその北側には長尾庵寺跡が存在している。長尾・沖田遺跡内の各所では掘立柱建物跡や条里方向の溝が検出され、古代因幡道の側溝と推定されるものも存在する。本位田遺跡内の各所でも掘立柱建物跡や溝などが検出されており、本位田魚ヶ鼻遺跡や本位田権現谷B遺跡では製鉄遺構が含まれている。また、佐用盆地以外でも大獅子遺跡(4)、平福遺跡(32)で掘立柱建物跡が確認でき、延吉遺跡でも遺構は不明確であるが須恵器が出土している。佐用郡内には風土記の産鉄記事で知られるように製鉄遺跡が多く存在する。盆地西側の大撫山周辺位置する永谷B遺跡(80)、盆地北側の横坂丘陵遺跡(49)、佐用郡北端の日名倉山南麓の滝谷U遺跡では製鉄炉が検出されている。墳墓については横坂丘陵遺跡(49)で火葬墓群が検出されている。

中世 鎌倉期以降は佐用郡の多くの部分は九条家領佐用荘に含まれ、南北朝期以降には赤松氏の支配下に入ったようである。奈良・平安時代に引き続き本位田遺跡や長尾・沖田遺跡内の各所で掘立柱建物跡などが検出され、他にも横坂遺跡(55)、仁方遺跡(25)、中土居三山遺跡(2)、大獅子遺跡(4)、中原遺跡(5)で掘立柱建物跡などが検出されている。このうち中土居三山遺跡や中原遺跡では延吉遺跡と時的に近い室町期の遺物が出土している。赤松氏に属する別所氏の居館と考えられる別所構跡(39)では15世紀後半～16世紀の土壘・堀・掘立柱建物跡が検出されている。

近世 慶長5年(1600)の池田氏の播磨入封に伴い、支城として利神城(33)が築城される。その後利神城は取り壊され、寛永8年(1632)に松井松平氏の知行となり平福陣屋が置かれる。城下町の町場を継承した平福宿は因幡街道の宿場として続き、現在もその面影を残している。延吉遺跡は平福領下の友延村に位置していたと思われる。明治14年(1881)に友延村は南側の正吉村と合併し、延吉村となった。

第3章 森ノ本地区の調査

第1節 調査の概要

森ノ本地区は佐用川の西側約30mに位置し、標高151m前後で、現河床より約2m高い。岡地区の位置する丘陵尾根の先端部付近に当たり、東向きに緩斜面を呈している。西側は岡地区南側の谷筋が埋没して続き、南側の湿地へとつながっている。東側は佐用川によって形成された段丘崖がすぐさまっていると思われる。

調査区（面積2473m²）は西側の森ノ本1区（1059m²）、東側の森ノ本2区（1362m²）、森ノ本2区の南側の森ノ本3区（52m²）に分かれる。原状は斜面を段状に整形した田地である。地山は複数回の造成により遺構面は削平を受けている部分が多く、低い部分には厚いところで70cm程度の盛土がなされている。地下水位が高いことから地面には水はけをよくするために竹を入れた暗渠が多く設けられている。褐色系のシルト質極細砂～極細砂層の地山面の上に縄文土器を含む包含層は調査区南部のごく一部のみ残存しているのみである。

検出された遺構の主なものには縄文時代後期の埋設土器、配石土坑、土坑、ピットなどで、その他、弥生時代・古墳時代・中世の溝が検出された。

縄文時代の遺構は調査区南端部の東西約20m、南北約20mの範囲に集中して検出されている（図版6）。埋設土器2基、配石土坑9基、土坑12基などがあり、ピットは遺物の出土したものは多くないがP201のように縄文土器が出土したものもある。

弥生時代以降の遺構は非常に散漫である。等高線に併行して流れる溝（SD01、SD04）、等高線に直交する溝（SD02・03）などがある。SD01が弥生中期、SD02は中世、SD03・04は古墳時代と考えられる。SD04の北側は崖面状に深く落ち込んでいるが、その肩に引っかかるようなかたちで、土師器甕（66）が出土している。その他P001から中世の須恵器碗（61）が出土している。

第2節 遺構

遺構は縄文時代のものと同様に弥生時代～中世のものに分かれる。土坑には遺物が出土していないことから遺構の時期が判然としないものもあるが、形状や埋土などから縄文時代の可能性が高いものが多いと考えている。

1 縄文時代の遺構

埋設土器、配石土坑、土坑、ピットなどがある。一応土坑内に石が含まれているものを配石土坑としたが、埋土中に石を含むものの貯蔵穴様に深いSK17や規模が大きく浅い落ち込み状のSK16は土坑に含めている。

埋設土器 埋設土器は2基検出された。

SK10（図版7、写真図版7）

森ノ本1区で検出された。胴部径約30cmの深鉢（1）が正位に設置されている。頸部より上は後世の削平により残存していない。土器の底部には穿孔がなされている。掘方は土器よりかなり広く掘られて

いる。平面形は53cm×40cmの楕円形で、深さは13cmである。

SK36 (図版7、写真図版7)

森ノ本2区で検出された。胴部径約30cmの深鉢(2)が正位に設置されている。胴部中位より上は後世の削平により残存していない。底部の全体を欠いて、底に孔をあけている。掘方は土器よりわずかに広く掘られている。平面形は直径38cmの円形で、深さは14cmである。

配石土坑 土坑内に石が含まれているものを配石土坑とする。

SK02 (図版7、写真図版8)

森ノ本1区で検出された。平面形は直径150cmの不整形円形で、深さは45cmである。底には長さ40cm以下の平らな石が32個、2～3段に積み重ねられて入れられていた。このうち使用度の強い石は6点(S8・9)である。埋土から縄文土器深鉢の破片(3)が出土している。

SK03 (図版8、写真図版8)

森ノ本1区で検出された。平面形は短径98cm、短径68cmの楕円形で、深さは20cmである。底には長さ35cmの平らな石とその横にやや小さい石が置かれていた。平らな石(S10)は使用されていた。埋土から縄文土器鉢の破片(4)が出土している。

SK04 (図版8、写真図版9)

森ノ本1区で検出された。平面形は直径130cmの不整形円形で、深さは22cmである。底には長さ25cm以下の石が8個程度入れられていた。明瞭に使用されていたのは磨石(S5)、敲石(S7)である。埋土から縄文土器鉢の破片(5)が出土している。

SK08 (図版8、写真図版9)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径90cm、短径80cmの不整形楕円形で、深さは24cmである。底には長さ30cm以下の石が3個、底から20cm高い位置から中央に沈み込むような形で検出されている。埋土から縄文土器深鉢の破片(8～10)が出土している。

SK09 (図版8、写真図版9)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径90cm、短径70cmの楕円形で、深さは16cmである。底には径15cm程度の円礫が1個入れられていた。埋土からサヌカイト剥片(S2)が出土している。

SK12 (図版8、写真図版10)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径85cm、短径75cmの楕円形で、深さは10cmである。底には長さ40cmの平たい石とその横にやや小さい石が置かれていた。大きい方の石の下には直径30cmの円形で、深さ17cmの土坑がある。大きい石は使用されていた(S11)。埋土から縄文土器深鉢の破片(11)が出土している。

SK14 (図版10、写真図版10)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径198cm、短径78cmの楕円形で、深さは15cmである。南側はさらに8cmほど1段深くなっている。この南側の底から10cm程度上で長さ40cm程度の石が2個と小石数個が検出されている。強く使用されている石1点(S12)と磨石(S6)も含まれている。埋土から土器は出土していない。

SK15 (図版10、写真図版11)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径86cm、短径60cmの楕円形で、深さは12cmである。底から8cm程度上で長さ30cm程度の石が1個検出されている。埋土から縄文土器深鉢の破片(12・13)が出土している。

SK19 (図版9、写真図版11・12)

森ノ本1区で検出された。平面形が185cm×170cmの長方形を呈し、検出面から底までの深さは45cmを測る。底部の南より長径135cm、短径60cmの楕円形の範囲は深さ10cm程度に浅くくぼんでいる。土坑内には長30～50cm大の扁平な石が15個中央に落ち込んだように見つかっている。石は底より10cm以上高い位置の、南北は土坑幅、東西は土坑底の浅い窪みの幅の範囲に置かれている。石材の多くは、石皿(S14～22)として使用されたものを転用したものと考えられる。埋土から縄文土器深鉢・鉢など(46～49)が出土している。人骨などはみつからなかったものの、他の検出例から見て埋葬施設である可能性が高く、石材は被葬者の上に敷き並べられたものと考えられる。

土坑

SK05 (図版10、写真図版13)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径80cm、短径56cmの楕円形で、深さは8cmである。埋土から縄文土器底部(6)、焼土塊が出土している。

SK06 (図版10、写真図版13)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径74cm、短径50cmの隅丸方形で、深さは9cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK07 (図版10、写真図版13)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径75cm、短径52cmの楕円形で、深さは12cmである。埋土から縄文土器深鉢の破片(7)が出土している。

SK13 (図版11、写真図版14)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径118cm、短径100cmの楕円形で、深さは16cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK16 (図版11、写真図版14)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径450cm、短径240cmの楕円形で、深さは10cmである。床面は平坦である。遺構の床面から縄文土器深鉢(18・19)、底部(21・22)や石皿(S13)、埋土から縄文土器深鉢など(14～17・20)の破片が出土している。住居跡とはいえないが、生活の場であった可能性がある。

SK17 (図版12、写真図版15)

森ノ本1区で検出された。平面形が220cm×170cmの楕円形を呈し、検出面からの深さが80cmと他の土坑と比較して、規模の大きく深い土坑である。土坑内からは縄文土器片(23～45)が比較的多く出土し、中層には長さ40～20cmの石材が投げ込まれていたが、強く使用された石材はない。貯蔵穴様の土坑であるが、堅果類などの貯蔵物らしきものは検出されなかった。

SK18 (図版11、写真図版15)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径80cm、短径74cmの楕円形で、深さは10cmである。埋土から無文の縄文土器の細片が出土している。

SK24 (図版13、写真図版15)

森ノ本1区で検出された。平面形は長径160cm、短径84cmの不整楕円形で、深さは28cmである。埋土から縄文土器(50)が出土している。

SK32 (図版13、写真図版16)

森ノ本2区で検出された。平面形は長径115cm、短径70cmの楕円形で、深さは24cmである。埋土から無文の縄文土器の細片と石匙状石器(S3)が出土している。

SK33 (図版13)

森ノ本2区で検出された。平面形は長径94cm、短径80cmの隅丸方形で、深さは12cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK34 (図版13、写真図版16)

森ノ本2区で検出された。平面形は長径86cm、短径72cmの楕円形で、深さは10cmである。遺構に伴って遺物は出土していない。

SK35 (図版13、写真図版16)

森ノ本2区で検出された。平面形は長径56cm、短径54cmの不整形で、深さは18cmである。埋土から無文の縄文土器の細片が出土している。

ピット ピットは約200基程度検出されているが、時期が判明するものはほとんどない。縄文土器が出土しているのはP002・004・005・086・202のみである。P202からは後期の有文土器の比較的大きな破片(51～53)が出土しているが、その他からは無文土器の小破片が出土してい

るにすぎない。

P202

森ノ本2区で検出された。直径26cm、深さ34cmである。埋土から縄文土器深鉢（51～53）が出土している。

2 その他の遺構

溝、ピットなどがある。溝は等高線に平行するもの（SD01・04）と直交するもの（SD02・03）がある。平行するものは人為的なものと考えられるが、直交するものは自然のものかもしれない。SD01は弥生時代、SD03・04は古墳時代、SD02は中世の土器が出土している。ピットから縄文時代以外の土器が出土しているのは須恵器碗が出土したP201のみである。

SD01（図版14、写真図版17）

森ノ本2区の東南隅で検出された。標高150m付近を等高線に平行に流れている。幅40cm、深さ20cmである。検出した延長6.5mの範囲内では床面の高さはほぼ同じである。埋土からは弥生時代中期の土器（57）が出土している。

SD02（図版14）

森ノ本1・2区で検出された。等高線に直交する溝である。延長は21.5mであるが、耕作地の造成により削平された部分がある。検出した範囲内での底部の比高差は2.1mで、西から東に向かって流れる。幅170cm、深さ20cmである。埋土から須恵器碗（59）が出土している。

SD03（図版14）

森ノ本2区で検出された。等高線に直交する溝である。延長は25mであるが、耕作地の造成により削平された部分がある。検出した範囲内での底部の比高差は2.1mで、西から東にやや蛇行して流れる。幅150～80cm、深さ30cmである。埋土から土師器底部（60）が出土している。

SD04（図版14）

森ノ本2区で検出された。標高150.2m付近を等高線に平行に流れている。幅170cm、深さ15cmである。検出した延長約40mの範囲内では床面の高さはほぼ同じである。溝の東側は平坦にされており、耕作地の端に掘られた溝と考えられる。埋土からは土師器体部の破片が出土しているのみである。

P003（写真図版17）

森ノ本1区で検出された。直径30cm、深さ29cmである。埋土上層から石斧（S4）が出土している。

P201

森ノ本2区南部で検出された。直径30cm、深さ12cmである。埋土から須恵器碗（61）が出土している。

第3節 遺物

出土した遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの土器と、石皿・石斧・石匙などの石器がある。南部の縄文時代の遺構に伴う土器、石器が大半で、弥生時代以降の遺物は非常に少ない。

1 土器

出土した土器には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などがある。縄文土器は南部の縄文時代の遺構の埋土中より出土した物が多い。貯蔵穴様の土坑であるSK17からは比較的多くの土器が出土している。弥生時代以降の遺物は非常に少ない。

縄文土器

包含層出土のものはほとんどなく、遺構埋土から出土したものが多く、破片数約340点程度出土している。このうち56点の図化を行った。

SK10 (図版26、写真図版29)

1は縄文土器深鉢である。土坑に埋設された土器である。土地の削平により頸部より上を欠いている。頸部外面は縦方向の条痕、体部外面は横方向の板ナデ、体部内面は横方向のヘラケズリが施されている。底部は焼成後穿孔がなされている。

SK36 (図版26、写真図版29)

2は縄文土器深鉢である。土坑に埋設された土器である。土地の削平により体部下半のみしか残存していない。孔をあけるため、底部ごと破砕されている。内外面とも摩滅のため調整は不明である。右下がりの沈線文の下端部が残存している。

SK02 (図版26、写真図版30)

埋土から11点の土器が出土している。沈線文をもつ口縁部の破片(3)以外は無文土器の小破片である。

3は縄文土器深鉢の外反する口縁部である。口縁端部の内外面はやや肥厚し、内面側は沈線文をもっている。沈線文は肥厚部に弧状文と縦方向の直線文を施し、肥厚部下端に沈線をめぐらしている。内外面ともナデが施されている。

SK03 (図版26、写真図版30)

埋土から1点の土器(4)が出土している。

4は縄文土器の体部破片である。内外面ともナデが施されている。

SK04 (図版26、写真図版30)

埋土から3点の土器が出土している。磨り消し縄文をもつ鉢(5)以外は無文土器の小破片である。

5は縄文土器鉢である。体部上端には縄文地に沈線3条が廻らされている。縄文はRLである。

SK05 (図版26、写真図版30)

埋土から2点の土器が出土している。底部の破片1点(6)と無文土器の小破片1点である。

6は縄文土器底部である。体部外面には細密条痕が施されている。

SK07 (図版26、写真図版30)

埋土から1点の土器が出土している。

7は縄文土器深鉢の頸部と考えられる。内外面ともナデが施されている。

SK08 (図版26、写真図版30)

埋土から8点の土器が出土している。縄文土器鉢の口縁部(8)の他、無文土器の破片7点(うち細密条痕2点(9・10))である。

8は縄文土器鉢の内罅する口縁部である。内外面とも横方向のナデが施されている。外面のナデは粗い。

9・10は縄文土器深鉢の頸部と考えられる。外面には縦方向の条痕、内面には横方向の条痕が施されている。

SK12 (図版26、写真図版30)

埋土から1点の土器が出土している。

11は縄文土器深鉢の頸部と考えられる。外面には縦方向の条痕、内面には横方向の条痕が施されている。

SK15 (図版26、写真図版30)

埋土から10点の土器が出土している。縁帯文の深鉢(12)、磨り消し縄文の浅鉢(13)以外は無文土器の小破片である。

12は縄文土器深鉢の口縁部の破片である。口縁部は波状口縁をなし、口縁の断面形態は千葉1989の福田K2式のb1種新段階のものである。口唇部にはキザミ目(あるいは縄文)が認められる。内外面はナデが施されている。

13は縄文土器浅鉢の口縁部である。沈線が口縁部外面に2条と口唇部に1条に施されている。沈線間は縄文が磨り消されている。縄文はRLである。内面は横方向のナデが施されている。

SK16 (図版26、写真図版31)

遺構内から48点の土器が出土している。18・19・21・22は床面から、その他は埋土から出土したものである。このうち条痕が認められるものは22点である。

14は縄文土器深鉢である。外傾化した口唇部に縄文と1条の沈線が施されている。縄文はLRである。外面は縦方向の条痕の後ナデ、内面は横方向のナデが施されている。

15は縄文土器深鉢の胴部上端の破片である。胴部外面は縄文、頸部外面は縦方向の条痕、内面はナデが施されている。縄文はRLである。

16・17は縄文土器深鉢の口縁部である。外面は縦方向の条痕の後、端部のみ横方向の条痕が施されている。内面は横方向の条痕が施されている。

18は縄文土器深鉢である。口縁部外面は縦方向の条痕の後、端部のみ横方向の条痕が施されている。体部外面は横方向の条痕が施されている。口縁部内面は横方向の条痕が施されている。体部内面は摩滅している。

19は縄文土器深鉢の頸部である。外面はナデ、内面は横方向の条痕が施されている。

20は縄文土器深鉢の胴部である。頸部外面は縦方向の条痕、体部外面は横方向の条痕、内面は横方向の条痕が施されている。

21・22は縄文土器の底部である。21は外面が摩滅している。22は外面にナデが施されている。

SK17 (図版27、写真図版32～35)

土坑埋土から217点の土器が出土している。縄文をもつもの9点、条痕をもつもの55点である。

23は縄文土器深鉢である。口縁部外面に縦方向の2条の沈線、口唇部に1条の沈線が施されている。内外面はナデが施されている。

24は縄文土器深鉢である。口縁端部内外面には沈線が入れられ、外面の沈線より先側には縄文が施されている。縄文はRLである。内外面ともナデが施されている。

25は縄文土器深鉢である。口縁端部は外側にやや肥厚し、肥厚した部分に縄文が施されている。縄文はLRである。内外面ともナデが施されている。

26は縄文土器深鉢である。口縁端部は肥厚せず、端部外面に縄文が施されている。縄文はRLである。内外面ともナデが施されている。

27は小型の縄文土器深鉢と思われる。口縁部の先端は尖り気味で、先端には縄文が施されている。縄文はLRと思われる。外面は縦方向のナデ、内面は横方向のナデが施されている。

28は縄文土器深鉢である。体部外面には縄文が2方向から施され、羽状に見えるようにされている。縄文はRLである。頸部外面及び内面は横方向のナデが施されている。

29は縄文土器深鉢である。口縁部は外側に肥厚し、肥厚した部分に縄文が施されている。体部外面には縄文が2方向から施され、羽状に見えるようにされている。縄文はLRである。頸部外面はミガキ状のナデ、内面は横方向のナデが施されている。

30は縄文土器深鉢である。口縁部は両側に肥厚し、内面には2条の沈線が施されている。表面は摩滅している。

31は縄文土器深鉢である。口縁部は内側に肥厚し、その下端部には沈線が入れられている。また口縁部端部の外面には部分的に斜め方向の沈線が入れられている。内外面とも幅の広い条痕が施されている。口縁部には穿孔が見られる。

32～35は縄文土器深鉢である。口縁端部外面が肥厚している。32は外面が条痕、内面がナデ、33・34は内外面とも条痕、35は内外面ともナデが施されている。

36は縄文土器深鉢である。口縁部は肥厚しない。内外面とも条痕が施されている。

37は縄文土器深鉢である。体部外面は横方向の条痕、頸部外面は縦方向の条痕、内面はナデが施されている。

38～44は縄文土器鉢である。口縁部はやや内彎するか直線的である。口縁端部は肥厚しない。38は内外面とも条痕、39は外面のみ条痕、40～42は内外面ともナデ、43・44は内外面とも幅の広い条痕が施されている。

45は縄文土器底部である。底は凹み底である。表面は摩滅している。

S K 1 9 (図版28、写真図版35)

土坑埋土から13点の土器が出土している。縄文をもつもの1点、条痕をもつもの2点である。

46は縄文土器深鉢である。口縁部は上方に肥厚し、端部に沈線とキザミが入れられている。内外面ともナデが施されている。

47は縄文土器深鉢である。口縁端部は肥厚せず、端部外面に沈線が入れられている。内外面とも条痕が施されている。

48は縄文土器深鉢である。内外面とも条痕が施されている。

49は縄文土器鉢である。口縁部は内唇し、端部は肥厚しない。外面は条痕、内面はナデが施されている。

S K 2 4 (図版28、写真図版35)

土坑埋土から1点の土器が出土している。

50は縄文土器深鉢の頸部である。内外面ともナデが施されている。

P 2 0 2 (図版28、写真図版36)

土坑埋土から12点の土器が出土している。

51は縄文土器深鉢である。口縁部は波状口縁で、口縁部端部外面が突帯状に膨らんでいる。外面には条痕が施されている。

52は縄文土器深鉢である。外面には縦方向の沈線が2条入れられている。

53は縄文土器深鉢である。体部上端には3条の横方向の沈線と逆C字の沈線が入れられ、C字部からは下方に向けて縦方向の沈線が2条入れられている。体部外面は横方向の条痕、口縁部外面は縦方向の条痕が施されている。

包含層 (図版28、写真図版36)

54は縄文土器深鉢である。口縁部は波状口縁で、大きく拡張した縁部には磨り消し縄文で2条の沈線が入れられている。縄文はR Lである。

55は縄文土器深鉢である。口縁部は内外面に拡張し、端部には2条の沈線とキザミが施されている。

56は縄文土器底部である。底部は平底である。

その他土器

S D 0 1 (図版28、写真図版36)

57は弥生土器高杯である。口縁部外面が短く突帯状に突き出ている。

58は弥生土器底部である。

S D 0 2 (図版28、写真図版36)

59は須恵器碗である。

SD03 (図版28、写真図版36)

60は土師器底部である。底部はわずかに尖り気味である。

P201 (図版28、写真図版36)

61は須恵器碗である。底部は回転系切りである。

包含層 (図版28、写真図版29・36)

62・63は弥生土器甕である。62は口縁端部に凹線が施されている。

64は弥生土器壺である。頸部には3条の凹線が施されている。

65は弥生土器底部である。体部外面はタテハケ後ヘラミガキが施されている。

66は土師器甕である。口縁部はやや外反する。体部は球形に近い倒卵形で、外面はタテハケ後ヨコハケ、内面はヘラケズリが施されている。

67は須恵器杯Aである。底部は回転ヘラケズリが施されている。

68は須恵器碗である。底部は回転系切りである。

2 石器 (図版29～34、写真図版37～40)

配石土坑、土坑などから大型の礫石器66点が出土しているのが注目される。このうち摩耗が顕著で使用された痕跡が明らかな、石皿(ないしは台石)と考えられるものが21点である。その他には石鏃、削器、石匙状石製品、太形蛤刃石斧、磨石、敲き石が少数出土している。石鏃を除けば、配石土坑、土坑などから出土したものである。

石鏃 (S1)

サヌカイトを用いた凹基式石鏃である。側縁に効果的な二次加工が施され整った二等辺三角形を呈し、基部の抉りが浅い。森ノ本1区の表土から出土した。

削器 (S2)

サヌカイトの横長剥片を用い、背面側面(上部および右端)に大きめの剥離を施し、腹面側では上部に細かい剥離を施す。刃部は鋭く、腹面側では刃部の広い範囲にわたって微細な剥離が多数認められる。SK09の埋土から出土した。

石匙状石製品 (S3)

サヌカイト製で、上半に抉りを設けつまみ状の握部をつくりだすため一見石匙状であるが、刃部付近の剥離の奥行きが浅いため刃角が鈍く、石匙とするにはいささかの戸惑いを感じる。連続的に横長の剥片を獲得したと思われる石核から得られた横長剥片を用い、背面側の大部分は自然面を残す。SK32の埋土から出土した。

太形蛤刃石斧 (S4)

角閃石ひん岩を用いた伐採斧で、横断面形が楕円形というよりは隅丸長方形を呈している。刃部先

端付近を欠損するが最大幅は体部のほぼ中央付近にあると考えられる。残存端部付近に敲打痕跡が認められず、刃端付近の欠損が伐採時のものか敲打具として二次的な転用が行われた際のものかは判断としない。全面に丁寧な研磨が施されるが、中央よりやや基部寄りにごつごつと敲いた痕跡が集中して観察される。研磨面を木柄に緊縛する際の利便性を配慮して、上半部の研磨を製作時の敲打痕が残存する程度に留められた可能性が考えられる。P O O 3の埋土から出土した。

磨石 (S5・S6)

S5はやや扁平な花崗岩の円礫を用いている。表裏両面が摩耗するが特に図裏面側の摩耗が著しい。周縁にも帯状に摩耗が認められるが、平坦面に比べると弱い。図正面上端に敲打によるつぶれと考えられる小さなくぼみが認められる。ただし重量が1526gと、片手で持ち上げるには重く、規模的にも片手で掌握するのは困難であり、基本的には石皿の上で両手で磨る作業が意図されたものであろう。S K O 4から出土した。

S6は石英閃緑岩の平面形が正円形に近い礫を用いている。表面の風化が激しいが、図裏面側が摩耗しており、図正面上端が打撃により平坦化している可能性がある。S K 14の埋土から出土した。

敲き石 (S7)

石英閃緑岩の平面形が楕円形を呈する扁平な礫を用いており、上下両端に敲打による潰れの範囲を確認することができる。図裏面側が正面側にくらべて平坦でありよく摩耗していることから、磨石としても利用された可能性が高い。S K O 4から出土した。

石皿 (S8～S22)

配石土坑などから出土した大型の礫石器のうち66点を取り上げた。このうち摩耗が顕著で使用された痕跡が明らかな、石皿（ないしは台石）と考えられるものが21点、ほかにも使用された可能性の考えられるものが6点存在する。前者のうち15点を図化した。図化した石器については法量表（付表3）に、それ以外のものについては石材と摩耗の度合い等を付表4に示している。

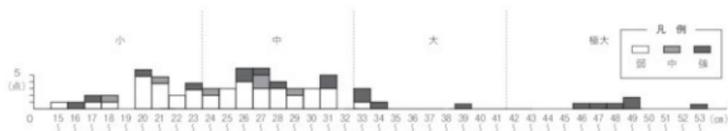
これらの石材は、半深成岩の石英斑岩から流紋岩質凝灰岩にかけての石材が大多数を占め、ごくわずかに砂岩質の石材が含まれる。使用痕跡の認められた台石には石英斑岩より流紋岩質凝灰岩のほうが多く、より緻密で硬質な石材が重視され選択された傾向が読み取れる。

規模としては15～35cmのものが大半であり、15～24cmを小型、24～33cmを中型、33～42cmを大型、42cm以上を極大型とした場合、小型が23点、中型33点、大型6点、極大型6点となる（第3図）。このうち石皿として使用されたものはすべてのサイズにわたっており、大型と極大型についてはほとんどがよく使用されたものである。

石皿の形状は、板石状のS13・S18・S19のほかは大部分が直角礫状を呈し、円礫状となるのはS8・S9・S10・S14・S17と少数である。

一方使用面の形状では、くぼむもの、平坦なもの、やや凸面状を呈するものの3者が認められる。

平坦面の中央が顕著にくぼむのはS8・S21のみで、S13・S K 02付表4-9・S K 02付表4-15・S K 19付表4-51は中央付近が浅くくぼむ。



第3図 配石土坑に用いられた礫の摩耗度別長辺規模の度数分布

やや凸面状を呈するS14でも図正面の中央よりやや左側が、平坦な形状のS16でも図正面右下部分がやや広い範囲でごくわずかに浅くくぼむ。

S9・S11・S20は全体的には平坦であるが、平坦面の中に浅いくぼみを部分的に形成する。S9では3ヶ所、S11では3ヶ所ないし4ヶ所、S20は無数のくぼみを持つが、S20などは素材の礫面に本来存在したくぼみが残存している可能性も十分に考えられる。

板状の石材を用いたS18・S19は平坦面も極めて平滑であり、S22も図正面の上側周縁に出っ張りを残すが、その下の大部分は平滑な使用面となる。S10・S12・S15はやや凸面状を呈する平坦面であり、S10は使用面（図正面）が図の上下2面に分かれ平坦であり、S12は中央付近がよく摩耗してゆるやかなカーブを描いている。

この台石の使用面において、摩耗が認められる箇所を強弱の度合いにより4段階に分けて図中にトーンを施した。最も強い摩耗箇所が認められたのはS18のみで、S11・18・19・20・21に比較的強い摩耗が認められる。

全国的に石皿を集成・考察した植田文雄氏によれば、近畿地方では縄文時代後期に入ってから石皿の利用が盛んになったとしている（植田1998）。植田氏はトチノキが西日本で後期になって普遍化する状況に着目し、渡辺誠氏の提示する堅果類加工工程を踏まえ、トチノキの水づけして柔らかくなった皮を、2枚の台石で挟んでこじりむく作業に適用された可能性を指摘している。

第4章 岡地区の調査

第1節 調査の概要

岡地区は佐用川の西側約100mに位置し、標高164～174m前後で、現河床よりは15m以上高い。岡地区西側の丘陵の傾斜が調査区から約30m西側でやや傾斜が緩くなった（斜度約35%）尾根上の地形で、調査区東側は段丘崖をなしている。調査区の南北は谷地形となっている。

調査区（面積3819m²）は東側の岡1区（3628m²）、西側の岡2区（191m²）に分かれる。

原状は斜面が段状に成り立った平坦地で、荒廃した耕作地及び居住地である。岡1区は成り段を基準にAからJのブロックに分けて調査をおこなったが、平坦面は大きく見ればA・B・岡2区、C、D・E・F・G、Jの4段に分かれる（図版17）。近代に至るまで複数回の造成により遺構面は削平を受けている部分が多い。B・Dブロック、Eブロック北半、Gブロック南半では中世以前の遺構は検出されておらず、近世以降の造成によるものと考えられる。Jブロックも若干の弥生・中世遺構の検出があるものの削平が大きく、近現代に至るまで宅地として利用されていたようである。

検出された遺構の主なものとは弥生時代中・後期の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡・段状遺構・土坑・ピットなどである。

弥生時代の遺構は竪穴住居跡3棟（SHO1～03）などで、A・C・Fブロックで検出された、いずれも低いほうの部分で平坦面の造成により破壊されている。その他Jブロックでピットが検出されている。

古墳～奈良時代については確実にこの時期に属する遺構は検出されていない。Gブロックの竪穴住居跡（SHO4）がこの時期に属する可能性があり、岡2区で検出された焼土は炭のC14分析からこの時期に属するものと考えられる。岡2区、C・Eブロックの包含層から古墳～奈良時代の須壺が出土している。

中世の遺構はA・C・E・F・G・Jブロックで検出された。Cブロックでは段状遺構、E・Fブロックでは掘立柱建物跡が検出されており、中世の遺構が比較的集中している。

第2節 遺構

遺構は弥生時代、古墳～奈良時代の可能性のあるもの、中世のものに分かれる。

1 弥生時代の遺構

竪穴住居跡3棟、土坑、ピットなどが検出された。

SHO1（図版18、写真図版21）

Aブロックで検出された竪穴住居跡である。西半部は調査区外で、東部はCブロックの造成により削平されている。平面形は直径6.2mの円形と考えられ、検出面からの深さは12cmである。検出できた主柱穴は1本で、深さは50cmである。中央土坑は長径76cm、短径46cmの楕円形で、深さは23cmである。土坑の底部には小さなピットが2箇所ある。中央土坑の両脇にも直径20cm、深さ20cmのピットがある。床面から弥生土器壺（69）・甕（71）、埋土から壺（70）・甕（72）が出土している。

SH02 (図版18、写真図版22)

Cブロックで検出された竪穴住居跡である。東半部はF・Gブロックの造成により削平されている。平面形は直径約6mの円形と考えられ、検出面からの深さは55cmである。周壁溝は部分的に3本確認できることから、2回の建て替えが行われたと考えられる。検出できた支柱穴は6本で、深さは75～40cmである。埋土から弥生土器壺(73・74)・甕(75)・底部(76)・脚部(77・78)が出土している。

SH03 (図版19～21、写真図版22～24)

Fブロックで検出された竪穴住居跡である。東部はJブロックの造成や覆乱により削平されている。建て替えにより5段階に分かれる。第1段階は平面やや不整形で、規模は南北8.4mである。検出面から床面までの深さは50cmである。支柱穴は6本の可能性が高い。中央土坑は第5段階の住居によって破壊されているため、わずかにその底部が残存するのみで、その形態は判然としない。以下第4段階までは基本的な構造は同様と思われる。第2段階は南北8.4mと第1段階と同様であるが、西側に拡張している。第3段階は南北9.8mとなり、西側も拡張し、地山中の大岩が住居内に突き出して状態になっている。南側に突出部が付いていた可能性がある。第4段階では南北9.4mと縮小され、西側の大岩が住居内に突出しないようにされている。第5段階は平面がやや方形気味の円形で、南北5.9mと縮小し、床面をさらに15cmほど下げている。支柱穴は4本と考えられる。中央土坑は一〇型式のものである。上面では両土坑が一体に窪んでいる。一土坑は下部が長径70cm、短径20cmの楕円形で、深さは23cmである。埋土には炭が比較的多く含まれていた。〇土坑は下部が1辺50cm程度の方形で、深さは33cmである。床面から弥生土器壺(79・81～85)・高杯(80)、中央土坑から弥生土器壺(86・87)・底部(88)、周壁溝から石斧(S25)、埋土から弥生土器壺(89・90)・壺(91)・鉢(92)・底部(93・94)・高杯(95・96)・楔形石器(S23)が出土している。第5段階の中央土坑から出土した炭のC14年代は2060±30yrBP、2110±30yrBPである(第5章第3節参照)。

SK21

Cブロックで検出された。平面形は長径96cm、短径64cmの楕円形で、深さは46cmである。埋土から弥生土器器台(97)が出土している。

P113

Jブロックで検出された。直径27cmで、深さ38cmである。弥生土器壺(98)が出土している。

2 古墳・奈良時代の遺構

竪穴住居跡1棟(SH04)・焼土がこの時期に属する可能性がある。

SH04 (図版22、写真図版25)

Gブロックで検出された竪穴住居跡である。東部はJブロックの造成により削平されている。平面形は一辺約4.6mの方形と考えられる。床面は削平されている。検出できた支柱穴は4本で、深さは60～35cmである。住居跡に伴って遺物が出土していない。

焼土

岡2区で検出された。長径80cm、短径70cmの範囲で、強く被熱を受けている。焼土面に伴って炭が出土している。炭のC14年代は1220±30yrBPである（第5章第3節参照）。

3 中世の遺構

掘立柱建物跡（SB01）1棟、段状遺構2基、土坑、ピットなどが検出されている。

SB01（図版22）

E・Fブロックで検出された掘立柱建物跡である。規模は南北2間（6.0m）、東西2間以上（5.1m）で、総柱と考えられる。建物の方位はN23°Wである。柱穴より土師器小皿（117～119）、染付磁器鉢（123）が出土している。

段状遺構1（図版23、写真図版25）

Cブロックで検出された。幅は8mで、西端には溝が掘られている。成形された平坦面にはピットが認められるが、建物には復元できない。P040・047からは土師器皿（111・112）が出土している。

段状遺構2（図版23、写真図版26）

Cブロックで検出された。幅は5.4mで、成形された平坦面にはピットが認められるが、建物には復元できない。遺構に伴って遺物は出土していない。

P002（写真図版28）

Cブロックで検出されたピットである。直径は60cm、深さは30cmである。埋土から土師器皿（108・109）が出土している。

P038

Cブロックで検出されたピットである。直径は40cm、深さは28cmである。埋土から土師器皿（110）が出土している。

P040

Cブロックの段状遺構1内で検出されたピットである。直径80cm、短径44cm、深さは54cmである。埋土から土師器皿（111）が出土している。

P041

Cブロックで検出されたピットである。直径は50cm、深さは40cmである。埋土から土師器皿（113・114）が出土している。

P047

Cブロックの段状遺構1内で検出されたピットである。直径は43cm、深さは22cmである。埋土から土

師器皿（112）が出土している。

P 0 4 8

Cブロックで検出されたピットである。直径は45cm、深さは29cmである。埋土から土師器皿（115）が出土している。

P 0 9 7

Cブロックで検出されたピットである。直径は34cm、深さは41cmである。埋土から土師器皿（116）、備前焼播鉢（125）が出土している。

P 0 9 0

Eブロックで検出されたピットである。長径50cm、短径40cm、深さは43cmである。埋土から土師器皿（120・121）、備前焼播鉢（126）が出土している。

P 1 0 0

Fブロックで検出されたピットである。直径は50cm、深さは32cmである。埋土から土師器皿（122）が出土している。

P 0 4 9

Gブロックで検出されたピットである。直径は33cm、深さは28cmである。埋土から肥前系施釉陶器皿（124）が出土している。

P 1 1 4（写真図版28）

Gブロックで検出されたピットである。直径は42cm、深さは13cmである。埋土から銅銭（M 3～6）が出土している。銅銭の下には板材が付着していた。

S K 0 3（図版24、写真図版26）

Aブロックで検出された土坑である。直径95cmの平面不整形で、深さは30cmである。埋土から土師器皿（127・128）が出土している。

S K 0 4（図版24、写真図版26）

Aブロックで検出された土坑である。幅2.3m、長さ3.8m以上の平面不整形で、深さは40cmである。埋土から土師器皿（130・131）が出土している。

S K 1 0（図版24）

Cブロックで検出された土坑である。長さ110cm、幅87cmの平面長方形で、深さは23cmである。埋土から土師器皿の細片が出土している。

SK12 (図版24、写真図版27)

Cブロックで検出された土坑である。長さ210cm、幅122cmの平面不整形で、深さは14cmである。埋土から土師器皿(132)が出土している。

SK32 (図版25、写真図版27)

Cブロックで検出された土坑である。長さ260cm、幅200cmの平面長方形で、深さは28cmである。埋土から土師器皿(134～136)・鍋(137)、備前焼播鉢(138)が出土している。

SK37 (図版25)

Cブロックで検出された土坑である。直径70cmの平面円形で、深さは40cmである。埋土から土師器皿(133)が出土している。

SK19 (図版25、写真図版28)

Fブロックで検出された土坑である。長さ187cm、幅133cmの平面長方形で、深さは28cmである。埋土から土師器細片が出土したのみである。

SK35 (図版25、写真図版27)

Fブロックで検出された土坑である。長さ130cm、幅100cmの平面不整形長方形で、深さは20cmである。北端には平たい石が置かれていた。埋土から備前焼播鉢(139)が出土している。

第3節 遺物

1 土器

弥生土器

竪穴住居跡出土のものが多く、SH03第5段階に属する土器が比較的多く出土している。

SH01 (図版35、写真図版41・42)

床面から弥生土器壺(69)・甕(71)、埋土から弥生土器壺(70)・甕(72)が出土している。

69は壺である。体部最大径の部分に2段の列点文が施されている。

70は壺である。頸部には凹線文が施され、体部には櫛波状文と直線文が施されている。

71・72は甕である。71は体部外面上位が平行タキ後タテハケ、体部外面中位が斜め方向のハケ後タテハケが施されている。

SH02 (図版35、写真図版41)

埋土から弥生土器水差し(73)・無頸壺(74)・甕(75)・底部(76)・脚部(77・78)が出土している。

73は水差しである。頸部には2条の凹線が施され、把手は剥離している。

74は無頸壺である。体部外面に2条の凹線が施されている。

75は甕である。

76は底部である。

77は高杯の脚部である。

78は台付鉢の脚部と思われる。

SH03 (図版35・36、写真図版42～44)

第1～4段階の床面から甕(79)、第5段階の床面から甕(81～85)・高杯(80)、第5段階の中央土坑から甕(86・87)・底部(88)、南側突出部埋土から甕(89)、埋土から甕(90)・壺(91)・鉢(92)・底部(93・94)・高杯(95・96)が出土している。

79は甕である。体部外面はタテハケ後ヘラミガキが施されている。

80は高杯である。口縁部外面に3条の凹線が施されている。

81～85は甕である。81・82は口縁部の端面に凹線が施されている。83は体部外面にヘラミガキが施されている。84・85は小型の甕である。85は体部外面にヘラミガキが施されている。

86・87は甕である。86は口縁部の端面に凹線が施されている。

88は底部である。体部外面にヘラミガキが施されている。

89は甕である。体部内面上位にハケが施されている。

90は甕である。口縁部の端面に凹線が施されている。

91は壺である。口縁部の端面に凹線が、頸部にはやや乱れた櫛描波状文が施されている。

92は脚付鉢と思われる。体部外面にはヘラミガキが施されている。頸部には穿孔がなされている。

93・94は底部である。

95は小型の高杯である。

96は高杯である。口縁部外面に凹線が施されている。

SK21 (図版36、写真図版44)

97は器台である。鉢部外面にはヘラミガキが施されている。

P113 (図版36、写真図版44)

98は広口壺である。口縁部の端面に列点文が施されている。

包含層 (図版36、写真図版44)

99はCブロック、100はFブロック、101はHブロック、102は同2区の包含層から出土したものである。

99は広口壺である。口縁部の端面に凹線文が施されている。

100は甕である。口縁部は短く、頸部はくびれない。口縁部の端面に凹線が施されている。

101は高杯の脚部である。外面はヘラミガキの後、脚柱部に4条1単位の凹線文が2段、脚部部に2条の凹線文が施されている。

102は器台と思われる。垂下する口縁部の端面に凹線文が施されている。内面はヘラミガキが施されている。

古墳・奈良時代の土器（図版37、写真図版45）

古墳・奈良時代の土器は包含層からわずかに出土したもののみである。103はⅡ区、104はEブロック、105～107はCブロックの包含層から出土したものである。

103は須恵器杯B蓋である。

104は須恵器杯である。

105は須恵器杯Aである。底部はヘラ切り未調整である。

106は須恵器杯Bである。底部は回転ヘラケズリが施されている。

107は須恵器甕である。

中・近世の土器・陶磁器

ピット、土坑から良好な個体は少ないものの中世の土器・陶磁器は一定量出土している。近世については十分に調査を行っていないので時期の明らかな陶磁器を中心に取り上げる。

S B 0 1（図版37、写真図版45・46）

P 0 5 2より土師器皿（118・119）、P 0 5 3より土師器皿（117）、P 0 9 3より染付磁器鉢（123）が出土している。

117～119は土師器皿である。117・118は手づくね成形で、119は底部糸切りである。

123は染付磁器鉢である。体部には縦方向の凹線が入れられている。中国製と考えられる。

段状遺構1（図版37、写真図版45）

平坦部のP 0 4 0から土師器皿（111）、P 0 4 7から土師器皿（112）が出土している。

111は土師器皿である。手づくね成形である。

112は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 0 2（図版37、写真図版45・46）

108・109は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 3 8（図版37、写真図版45）

110は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 4 1（図版37、写真図版45）

113・114は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 4 8（図版37、写真図版45）

115は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 9 7（図版37、写真図版45・46）

116は土師器皿である。手づくね成形である。

125は備前焼播鉢である。乗岡中世3 b期で、15世紀前葉である（乗岡2000）。

P 0 9 0（図版37、写真図版45・46）

120・121は土師器皿である。手づくね成形である。

126は備前焼播鉢である。播目は6本1単位である。乗岡中世4 b期で、15世紀第2四半期である。

P 1 0 0（図版37、写真図版45）

122は土師器皿である。手づくね成形である。

P 0 4 9（図版37、写真図版46）

124は肥前系施釉陶器皿である。体部下半と高台は露胎である。見込みに砂目跡が付着している。

S K 0 3（図版37、写真図版47）

127・128は土師器皿である。手づくね成形である。

129は龍泉窯系青磁碗である。口縁部が強く外反する。

S K 0 4（図版37、写真図版47）

130・131は土師器皿である。手づくね成形である。

S K 1 2（図版37、写真図版47）

132は土師器皿である。手づくね成形である。

S K 3 2（図版37、写真図版47）

134～136は土師器皿である。手づくね成形である。

137は土師器鍋である。鉄かぶと型Ⅱ類で、15世紀中頃である（長谷川2007）。

138は備前焼播鉢である。播目は7本1単位である。乗岡中世3～4期頃のものと思われる。

S K 3 7（図版37、写真図版47）

133は土師器皿である。手づくね成形である。

S K 3 5（図版37、写真図版47）

139は備前焼播鉢である。播目は1単位10本以上である。乗岡近世2期、17世紀第2・3四半期頃のものと考えられる。

Aブロック・岡2区包含層（図版37、写真図版48）

140・141は備前焼播鉢である。140は播目が1単位6本である。底部にはシツタ痕が認められる。乗岡中世4 b期である。141は播目が1単位8本である。乗岡中世5 a期である。

142は須恵器碗である。底部は回転糸切りである。

143は白磁碗である。内面には型押し放射状文が入れている。壺付と高台内は露胎である。
144は龍泉窯系青磁碗である。見込みには花文のスタンプが押されている。壺付と高台内は露胎である。

Cブロック包含層（図版38、写真図版46・49）

145・146は土師器皿である。145は手づくね成形である。146は底部系切りである。
147は土師器土鍾である。
148は瓦質土器鍋である。口縁部が受け口状に屈曲している。
149・150は備前焼播鉢である。149は播目が1単位7本である。乗岡中世3b期である。150は乗岡中世5b期で、15世紀末である。
151は備前焼壺である。
152～155は龍泉窯系青磁碗である。152・153は細連弁文碗である。155は見込みに草花文が押されている。

Dブロック包含層（図版38、写真図版46・49）

156は京・信楽系施釉陶器蓋である。
157は肥前系染付磁器碗である。見込みには手描き五弁花文が入れている。

Eブロック包含層（図版38、写真図版49）

158は土師器皿である。手づくね成形である。

Fブロック包含層（図版38、写真図版46・49）

159は肥前系染付磁器碗である。
160は備前焼皿である。底部は回転系切りである。

Gブロック包含層（図版38、写真図版50）

161は備前焼播鉢である。播目は1単位7本である。確認59Tより出土した。
162は堺・明石系播鉢である。体部の播目は1単位12本、底部の播目は1単位10本である。

Jブロック包含層（図版38、写真図版49）

163は土師器羽釜である。口縁部は内彎する。

ブロック不明包含層（図版38、写真図版49）

164は龍泉窯系青磁碗である。連弁文碗である。

2 金属製品（図版38、写真図版51）

M3～6はP114、M1・2・7は包含層、M8は岡1区北側の確認トレンチ（T-35）から出土したものである。

- M1は火打金である。
M2は鉄釘である。
M3～5は621年初鋳の開元通寶である。
M6は1017年初鋳の天禧通寶である。
M7は1023年初鋳の天聖元寶である。
M8は1038年初鋳の皇宋通寶である。

3 石器 (図版39、写真図版52)

出土した石器は非常に少ない。SHO3第3段階の周壁溝から扁平片刃石斧(S25)、SHO3第5段階埋土から楔形石器(S23)、SHO3第5段階の埋土中および中央土坑埋土から金山産サヌカイトの1cm程度の小型の剥片および石核が出土している。包含層からは石庖丁(S24)が出土している。

楔形石器(S23)

図上下端部に階段状剥離が認められ、左右両端に剪断面を持つ。全体的にはさほど細かい剥離は施されないものの、下端の一部と上端腹面側に集中する微細な剥離が観察される。

石庖丁(S24)

黄灰色の凝灰質頁岩を用いた磨製石庖丁の、研磨を施す前段階である細部調整段階に属する製作途中品である。片面に粗加工時に残された自然面を留めているが、周縁付近のさらに細かい調整の段階へと進んでいる。すなわち、上下端部に細かい単位の剥離が及び階段状剥離が発達しており、周縁部の厚みを丁寧に減らす措置が講じられている。この微細な剥離は両極打法によって施された可能性が想定され、縦方向の欠損および残存部分の層理方向の剥離はこの打撃の際に生じた蓋然性が考えられる。

扁平片刃石斧(S25)

極めて緻密な細粒砂岩を用い、平面形は左右両側縁が刃部に向かって若干開き気味の台形状を呈する。全面に極めて丁寧な研磨が施され表面がツヤツヤである。刃部は刃先が鋭く研ぎ出され、前主面側から大きく2段に研ぎ分けられるが、刃部範囲内外ともに明確な鋸は持たない。後主面側からも積極的に研ぎ出されるために、刃部付近の縦断面形における後主面側の形状も若干外反気味を呈している。前主面の基部付近の3側縁際が緩い角度で研ぎ減らされるが、これは木柄の装着をスムーズにするための措置であろうか。体部においても前主面の両側縁際を緩やかな傾斜に研ぎ減らしている。

第5章 自然科学的分析

第1節 延吉遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1 はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査地区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、延吉遺跡における地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、遺跡の各調査地区（岡地区と森ノ本地区）で堆積物の観察を行った。地形分類は佐用川上流部の広い範囲と遺跡周辺とで行い、前者では1万分の1空中写真を、また後者については5,000分の1空中写真を用いた。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査地区付近における地形環境を考察した。

2 遺跡周辺の地形分布

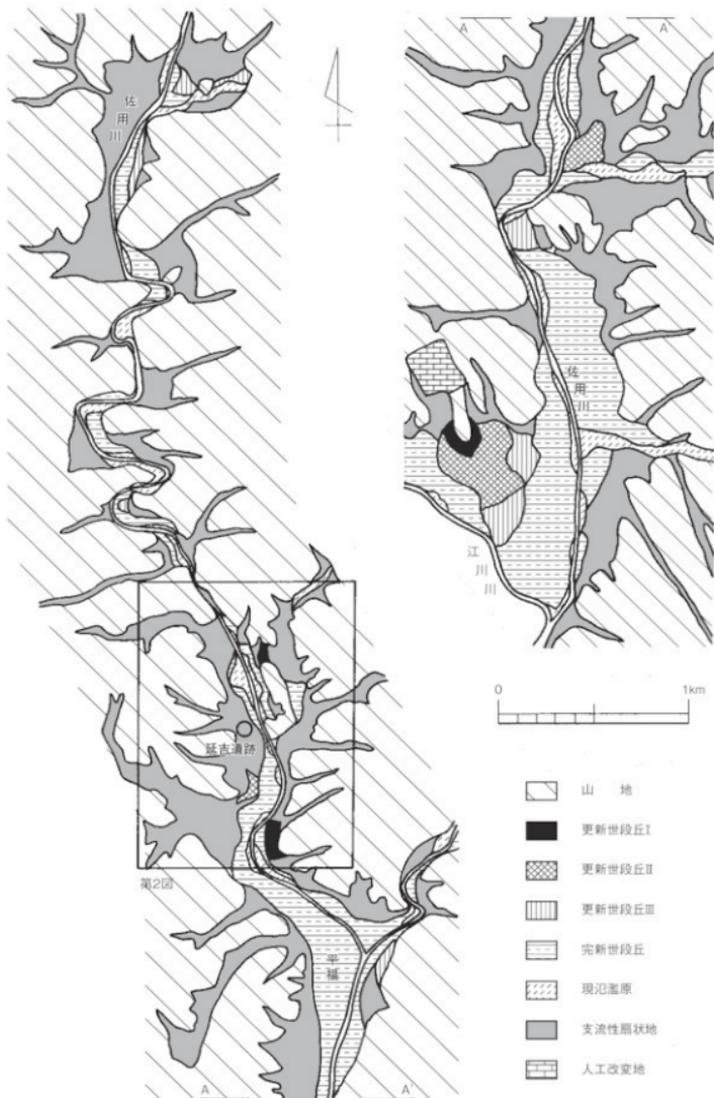
(1) 佐用川上流部の地形

本遺跡は佐用川の上流部に位置する。佐用川は兵庫県西部を瀬戸内海へ南流する千種川の支流で、流域には山地とそれを刻んで形成された狭長な平野がみられる。平野は佐用市街地が位置する付近で最も開け、そこには幅約1kmの盆地が発達する¹⁾。盆地の北部では佐用川と江川が合流し、それより上流には数本の支流を合わせる佐用川に沿って幅500m以下の平野がほぼ南北に連続して延びる。本遺跡の調査地区より約700m上流以北では、狭窄部が多くなり、平野は断続的に分布するとともに幅が減少する。

このような佐用川上流部の平野には、更新世段丘、完新世段丘、現況灌原、および支流性扇状地が認められる（第1図）。更新世段丘はさらに3面に細分され、本稿ではこれらを高位のものから順に更新世段丘Ⅰ～Ⅲと呼ぶ。

各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘〕 更新世段丘Ⅰ～Ⅲは、あまり発達しておらず、断続的に分布する。佐用川の主流沿い



第1図 佐用川上流部の地形分類図

では、それぞれ数ヶ所に分布するのみで、各段丘面の面積は小さい。更新世段丘Ⅰは比高7～8m、更新世段丘Ⅱは比高約5mの崖を有し、段丘面には緩やかな起伏がみられる。更新世段丘Ⅲは、約2mの比高をもち、ⅠやⅢに比してやや多く分布する。

〔完新世段丘・現犯蓋原〕 完新世段丘は比較的良好に発達する。これは、調査地区より上流では断続的な分布であるものの、下流ではほぼ連続し、とくに平野がやや開ける平福付近では、その発達が良好である。段丘崖の比高は数十cmで、段丘面は佐用川の河床とほぼ同じ勾配で下流へ傾斜する。一方、現犯蓋原は、佐用川の現流路に沿って断続的に認められ、完新世段丘Ⅰに次いで発達がよい。これは、最も低い地形面で、洪水の際に冠水する危険性が最も高い。

〔支流性扇状地〕 この地形は山地を刻む小規模な谷中から山麓にかけて発達する。これは平野の周囲にみられる山地から堆積物が供給されて形成されたもので、地表傾斜は11.9～35.0%と急である。平福の南西や調査地区付近などでは複合扇状地をなしており、佐用川上流部の平野では比較的大きな面積を占める。岡地区と森ノ本地区はこうした支流性扇状地に位置する。

(2) 調査地区周辺の地形

本遺跡の調査地区周辺には、おおむね南流する佐用川に沿って幅300m以下の狭長な平野が延び、その周囲には標高350m前後の山地がみられる。平野には、更新世段丘ⅠとⅡ、完新世段丘、現犯蓋原、および支流性扇状地が認められ、更新世段丘Ⅲは分布しない(第2図)。支流性扇状地はさらに4面に細分され、本稿ではこれらを高位のものから支流性扇状地Ⅰ～Ⅳと呼ぶ。これらのうち、調査地区周辺には支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅳの3面がみられ、支流性扇状地Ⅰには岡地区のほとんどが、またⅣには森ノ本地区が位置する。

調査地区周辺では、それぞれの地形が次のような特徴をもつ。

〔更新世段丘Ⅰ〕 この段丘は調査地区北方の大河内と南方の友延付近に分布する。段丘面はいずれも面積が小さく、段丘崖の比高は7～8mである。調査地区北方の段丘面には緩やかな起伏がみられるものの、南方のものには人工的な地形変化のためそれが認められない。

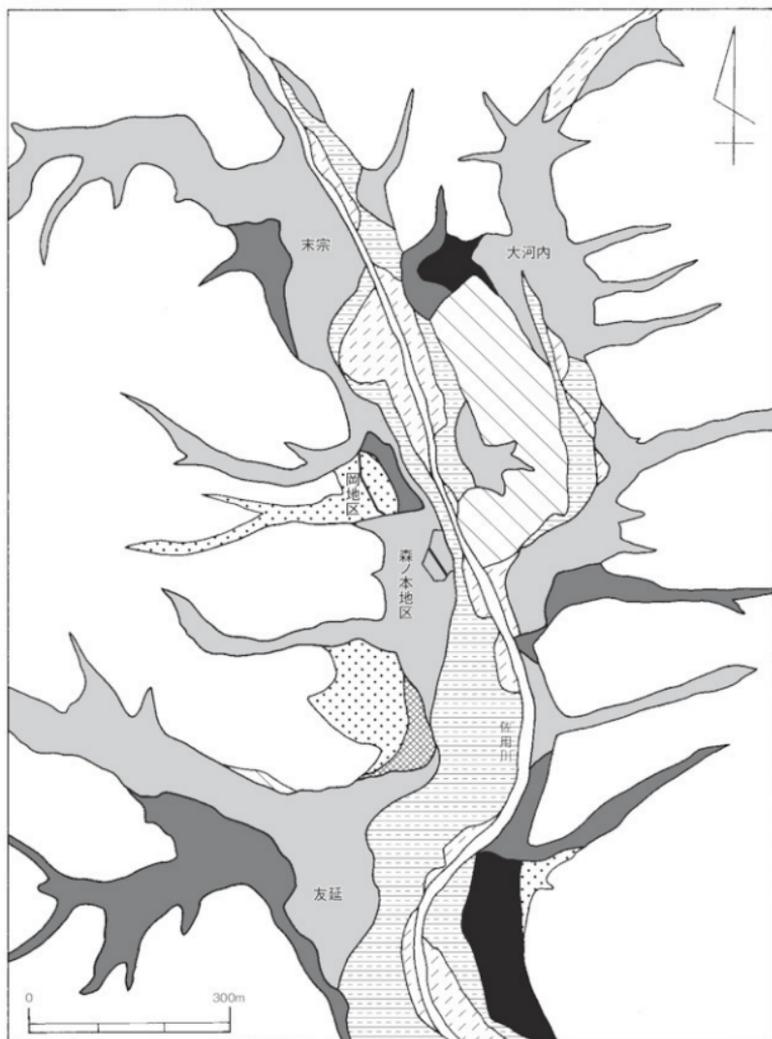
〔更新世段丘Ⅱ〕 これは調査地区の南側に1ヶ所だけ分布する。段丘面は、更新世段丘Ⅰと同様に狭く、比較的平坦である。段丘崖は約5mの比高をもち、西側に接する支流性扇状地Ⅰとは2～3mの崖で境される。

〔完新世段丘〕 この段丘はとくに調査地区より下流でよく発達する。段丘面は、ほぼ平坦で、下流方へ緩傾斜で高度を減じる。現犯蓋原より50～60cm高く、境界には段丘崖がみられる。

〔現犯蓋原〕 これは佐用川とその支流に沿って断続的に細長く分布する。更新世段丘に比べて発達がよく、中でも末宗と友延付近では面積が比較的大きい。地表は佐用川の河床より1～2m高く、調査地区東側の河床には基盤岩が露呈している。

〔支流性扇状地Ⅰ〕 この扇状地は、あまり発達しておらず、小面積のものが3ヶ所で認められる。これは、段丘化しており、支流性扇状地Ⅱとの境界には7～8mの崖がみられる。段丘面は佐用川上流部の平野にみられる地形の中で最も高い。その傾斜は支流性扇状地で最大の約35.0%で、段丘面は山地側から佐用川の現流路に向かって高度を減じる。扇端では更新世段丘Ⅰと傾斜変換線で接しており、支流性扇状地Ⅰはそれと同時に形成されたことが知られる。

〔支流性扇状地Ⅱ〕 これは断続的に6ヶ所で認められる。支流性扇状地Ⅳとの間には3～5mの段丘



第2図 岡・森ノ本地区周辺の地形分類図

崖がみられ、段丘面は約15.6%の傾斜で高度を下げる。調査地区付近では確認できないものの、それより約2.5km南方では支流性扇状地Ⅱが更新世段丘Ⅱと傾斜変換線で接している。

〔支流性扇状地Ⅳ〕この地形は支流性扇状地の中で最も発達が良い。多くの山麓では、これが更新世段丘Ⅰ・Ⅱや支流性扇状地Ⅰ・Ⅱの段丘崖下に形成されている。地表傾斜は、他の支流性扇状地より緩く、約11.9%である。この扇状地は、前面に分布する完新世段丘と傾斜変換線で接し、現記氾原との境界には比高数十cmの崖がみられる。

3 調査地区における堆積物の特徴

(1) 岡地区の堆積物について

岡地区は、ほとんどの範囲が支流性扇状地Ⅰに位置し、調査地区の北端と南端は支流性扇状地Ⅳに分布する。これらのうち調査地区の北端では、支流性扇状地Ⅳの範囲が極めてせまく、その堆積物がほとんど観察できない。ここでは、北端と南端を除く調査地区の堆積物と、南端で観察されるそれについて述べる。

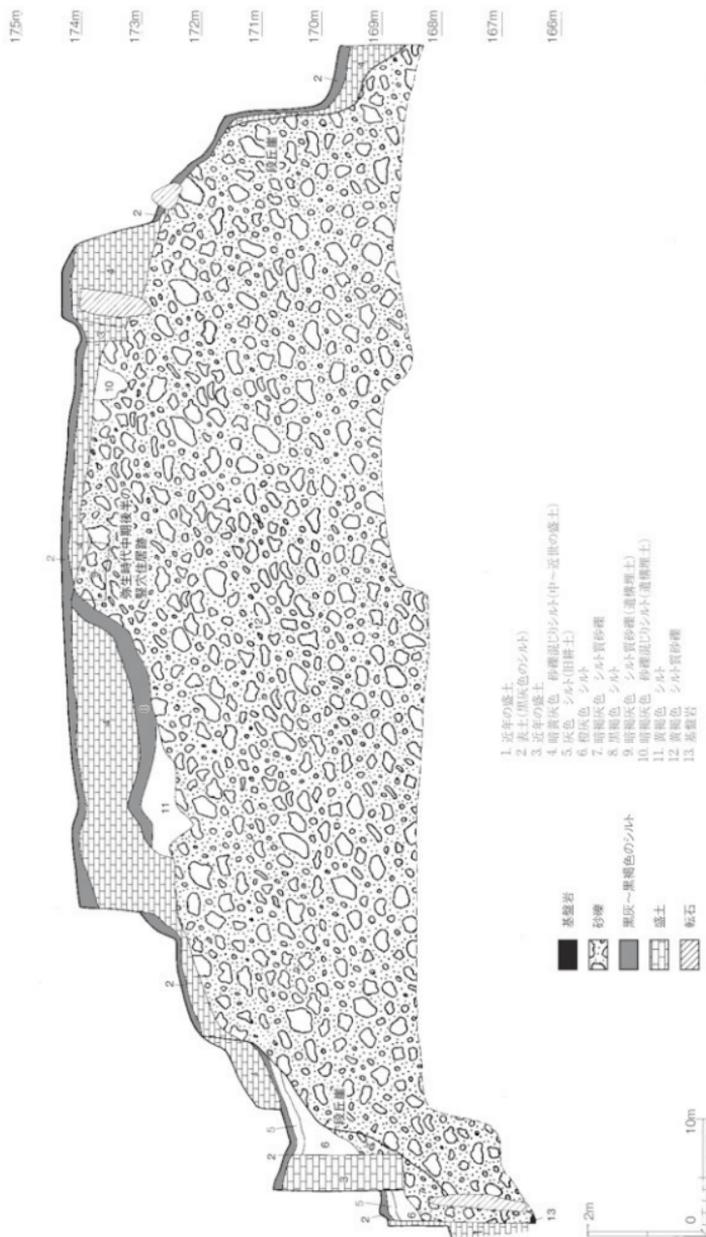
a) 北端と南端を除く調査地区の堆積物

この範囲には、下位から順に黄褐色のシルト質砂礫（第3図の堆積物12）、黄褐色のシルト（同11）、黒褐色のシルト（同8）、暗黄灰色の砂礫混じりシルト（同4）、近年の盛土（同3）、および表土（同2）が認められる（第3図）。

これらのうち、最下位で観察される黄褐色のシルト質砂礫（同12）は、扇状地堆積物に相当し、6m以上の厚さをもつ。礫は径7～63cmの角礫を主体とし、最大で径1.6mの巨礫を含む。層理はみられず、これは土石流に伴う堆積物であると考えられる。この上位にみられる黄褐色のシルト（同11）と黒褐色のシルト（同8）は扇状地を覆う堆積物である。黒褐色のシルト（同8）は、黄褐色シルト（同11）の上部が土壌化して生成された旧表土で、堆積物には弥生時代中期と古墳時代～奈良時代などの遺物が含まれる。なお、調査地区の北端と南端では、これらの堆積物が下刻されてきた段丘崖が認められる。

これらの堆積物を覆う暗黄灰色の砂礫混じりシルト（同4）は15世紀ころ以降に施された盛土である。混入する礫は径1～5cmの角礫が多い。層厚は、下位の黄褐色シルト質砂礫（同12）や黒褐色シルト（同8）の上面が低くなる箇所大きく、最大で約1.5mである。上面はほぼ平坦であり、盛土の目的は居住地や耕地の造成にあると考えられる。この盛土は異なる時期に数度にわたって施されたと推定される。

以上のような堆積物のうち、黄褐色のシルト（同11）と黒褐色のシルト（同8）は局所的に分布する。その理由は、これらが15世紀ころ以降の人為的な地形改変の際に削り取られたためである。このような人為的改変によって遺構検出面は階段状を呈する。調査地区の遺構検出面には、4つ程度の平坦面が存在し、それらの境界に比高1.5～2mの崖がみられる。平坦面は、南北に細長く、幅が10～20m、長さが最大のもので80m以上に及ぶ。平坦面の端付近は主に盛土が施された箇所にあたり、そこでは弥生時代中期後半と古墳時代～奈良時代の堅穴住居跡、ならびに15世紀の掘立柱建物跡などが検出されている。他方、堆積物が削り取られた平坦面の中央部から崖下にかけては、15世紀ころや江戸時代の遺構が分布する。人為的な改変はそれぞれの遺構がつくられた直前に実施されたと考えられる。



第3図 岡地区における西脇断面区

b) 調査地区南端の堆積物

ここでの堆積物は、下位から基盤岩（第3図の堆積物13）、暗褐色のシルト質砂礫（同7）、橙灰色のシルト（同6）、灰色のシルト（同5）、近年の盛土（同3）、表土（同2）、および近年の盛土（同1）である（第3図）。

基盤岩（同13）はその最上部が部分的に観察される。これは西側の山地から連続するもので、上面は現地表下約2.5mの深さにみられる。基盤岩より上位の堆積物は、支流性扇状地Ⅳを構成するもので、支流性扇状地Ⅰの段丘崖下に認められる。それらのうち最下位にみられる暗褐色のシルト質砂礫（同7）は、扇状地堆積物に該当し、厚さが約1.7mである。礫は、径5～27cmの角礫を主体とし、最大で径57cmのものが観察される。橙灰色のシルト（同6）と灰色のシルト（同5）はそれを被覆する堆積物で、灰色シルトは橙灰色シルトの上部が土壌化した旧耕土にあたる。

(2) 森ノ本地区の堆積物について

森ノ本地区は同地区の南側に発達する支流性扇状地Ⅳの扇端付近に位置する。この調査地区では、下位から褐色のシルト質砂礫（第4図の堆積物22）、黄褐色の砂礫混じりシルト（同21）、オリブ褐色の砂礫混じりシルト（同20）、灰黄褐色の砂礫混じりシルト（同14）、暗オリブ褐色の礫混じり砂質シルト（同13）、オリブ褐色の砂礫混じりシルト（同9）、灰黄褐～褐色のシルト（同8）、オリブ褐色の砂礫混じりシルト（同7）、灰黄褐色の砂質シルト（同5）、および表土（同2）が認められる（第4図）。

最下位にみられる褐色のシルト質砂礫（同22）は扇状地堆積物に該当する。礫は、径2～15cmの角～亜角礫を主体とし、最大で径50cmである。上面は現地表と同様に東へ傾斜する。

その上位に位置する黄褐色の砂礫混じりシルト（同21）から暗オリブ褐色の礫混じり砂質シルト（同13）までは、扇状地を覆う堆積物である。いずれも東へ緩やかに傾斜し、それぞれに混入する礫は径1～3cmの角～亜角礫が主体となる。これらの堆積物は調査地区の中央付近から南部に局所的に分布する。これは、それぞれの堆積後に洪水による侵食や耕地を造成するための人為的な変更があったためである。こうした堆積物のうち、オリブ褐色の砂礫混じりシルト（同20）には縄文時代後期の遺物が部分的に含まれ、調査地区の南部ではその下面から同時期の配石土坑や土坑などが検出されている。また、調査地区の南東部では、弥生時代中～後期の溝跡が検出され、その周囲は水田跡の可能性がある。これらの層位は水田造成時と後世の人為的な変更のため判然としにくい。

なお、調査地区の北西部では、黄褐色の砂礫混じりシルト（同21）から暗オリブ褐色の礫混じり砂質シルト（同13）までの堆積物と同じ層準に、暗褐色の砂質シルト（同10）と黒褐色の砂礫混じりシルト（同11）が局所的に分布する。これらの堆積物は、異なる地点に離れて存在するため、詳細な層位が不明である。

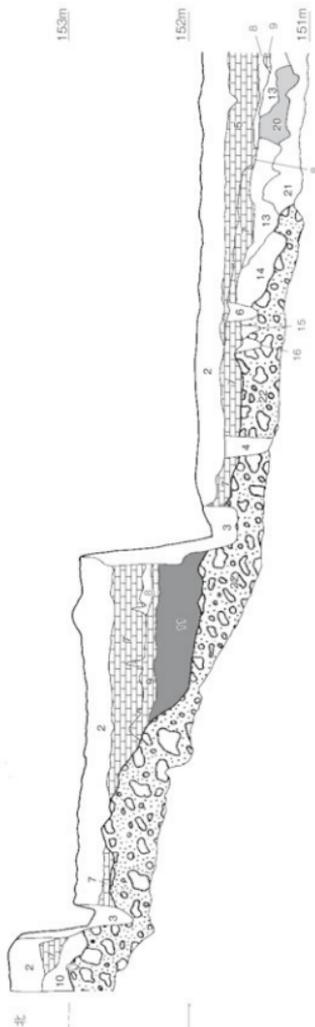
以上の堆積物を覆うオリブ褐色の砂礫混じりシルト（同9）と砂礫混じりシルト（同7）、ならびに灰黄褐色の砂質シルト（同5）は盛土であり、その間に挟まれる灰黄褐～褐色のシルト（同8）は旧耕土に相当する。盛土は、旧耕土の上下で大きく2つに分けられ、少なくとも2度施されたことが知られる。これらの盛土は、地表が傾斜する支流性扇状地Ⅳに階段状の棚田を造成するため施されたもので、盛土を行わなかった地点では堆積物が人為的に削り取られたと考えられる。最初の盛土であるオリブ褐色の砂礫混じりシルト（同9）はせまい範囲に、また2度目の盛土にあたるオリブ褐色の砂

15.4m

15.3m

15.2m

15.1m



- Y.O. 砂礫
- 黒灰～黒褐色のシルト
 - 盛土
 - 竣工時や後期の遺物を含む埋積物



1. 確認調査点トレンチの盛土

2. 表土
3. 砂礫
4. 砂礫水層
5. 黒褐色 砂質シルト(盛土)
6. 黒褐色 砂質シルト(遺構埋土)
7. オリーブ褐色 砂礫混シルト(盛土)
8. 灰黄褐色 シルト(埋土)
9. 灰黄褐色 砂礫混シルト(盛土)
10. 黒褐色 砂質シルト
11. 黒褐色 砂礫混シルト
12. 黒褐色 砂礫混シルト(遺構埋土)
13. 黒カラー褐色 礫混じり砂質シルト
14. 灰黄褐色 砂礫混シルト
15. 灰黄褐色 砂礫混シルト(遺構埋土)
16. 灰黄褐色 礫混じり砂質シルト(遺構埋土)
17. 灰黄褐色 礫混じり砂質シルト(遺構埋土)
18. 黒褐色 砂礫混シルト(遺構埋土)
19. 黒灰黄色 砂質シルト(遺構埋土)
20. オリーブ褐色 砂礫混シルト
21. 黒褐色 シロ目質砂礫

15.2m

15.1m

15.0m



第4図 森ノ本地区における南北セクション断面図

礫混じりシルト（同7）と灰黄褐色の砂質シルト（同5）は広範囲にみられる。それぞれの上面はほぼ水平である。

4 調査地区付近における地形環境の変遷

これまでに述べた地形と堆積物の特徴からみて、調査地区付近における地形環境は次のように考察される。

〔ステージ1〕 調査地区付近では、更新世のある時期に大規模な土石流が発生し、巨礫を多く含むシルト質砂礫が堆積した。土石流は岡地区西側の山地を刻む谷中からのもので、これに伴って東へ大きく傾斜する支流性扇状地Ⅰが形成された。

〔ステージ2〕 当時、支流性扇状地Ⅰ上には、極めて小規模な河川が西側の谷中から流下していた。その河川による洪水が起こり、支流性扇状地Ⅰはシルトに薄く被覆された。シルトの上部では、その堆積直後から土壌化がはじまった。

〔ステージ3〕 支流性扇状地Ⅰの北端、南端、および東部では、河川による下刻がみられた。下刻は、扇状地の北端と南端が西側の谷中から流れ出る小さい河川に、また東部が佐用川によってなされたものであった。とくに南端では、下刻が基盤岩の上面に達するまでなされ、支流性扇状地Ⅰの堆積物はほとんど侵食された。これによって、支流性扇状地Ⅰの北端と南端には小規模な谷が形成され、支流性扇状地Ⅰは段丘化した。また、これと同じ時期に更新世段丘Ⅰの段丘化も行われ、調査地区の北方と南方に面積の小さい更新世段丘Ⅰができた。

〔ステージ4〕 岡地区西側の山地から堆積物が供給され、支流性扇状地Ⅱが形成された。この堆積物は、支流性扇状地Ⅰの北端と南端にみられる小規模な谷中を通して東方へもたらされ、支流性扇状地Ⅰの東側にまで及んだ。

〔ステージ5〕 支流性扇状地Ⅱの北部、南部、ならびに東部が、岡地区西側の山地から流下する小河川と佐用川によって下刻された。そのため支流性扇状地Ⅱは、段丘化するとともに、支流性扇状地Ⅰの東側にわずかに残されるのみとなった。この時期、調査地区の約300m南方では、更新世段丘Ⅱが段丘化した。

〔ステージ6〕 調査地区付近には、完新世に入って西側の山地からシルト質砂礫が搬出された。これは、支流性扇状地Ⅰの南北にみられる小規模な谷中から東方の佐用川付近まで堆積し、そこには支流性扇状地Ⅳが発達した。

〔ステージ7〕 支流性扇状地Ⅳでは、西側の谷から洪水が及び、砂礫混じりシルトがシルト質砂礫を覆った。その後この扇状地には、洪水の発生しない安定した環境が訪れ、縄文時代後期には人間活動がみられた。この時期、支流性扇状地Ⅳの扇端に位置する森ノ本地区の南部では、配石土坑や土坑などがつくられた。

〔ステージ8〕 調査地区西側の谷からはさらに洪水が数度発生した。支流性扇状地Ⅳでは、その度に砂礫混じりシルトや礫混じり砂質シルトなどが堆積していった。森ノ本地区の南東部では、こうした洪水の間隙にあたる弥生時代中～後期のある時期に溝がつけられた。一方、支流性扇状地ⅠとⅡでは、それぞれが段丘化した後安定した環境が続いていた。支流性扇状地Ⅰに位置する岡地区では、このような環境下で人間が弥生時代中期後半に居住し、支流性扇状地Ⅳより10m以上高い地点に竪穴住居が3棟建

てられた。

〔ステージ9〕その後、完新世段丘と支流性扇状地Ⅳは段丘化し、それぞれ安定した環境となった。15世紀ころには、地表が東へ急激に傾斜する支流性扇状地Ⅰで人為的な地形変化が大規模に行われた。これは堆積物を削り取り盛土を施すもので、その結果平坦面が階段状に造成された。岡地区では、造成直後の平坦面に掘立柱建物が建てられた。

〔ステージ10〕江戸時代には、支流性扇状地Ⅰで再び切土と盛土による人為的変化がみられた。これに伴って平坦面がさらに発達し、岡地区ではそこで人間が生活した。他方、支流性扇状地Ⅳでも同様の地形変化が少なくとも2度行われた。森ノ本地区では、こうしてつくられた平坦面で水田稲作が営まれた。

5 おわりに

本遺跡は佐用川上流部の狭長な平野に位置する。そこには、更新世段丘、完新世段丘、現況蓋原、および支流性扇状地が認められ、更新世段丘はさらに3面に、支流性扇状地は4面に細分される。これらのうち、岡地区は主に支流性扇状地Ⅰに、また森ノ本地区は支流性扇状地Ⅳに位置する。

支流性扇状地Ⅰは、晋後の山地から発生した土石流によって形成され、更新世のある時期に段丘化したものである。段丘面は急激に傾斜し、段丘崖は佐用川に沿う平野の地形で最も大きい北高を有する。この扇状地では、段丘化後の長期間にわたって土石流や洪水の及ばない安定した環境が続いた。岡地区の北端と南端を除く範囲はこのような扇状地に位置し、ここでは弥生時代中期後半、古墳～奈良時代のあたる時期、および15世紀ころなどに人間が居住した。

中でも、弥生時代中期後半の堅穴住居はこの時期に各地でみられた高地性集落と共通した立地傾向をもつ。本遺跡付近では、このような集落が佐用川上流部の平野で最も高い支流性扇状地Ⅰに形成された。また、15世紀ころと江戸時代には、人間が急傾斜の段丘面で生活するために切土と盛土による地形変化を大規模に行った。その結果、支流性扇状地Ⅰでは南北に長く延びる平坦面が階段状に造成された。佐用川上流部では、こうした平野の高所における大規模な地形変化が遅くとも15世紀ころにはじめられていたのである。

一方、支流性扇状地Ⅳは完新世に発達し、縄文時代後期以降に段丘化した。地表傾斜は他の支流性扇状地に比べて緩やかである。その扇端付近に位置する森ノ本地区では、主に縄文時代後期と弥生時代中～後期のある時期に人間活動がみられ、とくに縄文時代後期には配石土坑（墓）がつけられた。当時、支流性扇状地Ⅳでは小規模な河川が西側の山地から流下し、扇状地上はその洪水が及ぶ環境下にあった。このため、人間活動は断続的に発生する洪水の合間に行われた。さらにこの時期、森ノ本地区の東側には佐用川の氾濫原がみられ、人間はそれより少し高く、佐用川の洪水が及びにくい支流性扇状地Ⅳの扇端付近を墓域として利用したと考えられる。

本遺跡では、地形環境と人間活動との間に以上のような関係が認められるのである。

注

- 1) この盆地における地形については、拙稿「八反田遺跡の地形環境」、兵庫県教育委員会『八反田遺跡』所収、1998年で述べている。それは佐用川上流部で認められる地形と基本的に同じである。

第2節 延吉遺跡出土土器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

(矢作健二・石岡智武)

はじめに

佐用町に所在する延吉遺跡は、吉備高原東部を流れる千種川の支流である佐用川上流域の谷底低地に形成された狭小な段丘上に位置する。本報告では、延吉遺跡から出土した、縄文土器および弥生土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは差異性を見出し、延吉遺跡の各時期における土器の製作事情に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、延吉遺跡から出土した土器片12点である。内訳は、縄文土器片4点、弥生土器片8点である。

縄文土器片4点は、いずれも縄文時代後期のものとされ、深鉢と鉢がそれぞれ2点ずつある。4点のうち3点は森ノ本1区の土坑より出土し、1点は森ノ本2区の土坑より出土している。

弥生土器の試料8点のうち、3点は弥生時代中期、他の6点は弥生時代後期とされている。弥生時代中期の3点は、壺、甕、高坏であり、後期の5点のうち、4点は甕、1点は底部である。8点はいずれも岡1区から出土しているが、そのうち6点は同一住居跡から、1点は別の住居跡、1点は包含層からの出土である。

各試料には報告No.が付されている。各試料の報告No.、実測No.、種別、器種、時期、出土地区、遺構などは一覧表にして表1に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩石や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を表2、図1～3に示す。これまでに兵庫県下各地における縄文土器、弥生土器、土師器な

表1. 胎土分析試料一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	時期	出土地区	遺構	調査番号	胎土分類						
								鉱・岩		粒径組成				
								A7	F5	1	2	3	4	
1	021	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	森ノ本1区	SK10	2003189	■	■					
2	052	縄文土器	鉢	縄文時代後期	森ノ本2区	SK36	2005005							
35	041	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	森ノ本1区	SK17	2003189							
42	033	縄文土器	鉢	縄文時代後期	森ノ本1区	SK17	2003189							
70	071	弥生土器	壺	弥生時代中期	岡1区	SH01	2003189							
82	148	弥生土器	甕	弥生時代後期	岡1区	SH03	2003189							
83	146	弥生土器	甕	弥生時代後期	岡1区	SH03	2003189							
86	147	弥生土器	甕	弥生時代後期	岡1区	SH03	2003189							
88	138	弥生土器	底部	弥生時代後期	岡1区	SH03	2003189							
89	139	弥生土器	甕	弥生時代中期	岡1区	SH03	2003189							
90	135	弥生土器	甕	弥生時代後期	岡1区	SH03	2003189							
101	156	弥生土器	高坏	弥生時代中期	岡1区	包含層	2003189	■						

A7: 鉱物片では石英と斜長石が多く、微量のカリ長石や角閃石、緑泥石を伴い、岩石片では多結晶石英や変質岩および珪化岩が多いが、それらを除けば花崗岩類が比較的多く、堆積岩類や流紋岩・デイサイトおよびホルンフェルス等を微量伴う。

F5: 鉱物片では石英と斜長石が多く、岩石片では凝灰岩が多い。他に堆積岩類、流紋岩・デイサイト、安山岩、花崗岩類、ホルンフェルス、変質岩および珪化岩を伴う。

1: 粗粒砂をモードとし、極粗粒砂の方が中粒砂より多い。

2: 粗粒砂をモードとし、中粒砂の方が極粗粒砂より多い。

3: 中粒砂をモードとし、粗粒砂の方が細粒砂より多い。

4: 中粒砂をモードとし、細粒砂の方が粗粒砂より多い。

どの胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較すると、今回の12点の試料は、2つの鉱物・岩石組成に分類することができる。

12点の試料のうち、報告No.90と101以外の10点は、いずれも凝灰岩の岩石片が卓越することで特徴付けられる。この特徴はF類に相当するが、供伴する鉱物片や岩石片の種類構成と量比から、F類はF1類からF5類まで細分されている。今回のF類の組成は、石英と斜長石の鉱物片および変質岩と珪化岩の岩石片が多く、これに少量または微量のチャートや頁岩、砂岩からなる堆積岩類と流紋岩・デイサイトや安山岩などの火山岩類、さらには微量の花崗岩類やホルンフェルス、緑色岩などの変成岩類まで多種類の碎屑物を含む。なお鏡下の観察では、凝灰岩や流紋岩・デイサイトは結晶質であり、珪化岩はほとんどが珪化凝灰岩または珪化流紋岩とみられ、変質岩は火山岩または凝灰岩の変質岩と見られる。これらの特徴と同様のF類は、これまでに認められたF類の中ではF5類に分類される。

報告No.90と101の2点については、鉱物片では石英と斜長石が多く、微量のカリ長石や角閃石、緑泥石を伴い、岩石片では多結晶石英や変質岩および珪化岩が多いが、それらを除けば花崗岩類が比較的多く、堆積岩類や凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩およびホルンフェルスなどを微量伴う。このような特に卓越する岩石片がなく、多種類の岩石片を含み、その中に堆積岩類、凝灰岩または流紋岩・デイサイトのいずれか、花崗岩類の3者が含まれている場合はA類に分類される。そして、やや花崗岩が多く、変質岩と珪化岩が多く含まれる組成としては、A7類がそれに相当する。なお、A7類に分類された試料中の花崗岩類の岩石片には、いずれも微文象組織が認められている。

各試料の粒径組成は、粗粒砂をモードとする試料と中粒砂をモードとする試料が認められるが、第二番目に割合の高い粒径が異なることにより、以下のような分類をおこなった。

表2 薄片観察結果(1)

報告No	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計														
		鉱物片				岩石片							その他																
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	緑糜石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・テイスライト	安山岩		多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	球長岩	ホルンフェルス	緑色岩	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊・シルト塊	植物珪酸体	
1	砂	細礫										1	1															2	
		極粗粒砂	1									1	7	3	2		1	1		1				3	2			22	
		粗粒砂	1						1	3	1	6	3	1	2	1	2	1					2	3	2			24	
		中粒砂			1						1	4				2	2							2	2			14	
		細粒砂	3								2	1	1			3								1				12	
		極細粒砂	6		7						2		1															16	
		粗粒シルト	8		5																						1	14	
		中粒シルト	2																									2	
		基質																											392
		孔隙																											17
2	砂	細礫									1								1									2	
		極粗粒砂									1	4	2	1			1			1			1		1			12	
		粗粒砂								10	2	9	2	1		3	5		2	2		4	3	1	10			53	
		中粒砂	1		4					2	2	4	2	1					1	3			5					23	
		細粒砂	1		1						2	3						1	3									7	
		極細粒砂	4	1	2		1			2	2		2															13	
		粗粒シルト	3		3																							6	
		中粒シルト																										0	
		基質																											348
		孔隙																											14
35	砂	細礫																										0	
		極粗粒砂								1	1	3	1		1									1	4			12	
		粗粒砂				3	1				1	7	1		1	2				3		2	4	7				31	
		中粒砂	3		2							7			1	3								1	5			22	
		細粒砂	3		4						1	4	1		2										1			16	
		極細粒砂	5		4																							9	
		粗粒シルト	4		3																							7	
		中粒シルト																										0	
		基質																											334
		孔隙																											6
42	砂	細礫									1			1														2	
		極粗粒砂	1								1	1	1	2	1	1	2					2	10	4				26	
		粗粒砂	5			1						8	5	1	1	1	1					2	10	4				32	
		中粒砂	10		5		1				2		3	1	2	2	1						1	5	4			28	
		細粒砂	9		3							4	1		2	2								1				21	
		極細粒砂	11		8		2	1					4	1		1										1		22	
		粗粒シルト	8		3																						1	12	
		中粒シルト	3																									3	
		基質																											476
		孔隙																											7
70	砂	細礫									1																	1	
		極粗粒砂	1								1	2	3	3	1									7	2			17	
		粗粒砂	1								2	2	3		1					1	2		3	12	6			33	
		中粒砂	4		2		1				1	1	1	3						1	2		2	6	6			28	
		細粒砂	2	2		1									1													6	
		極細粒砂	4		4																							8	
		粗粒シルト	5		7		1																					13	
		中粒シルト			1																						1	2	
		基質																											451
		孔隙																											26
82	砂	細礫										1								1			1	3				0	
		極粗粒砂										1	1	7	1					1				1	4			6	
		粗粒砂	6		1						1	1	7	1							1			1	4			23	
		中粒砂	5		3							6												1	1	1		21	
		細粒砂	2		2		1					5				6											1	17	
		極細粒砂	5		4		1																					11	
		粗粒シルト	10		3																						1	14	
		中粒シルト	1																									1	
		基質																											348
		孔隙																											11

表2 薄片観察結果(2)

報告No	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計															
		鉱物片				岩石片							その他																		
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	緑泥石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・テイサイト	安山岩	多結晶石英		花崗岩類	はんれい岩	球長岩	ホルンフェルス	緑色岩	粘板岩	脈石英	燧岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊・シルト塊	植物珪酸体		
83	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂										1							1						1					3	
		粗粒砂	2	1							5	1		2										3		1				15	
		中粒砂	5					3			1		2													1				13	
		細粒砂	4	3						1		4		2																14	
		極細粒砂	5	2	5							1																		13	
		粗粒シルト	8	3																										11	
		中粒シルト	1																											1	
		基質																													305
		孔隙																													13
86	砂	細礫																												1	
		極粗粒砂	1									3							1						1					8	
		粗粒砂	3	1							2	2												1	1	3				10	
		中粒砂	6	4	1						4	4												1	2	2				16	
		細粒砂	5								7		2														1			15	
		極細粒砂	6	1	4			1	1		1	1		1																15	
		粗粒シルト	4	2																										6	
		中粒シルト	2																											2	
		基質																													377
		孔隙																													9
88	砂	細礫																												1	
		極粗粒砂										2	1	1		1		1	1						1	2	1			11	
		粗粒砂	1	2							3	1	11	1			1								2	6				28	
		中粒砂	4	9	1		2				2	8	2		1									1	3	5	1			39	
		細粒砂	8	10	2		1	1				5	1		1									1	2	2				34	
		極細粒砂	3	4		1	1								1											1	2			13	
		粗粒シルト	5																											5	
		中粒シルト	3	1																										4	
		基質																													419
		孔隙																													10
89	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂	1									2	2																	5	
		粗粒砂	1									13	2	2																29	
		中粒砂	2	2	1	1		2		1		6		3										2						20	
		細粒砂	1									6																			7
		極細粒砂	2	3					1	1		1	1	2											1					7	
		粗粒シルト	3	6																										9	
		中粒シルト	1																											1	
		基質																													343
		孔隙																													20
90	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂	3									2	1													2	2		1	11	
		粗粒砂	6	2	10						1		1	1	2	3	1		1	1						8	4			41	
		中粒砂	6	4	10	1								1	6	1										4	1			35	
		細粒砂	4	5																										12	
		極細粒砂	5	3						1																				9	
		粗粒シルト	2																											2	
		中粒シルト																												0	
		基質																													372
		孔隙																													23
101	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																							1	2	4	1		8	
		粗粒砂	9	3	1		1				2		1	1	1	10			3					1	11	4	1			49	
		中粒砂	8	3	6	2				4		2			9	1			4						8	6				53	
		細粒砂	9	2	2					1	4																				22
		極細粒砂	16	1	4		2		4							3														30	
		粗粒シルト	12	4			3																							19	
		中粒シルト	4																											4	
		基質																													577
		孔隙																													25

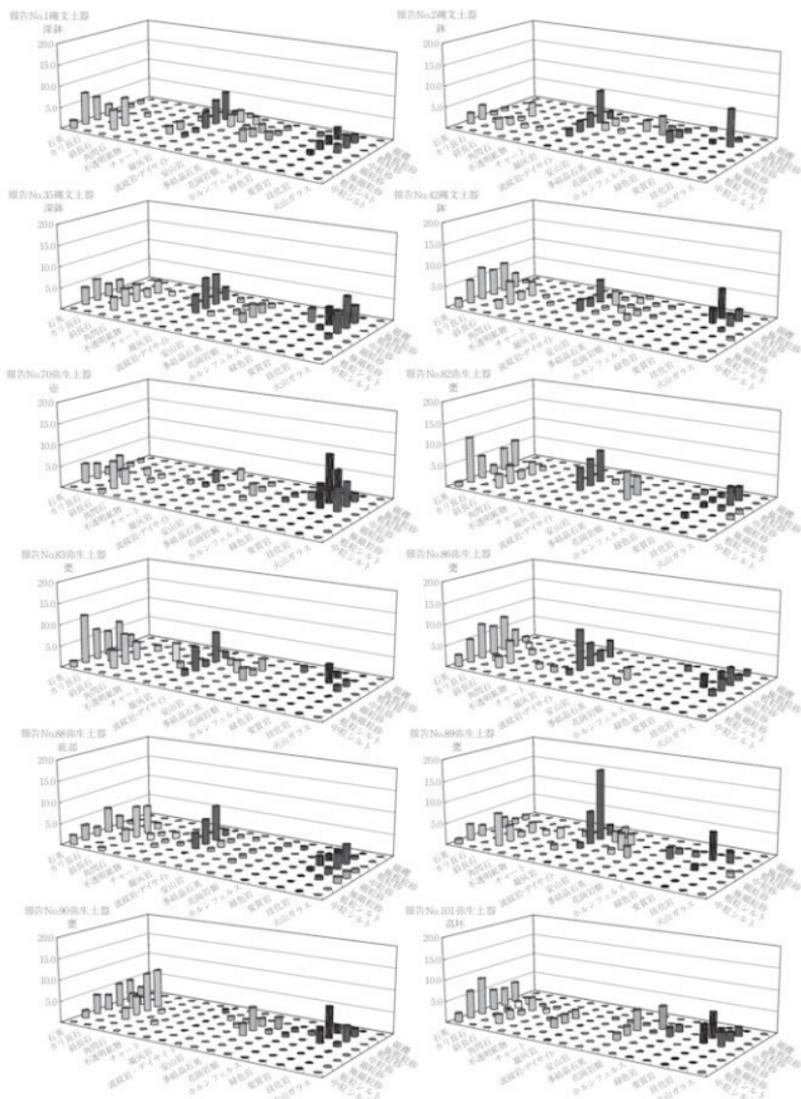


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

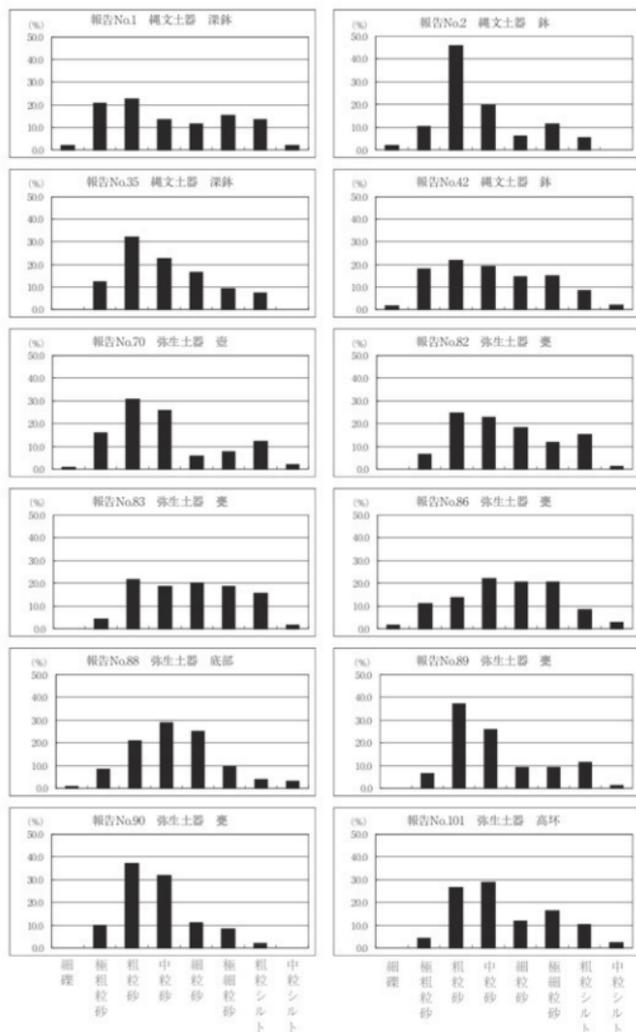


図2 胎土中の砂の粒径組成

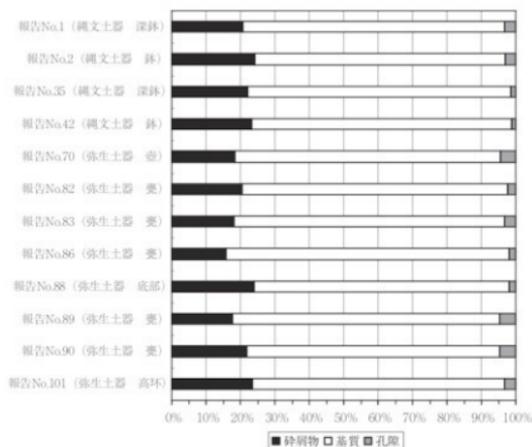


図3 碎屑物・基質・孔隙の割合

1類：粗粒砂をモードとし、極粗粒砂の方が中粒砂より多い。報告No. 1がこれに相当する。

2類：粗粒砂をモードとし、中粒砂の方が極粗粒砂より多い。報告No. 2、35、42、70、82、83、89、90の合計8点がこれに相当する。

3類：中粒砂をモードとし、粗粒砂の方が細粒砂より多い。報告No.101がこれに相当する。

4類：中粒砂をモードとし、細粒砂の方が粗粒砂より多い。報告No.86、88の2点がこれに相当する。各試料の碎屑物・基質・孔隙の割合では、いずれの試料も碎屑物の割合が15～25%の範囲に入り、とくに分類できるような傾向は認められない。

以上述べた試料の胎土分類をまとめて表1に併記する。胎土分類結果を土器の時期別にみると以下の状況が示される。

1) 縄文土器

鉱物・岩石組成は、4点ともにF 5類であり、粒径組成では深鉢の報告No. 1は1類であるが、他の3点は2類である。

2) 弥生時代中期の弥生土器

鉱物・岩石組成は、高坏である報告No.101がA 7類に分類されたが、他の2点はいずれもF 5類である。粒径組成では、高坏である報告No.101が3類に分類され、他の2点はいずれも2類である。

3) 弥生時代後期の弥生土器

鉱物・岩石組成は、甕の中の1点である報告No.90がA 7類に分類されたが、他の4点はいずれもF 5類である。粒径組成は、甕の中の1点である報告No.86と底部の報告No.88の2点が4類に分類され、他の3点は2類に分類された。

4 考察

(1) 胎土の地質学的背景から推定される地域性

延吉遺跡の位置する佐用川上流域周辺の地質については、猪木・弘原海（1980）、猪木（1981）および日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）などに詳細な記載がなされている。延吉遺跡付近の佐用川の両岸に迫る山地は、中生代白亜紀の安山岩質・流紋岩質・デイサイト質の溶岩や溶結凝灰岩および火砕岩などを主体とする相生層群により構成されている。相生層群は下部重層群、中部重層群、上部重層群に細分されているが、佐用川上流域の右岸側には主に中部重層群が分布し、左岸側には下部重層群が分布している。中部重層群を構成する岩石は、安山岩質の溶岩や火砕岩と流紋岩質の溶岩や火砕岩とされ、下部重層群を構成する岩石は、安山岩質・デイサイト質・流紋岩質の火砕岩と流紋岩質の溶結凝灰岩とされている。なお、変質岩や珪化岩は相生層群を構成する岩石を起源として、相生層群の分布域中に広く認められている。さらに、佐用川最上流域には、古生代二畳紀の堆積岩類（頁岩・砂岩を主体とする）からなる龍野層群上部層と変斑れい岩類などを主体とし、超塩基性岩、花崗岩類、変成岩類の小岩体を含む夜久野複合岩類が分布している。

ここまでの記載により、F5類の鉱物・岩石組成は、延吉遺跡の位置する佐用川上流域および最上流域も合わせた地質学的背景とよく一致していることがわかる。おそらく、延吉遺跡付近の河川堆積物中には、上述した各地質に由来する砕屑物が混在すると考えられ、中でも周囲の相生層群に由来する砕屑物が多く含まれていることが推定される。すなわち、F5類の胎土に分類される試料は、延吉遺跡周辺の堆積物が使用されている可能性が高いと考えられる。縄文土器でも弥生土器でもほとんどがF5類であったことは、いずれも延吉遺跡周辺で作製されたことを示唆している可能性がある。

一方、A7類の胎土については、変質岩や珪化岩が比較的多いことはF5類と共通するが、凝灰岩が微量であることや花崗岩類が比較的多いことなどから、上述した延吉遺跡周辺の地質学的背景とは異質であると言える。少なくとも佐用川流域には花崗岩類の分布が凝灰岩よりも卓越するような地質は認められない。佐用川流域から範囲を広げて花崗岩類の分布に注目すれば、最も至近の地質として、上郡町と赤穂市の境界付近の安室川と千草川の合流点付近の両岸に分布する古第三紀に貫入した播磨併入岩類と呼ばれる岩体があげられる。特に、今回のA7類の花崗岩類には微文象組織が認められており、これは、この岩体内に分布する花崗斑岩・文象斑岩に由来する可能性を示唆している。これまでも、安室川と千草川の合流点付近に位置する竹万宮ノ前遺跡から出土した弥生土器の多くにA7類の胎土が認められている。A7類の鉱物・岩石組成から推定される地質学的背景を有する地域は、千種川水系の中でも上述した地域の他にも想定できるし、千種川水系以外の地域でも想定は可能である。したがって、現時点では、延吉遺跡から出土したA7類の土器について、その産地を安室川と千草川の合流点付近に限定するものではないが、最も近い場合でも20km以上の距離を移動してきた土器であることを指摘しておきたい。

(2) 胎土と時代・時期・器種等との関係

今回の分析結果では、縄文土器も弥生土器も、その胎土は鉱物・岩石組成がF5類で粒径組成が2類という試料が多数を占めた。前述したようにF5類の胎土は、遺跡周辺で作られた可能性の高いことを示唆するから、延吉遺跡では縄文土器も弥生土器もその多くは、周辺の堆積物を材料として周辺で作られていたと考えられる。その中で、何らかの特殊事情により、弥生土器の中には遠方から搬入された土器もあったことが推定される。

なお、胎土の粒径組成をみると、F 5 類の試料の中で、2 類以外の分類として、縄文土器には 1 類、弥生時代後期の土器には 4 類が少数ではあるが認められている。1 類は、2 類よりも粗粒傾向にあり、4 類は 2 類よりも細粒傾向にある。このことから、縄文時代後期の土器には、より粗粒な砂の混在する土器もあり、弥生時代後期の土器には、より細粒な砂の混在する土器もあることが窺われる。

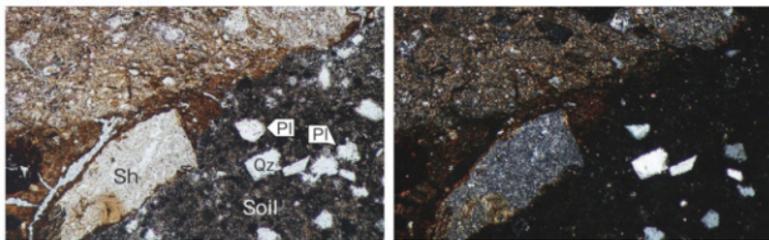
器種と胎土との対応関係は、今回の分析結果では明瞭ではない。今回の試料の中で 1 点のみの高坏である報告 No.101 は、搬入されたと考えられる A 7 類の胎土であったが、同時に甕である報告 No.90 も A 7 類であることから、胎土の違いが、器種による事情に起因している可能性は低い。

今後も千種川水系の諸地域における縄文土器や弥生土器の胎土分析事例を蓄積することができれば、土器の製作地や移動、時代・時期による製作事情の違いなどが見出されることが期待され、兵庫県西部地区の土器に関する有意な資料の作成が可能であると考えられる。

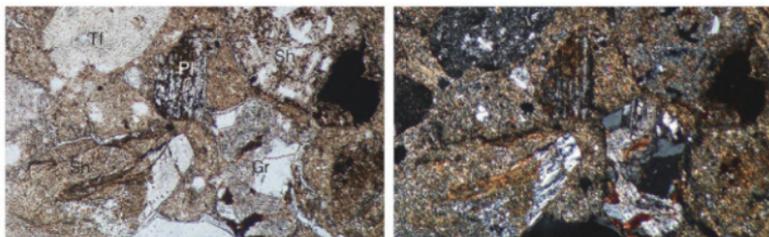
引用文献

- 猪木幸男, 1981, 20 万分の 1 地質図幅「姫路」, 地質調査所。
猪木幸男・弘原海清, 1980, 上郡地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 74p。
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 - 岩石学的・堆積学的による -, 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集, 120-121。
日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 6 近畿地方, 共立出版, 297p。

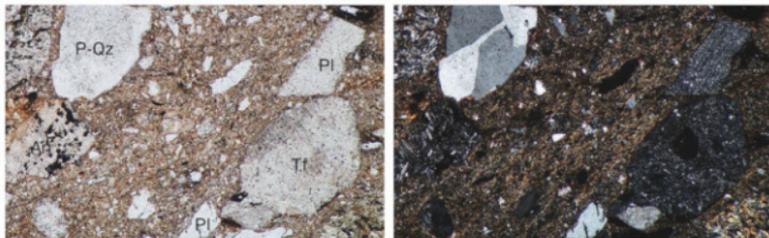
図版1 胎土薄片(1)



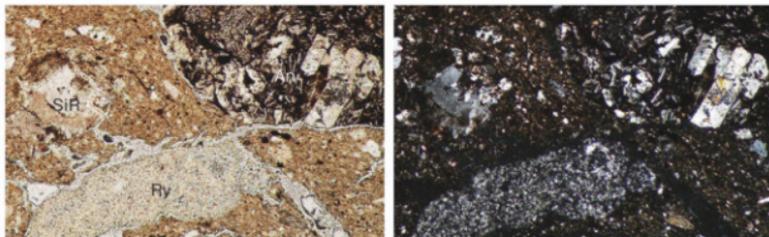
1.報告No.1 実測021 縄文土器 深鉢 縄文時代後期 森ノ本1区 SK10



2.報告No.2 実測052 縄文土器 鉢 縄文時代後期 森ノ本2区 SK36



3.報告No.35 実測041 縄文土器 深鉢 縄文時代後期 森ノ本1区 SK17

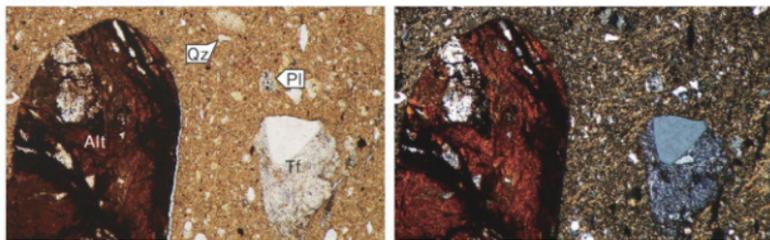


4.報告No.42 実測033 縄文土器 鉢 縄文時代後期 森ノ本1区 SK17

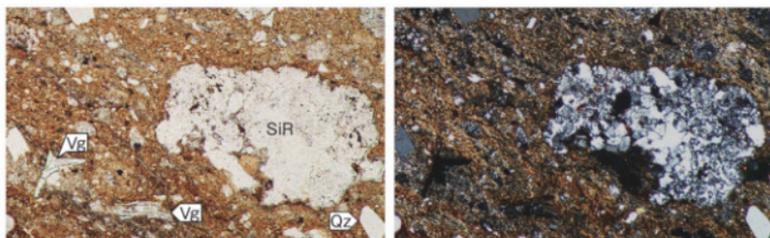
Qz:石英.PI:斜長石.Sh:頁岩.Tf:凝灰岩.Ry:流紋岩.An:安山岩.P-Qz:多結晶石英.
Gr:花崗岩.SIR:珪化岩.Soil:化粧土.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

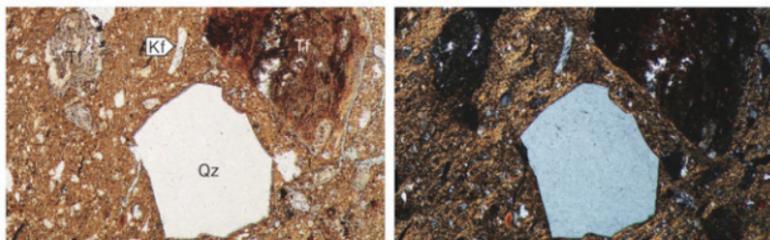
図版2 胎土薄片(2)



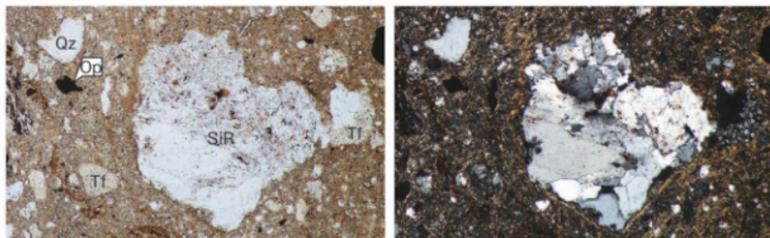
5.報告No.70 実測071 弥生土器 壺 弥生時代中期 岡1区 SH01



6.報告No.82 実測148 弥生土器 甕 弥生時代後期 岡1区 SH03



7.報告No.83 実測146 弥生土器 甕 弥生時代後期 岡1区 SH03



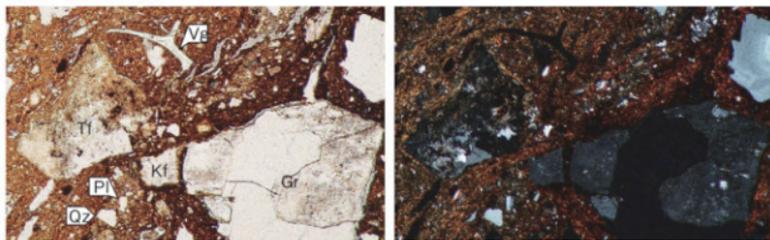
8.報告No.86 実測147 弥生土器 甕 弥生時代後期 岡1区 SH03

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Op:不透明鉱物.Tf:凝灰岩.Alt:変質岩.
SiR:珪化岩.Vg:火山ガラス.

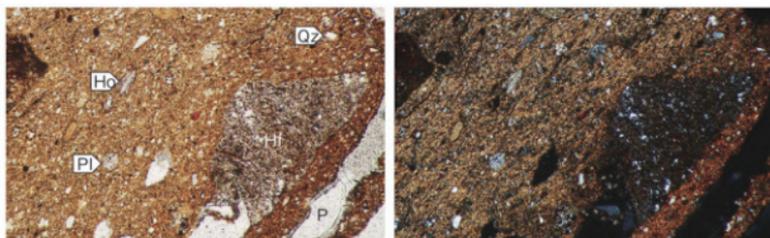
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

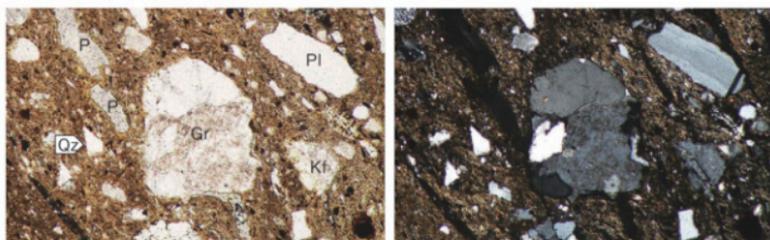
図版3 胎土薄片(3)



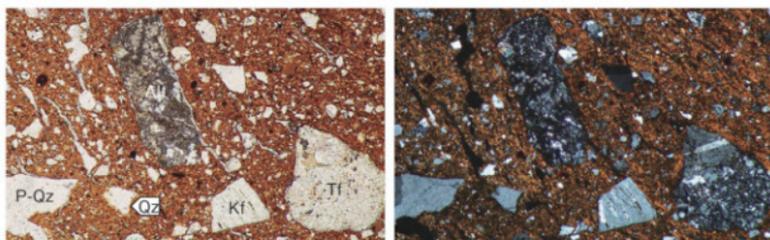
9.報告No.88 実測138 弥生土器 底部 弥生時代後期 岡1区 SH03



10.報告No.89 実測139 弥生土器 甕 弥生時代中期 岡1区 SH03



11.報告No.90 実測135 弥生土器 甕 弥生時代後期 岡1区 SH03



12.報告No.101 実測156 弥生土器 高杯 弥生時代中期 岡1区 包含層

0.5mm

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Ho:角閃石.Tf:凝灰岩.P-Qz:多結晶石英.

Gr:花崗岩.Hf:ホルンフェルス.Alt:変質岩.Vg:火山ガラス.P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第3節 延吉遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

延吉遺跡は、兵庫県佐用郡佐用町延吉（北緯35° 03' 12"、東経134° 21' 53"）に所在する。測定対象試料は、SH03中央土坑出土木炭（1：IAAA-90762、2：IAAA-90763）、焼土出土木炭（3：IAAA-90764）、合計3点である。

2 測定の意義

遺構の年代を特定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを精製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位

体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(%)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{13}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{13}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{13}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{13}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{13}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

6 測定結果

^{13}C 年代は、1が $2060 \pm 30\text{yrBP}$ 、2が $2110 \pm 30\text{yrBP}$ 、3が $1220 \pm 30\text{yrBP}$ である。同じ遺構から出土した1と2は誤差(1σ)の範囲で重なり、ほぼ同年代を示している。1、2は弥生時代、3は古代の年代となった。

炭素含有率は60%を超える十分な値であり、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-90762	1	遺構: SH03: 中央土坑	木炭	AAA	-25.10 ± 0.63	$2,060 \pm 30$	77.34 ± 0.30
IAAA-90763	2	遺構: SH03: 中央土坑	木炭	AAA	-26.00 ± 0.53	$2,110 \pm 30$	76.86 ± 0.31
IAAA-90764	3	遺構: 焼土	木炭	AAA	-24.34 ± 0.62	$1,220 \pm 30$	85.93 ± 0.34

[#3031]

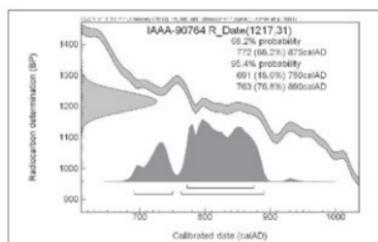
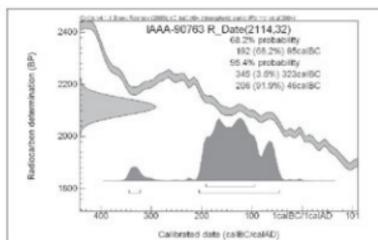
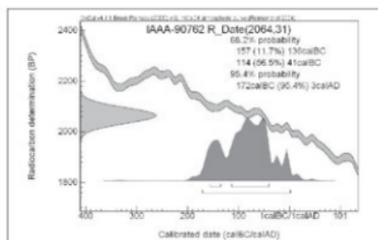
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90762	$2,070 \pm 30$	77.32 ± 0.28	$2,064 \pm 31$	157BC-136BC (11.7%) 114BC-41BC (56.5%)	172BC-3AD (95.4%)
IAAA-90763	$2,130 \pm 30$	76.70 ± 0.30	$2,114 \pm 32$	192BC-95BC (68.2%)	345BC-323BC (3.5%) 206BC-46BC (91.9%)
IAAA-90764	$1,210 \pm 30$	86.05 ± 0.32	$1,217 \pm 31$	772AD-875AD (68.2%)	691AD-750AD (18.6%) 763AD-890AD (76.8%)

[参考値]

参考文献

- Suiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates.

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ

第6章 まとめ

第1節 縄文時代

1 遺物

森ノ本地区からは配石土坑やその他の土坑から縄文土器や石皿などが出土している。後の耕作地の造成による削平のため包含層から出土した遺物は非常に少ない。石皿については配石土坑の配石として用いられたものがほとんどであるが、土器についてはSK16やSK17を除けば遺構埋土中にわずかな点数が含まれるのみである。ここでは出土土器の様相について3つの段階に分けて簡単にまとめておく。

第1段階（福田K2式、緑帯文土器成立期）

今回出土した中で最も古いのはSK15より出土した福田K2式の深鉢・浅鉢である。12の深鉢は、口縁の断面形態が福田K2式のb1種新段階のものである（千葉1989）。13は皿形の浅鉢で、RLの縄文地に2条沈線間が磨り消されている。福田K2式と思われる。SK15より出土した他の小破片はいずれも無文である。

55の深鉢は包含層から出土したもので、口唇部がやや上方を向き、2条沈線とキザミ目が入れられている。北白川上層式1期よりは古いものと考えられる。

第2段階（北白川上層式1期～2期、布勢式後半）

SK16からはややまとまった数(48点)の土器が出土している。このうち条痕をもつものは22点で、細密条痕のものが多い。14の深鉢は外傾化した緑帯部にLRの縄文と1条沈線が入れられ、頸部には条痕が施されている。15の深鉢は頸部に条痕、胴部にRLの縄文が施されている。16～18は細密条痕が施された深鉢である。第3段階の無文土器に比べて器壁が厚ほしい。小森岡遺跡出土の布勢式無文土器深鉢に酷似する（竹野町教委1990）。14・15の深鉢は布勢式の深鉢よりは加飾が少なく、崎々鼻式に近いものかもしれない（柳浦2000）。

この他、SK16の時期に近いものは、包含層出土の深鉢（54）とSK04出土の鉢（5）で、磨り消し縄文（縄文はRL）が施されている。54の深鉢は口縁部が比較的大きく緑帯化し、北白川上層式1期かそれをやや遡る可能性のあるものである（千葉2008a）。埋設土器SK36の無文土器深鉢（2）も外面の文様が条線文の下端部とすれば北白川上層式1期のものと考えられる。

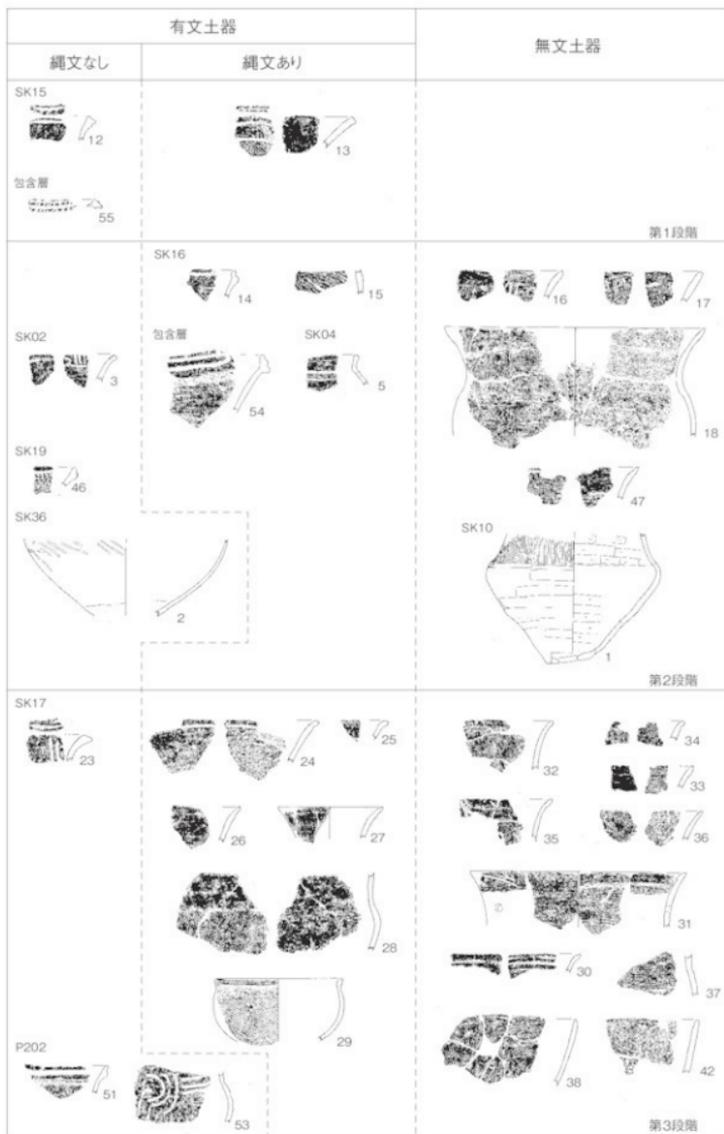
やや第3段階に近い傾向をもつものにSK19、SK02出土の深鉢（47、3）がある。SK19より出土した46の深鉢は口唇部の1条沈線下にキザミが施されている。堀之内式の施文である。47の深鉢は細密条痕地で、口縁部外面に1条の沈線が入れている。器壁はやや薄く、第3段階の無文土器にやや近い。SK02より出土した深鉢（3）は口縁部内面に直線文と弧状文が施されている。このような文様は北白川上層式1期・2期に見られるが、口縁部の形態は第3段階の無文土器の口縁に類似することから、やや新しい部類に属するものかもしれない。

埋設土器SK10の無文土器深鉢（1）は頸部に細密条痕、胴部にナデが施されている。類例は見いだすが、頸部のくびれがきついことからとりあえず第2段階のものと考えておく。

第2段階の土器は北白川上層式1期を中心にやや前後の時期を含むものである。また、細密条痕を施すものが多いことから山陰・北近畿地域の影響を強く受けていることが伺える。

第3段階（北白川上層式3期、津島岡大第4群・四元式）

貯蔵穴状の土坑SK17より比較的多く(217点)の土器が出土している。うち条痕をもつものは55点、



第4図 森ノ本地区出土の縄文土器

縄文をもつものが6点である。SK16に比べて条痕をもつものの割合が減少し、細密条痕の割合も条痕をもつものの中で約半数程度と減っている。24～27は口縁部に縄文をもつ深鉢である。口縁部内外面に1条の沈線をもつもの(24)、口縁部外面が肥厚するもの(25)、口縁部が尖り気味のもの(26・27)などのバリエーションがある。28の深鉢は頸部のくびれが弱く、体部外面には縄文を2方向に施文して羽状にしている。29の鉢も体部外面に28と同様な縄文を施している。北白川上層式2・3期のものである。これら縄文を有する土器には条痕を施すものは認められない。縄文をもたない深鉢についても口縁部に複数の形態が認められる。32～35は口縁部外面が肥厚するものである。調整は条痕を施すものとナデを施すものがある。36は口縁部が肥厚しない。第2段階のものより器壁が薄手である。31は口縁部内面が肥厚し、肥厚部の下が沈線状を呈している。口縁部外面には部分的に三日月・ノ字形沈線文の痕跡のような2条の短い沈線が入られている。30は口縁部外面が肥厚し、内面に2条の沈線が施されている。37の深鉢は頸部のくびれが弱い。39・42は津島岡大IV群土器の鉢Cの器形である。条痕調整のものとナデ調整のものがある。

これらの深鉢の形態・施文の種類からみて、津島岡大IV群土器や四元式に類似するものである(平井1993、橋本1994)。縄文をもつものが少なく、26・27のような口縁部の先端が尖り気味のものを含むことから、SK17出土土器は四元式に近いものと考えたい。なお、23の深鉢は口縁部外面に縦方向の2条沈線文をもち、北白川上層式1期かその直前頃のものと考えられることから混入の遺物と思われる。

P202出土の深鉢(51・53)は条痕調整で、胴部に逆C字形の沈線と3条の横方向の沈線をもつものである。北白川上層式3期と考えられる。

第3段階の土器は細密条痕をもつものが一定量認められることから、第2段階に見られる山陰・北近畿地域の影響を残しつつ、新たに瀬戸内地域の影響が強く現れているとすることができる。

近年、千種川流域の後期の資料は増えつつある(千葉2008b)。今回の延吉遺跡の資料にみる瀬戸内地域や山陰・北近畿地域との交流は兵庫県西端の内陸部に位置する地理的状況を如実に示している。

2 遺構

森ノ本地区から縄文時代後期の遺構と考えられる埋設土器、配石土坑、土坑、ピットなどが検出された。森ノ本地区は佐用川に面した地下水位の高い低位の扇状地で、縄文時代の遺構は調査区南端部の東西約20m、南北約20mの範囲に集中して検出されている。この部分は低湿をわずかにまのがれる微高地部分で、他の時代には周りを含めて耕作地として利用されたにすぎない。

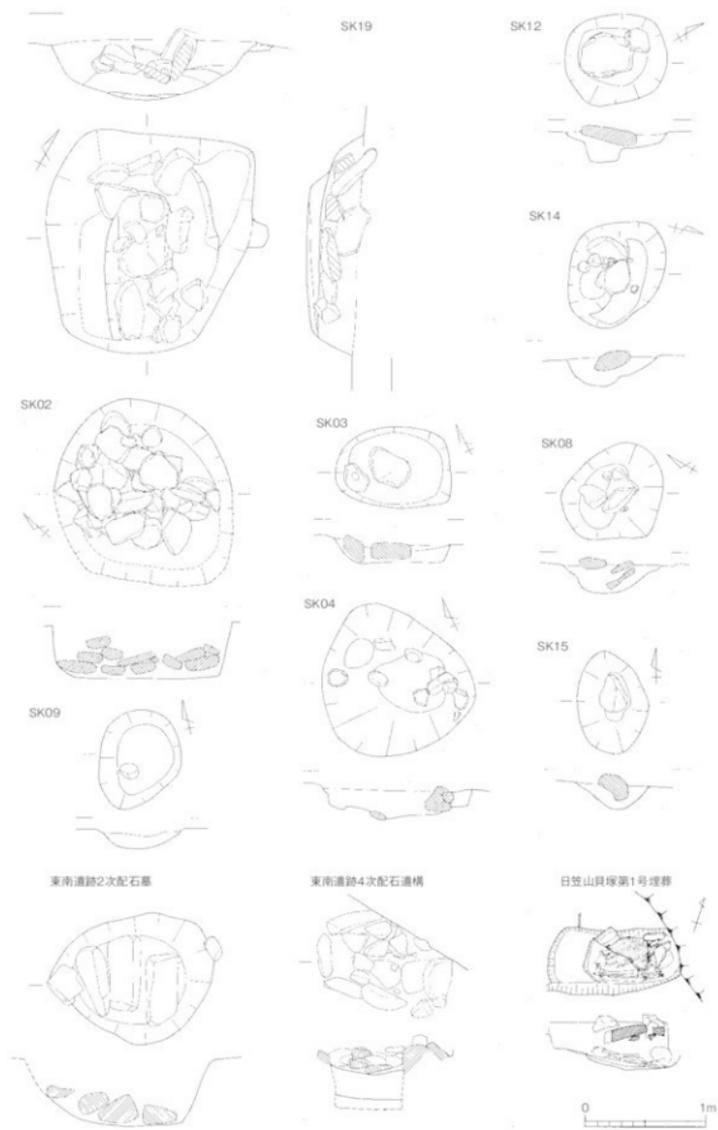
今回検出された遺構は後述のようにその多くが墓地を構成する遺構と推定される。佐用区内では中後期の住居跡が5遺跡と比較的多く検出されており(藤木2005)、今回の調査ではそれに墓を加えることとなる。

遺構の変遷

各遺構から出土した土器は少ないため、遺構の時期を特定することは難しいが、一応前項で検討した土器の段階に合わせて遺構の変遷を提示しておく。なお、配石土坑からは縄文土器が出土しているものが多いが、普通の土坑からは縄文土器があまり出土していないため、ほとんど時期の特定はできない。

第1段階 配石土坑SK15のみである。SK16に切られる土坑SK24はこの段階に属するかもしれない。

第2段階 埋設土器SK10・36、配石土坑SK02・04・19、土坑SK16がこの時期属す



第5図 森ノ本地区の配石土坑

る。埋設土器・配石土坑がこの時期に集中していることから、他の配石土坑もこの時期に属するものが多いと思われる（SK03・08・12からは縄文土器の破片が出土している）。そう考えると埋設土器と配石土坑からなる墓地の存在がはっきりする。ただし、墓地だけでなく作業場状の落ち込み土坑SK16なども存在する。

第3段階 貯蔵穴状の土坑SK17、ピットP202がこの時期に属する。墓地としての利用はみられなくなったと思われる。

配石土坑について

今回の調査で特徴的なのは配石土坑が多く（9基）検出されたことである（第5図）。

石の位置や土坑の形状によっていくつかの種類に分けることができる。1類：配石下に掘り込みをもつもの（SK19・12・14）、2a類：配石下に空間があるもので、大型の石材を使用するもの（SK08・15）、2b類：配石下に空間があるもので、小型の石材を使用するもの（SK04・09）、3類：配石が坑底に接地するもの（SK02・03）である。このうち、2b類は少量の小型の石材が不規則に検出されているもので、単に石材が投げ込まれただけかもしれない。

配石に使用された石材には石皿として使用されたものが多くみられる。特に長さ33cm以上の石材はほぼ全て石皿として使用されている（第3図参照）。1類ではSK19で石材15個中、10個の石材が石皿と考えられる。SK12・14でも主要な石材は石皿である。2類の石材の中には石皿は認められず、SK04の石材には敲石・磨石が含まれている。3類のSK02では32個の石材中6個が石皿で、やや石皿の割合が低い。SK03は主要な石材1つが石皿である。なお、貯蔵穴状の土坑SK17の中層からは9点の石材が出土しているが、強く使用されているものは含まれていなかった。このように配石下に掘り込みをもつ1類では配石に石皿を使用していることが特徴的である。

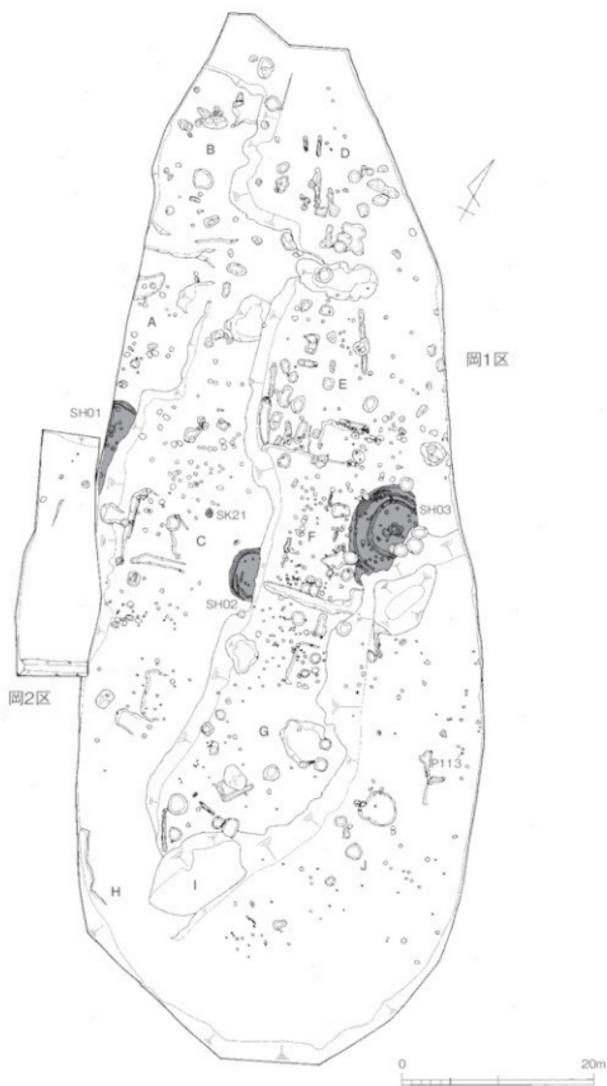
なかでも大型の配石土坑SK19は、下部の掘り込みの上に石材を壺状に並べたと考えられる遺構である。県内での大型の配石土坑の類例としては東南遺跡（揖保郡太子町）、日笠山貝塚の例がある（深井2000・高砂市1964）。東南遺跡2次配石墓（後期中葉）は横長の石材を坑中に並べている。石材は地面に接地している。東南遺跡4次配石遺構（後期中葉）は石材を囲い状に配置し、その内側にも石材を敷き並べている。配石下に掘り込みがあるかは不明である。日笠山貝塚第1号埋葬（晩期）は坑底に屈葬人骨が残存し、その上に石材を乗せていることが明瞭である。少ない例からではあるが、SK19は日笠山貝塚例に類似することから墓であると推定される。もし、墓であるとすれば規模も大きく、石材も石皿を多く使用していることから特殊な地位であった人物が葬られたのではないだろうか。

第2節 弥生時代

1 遺物

弥生時代の遺物は岡地区の堅穴住居跡から出土したものが大半であり、中期・後期の土器のほか、扁平片刃石斧、楔形石器などが出土している。その他、岡地区の土坑・ピット・包含層、森ノ本地区の溝、包含層からわずかに中期・後期の土器や石斧などが出土している。

SH01出土土器 69はいわゆる「摂津系太頭広口壺」である。施文は胴部に列点文のみである。70は頸部に凹線、体部に縞線波状文と直線文をもつ、71の甕は体部外面上端にタタキ目を残し、体部内面はヘラケズリが施されている。IV-4期と考えられる（長友・田中2007）。



第6図 弥生時代の岡地区

SHO2出土土器 73の水差しや74の無頸壺には凹線が施されている。埋土出土の破片のみしかなくはっきりしないが、SHO1と同様の時期と思われる。

SHO3出土土器 第1～4段階部分から出土した土器は79・89の甕である。89の甕の体部内面上端にハケ目が残されている。第5段階の床面・中央土坑からは甕(81～87)・高杯(80)、埋土から甕(90)・壺(91)・鉢(92)・高杯(95・96)が出土している。81～87の甕の内面はヘラケズリが施されている。口縁端部に凹線(擬凹線化したものを含む)を施すものと無文のものがある。83・85はミガキ甕である。80の高杯は碗形高杯の杯部下面の調整がヘラケズリである。第5段階はV-1期と考えられ、それに先立つ第1～4段階はIV-4期と考えられる。なお第5段階の中央土坑より出土した炭化物のC14年代は157BC - 136BC (11.7%)・114BC - 41BC (56.5%)、192BC - 95BC (68.2%)である(第5章第3節参照)。

2 遺構

高位の斜度のきつい高燥な扇状地に位置する岡地区で検出された遺構は竪穴住居跡3棟、土坑1基、ピット2基で居住域をなしていたと考えられる。低位の扇状地の森ノ本地区では溝(SD01)が中期の溝である以外、遺構は検出されていない。おそらく、耕作地として利用されてきたのであろう。

岡地区では調査区中央を横断する形で遺構が検出され、もともとの斜面地形の尾根上に出っ張った部分に遺構が形成されたと考えられる。竪穴住居跡SHO1・02・03第1～4段階がIV-4期で、SHO4の第5段階がV-1期である。

竪穴住居跡の平面形はIV-4期のものが円形で、V-1期のものがやや方形気味の円形である。面積はIV-4期のSHO1・02が標準的な規模の30㎡程度で、SHO3第1～4段階は50～60㎡と大型である。V-1期のSHO3第5段階は23㎡で小型の部類に属している(藤木2009)。IV-4期においては大・中規模の竪穴住居跡で構成され、V-1期においては小型の竪穴住居跡1棟のみである。

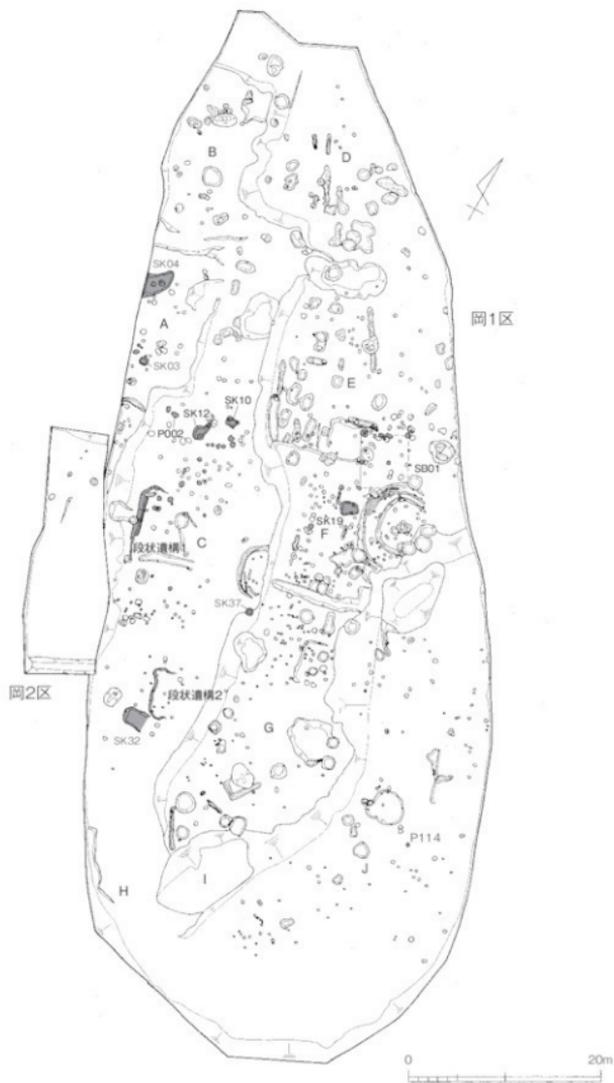
旧佐用町域においては中期前半以前の集落はみつかつておらず、中期後半から横坂丘陵遺跡(佐用郡教育委員会2005)と口長谷岡田遺跡(佐用町教育委員会2009)が現れる。そして後期においては丘陵・平野部ともに遺跡数は増加している。横坂丘陵遺跡は中期後半～後期にかけての丘陵上の集落遺跡であるが、後期末～後期初の間は一度途切れるものと見られている。ちょうど、延吉遺跡の存続時期にあっており、細かく集落が消長する有様が示されているのかもしれない。

第3節 中世

1 遺物

中世以降の遺物は平坦地で検出されたピット・土坑や度重なる平坦地の造成の過程で堆積した包含層から出土しているが、量は多くない。近世の遺物については時期のわかりそうな陶磁器のみしか取り上げていない。

備前焼 乗岡編年(乗岡2000)による中世3b期(125・149)、中世4b期(126・140)、中世5a期(141)、中世5b期(150)、近世2期(139)、近世5期(161)のものが認められる。中世のものは15世紀の初めから終わりまで、近世のものは17世紀中葉と19世紀のものである。その他、壺(151)・皿(160)がある。162の播鉢は堺・明石系の播鉢で、19世紀代のものである。



第7図 中世の岡地区

肥前系陶磁器 124の地軸陶器皿は肥前I-1期で16世紀末、157の染付磁器碗は肥前IV期で18世紀後半、159の染付磁器碗は波佐見V-1期で17世紀後葉から18世紀前葉である(近世九州陶磁学会2000)。

輸入陶磁器 龍泉窯系青磁には口縁部が外反するもの(129)、見込みにスタンプをもつもの(144・155)、連弁文のもの(164)、細連弁文のもの(152・153)、口縁部が内彎するもの(154)などがある。おおむね、15世紀前後のものに限られるようである。白磁には143の碗がある。内面には型押し放射状文が入れている。染付磁器には123の鉢がある。体部に凹線を入れて瓜形にしている。

土師器 皿が多く出土している。手づくねのものが大半で、底部糸切り(119・146)のものがわずかにある。手づくねのものは口径77～10cmと口径が小さいもののみで、口縁部のヨコナデが確認できないものが多い。糸切りの皿も口径が8cm前後と小さく、口縁部が大きく開く形態である。鍋(137)は鉄かぶとⅡ型で15世紀中頃のものである(長谷川2007)。手づくねの皿については土坑(SK32)・ピット(P090・097)などでの備前焼や土師器鍋との共存状況からみてほぼ15世紀代のものと考えられる。糸切りの皿はSB01ピットでの染付磁器鉢(123)との共存からそのなかでもやや新しい部類に属すると思われる。

2 遺構

弥生時代以降も方形竪穴住居跡(SH04)や焼土(C14年代で8～9世紀)などが検出され、律令期の須恵器(103～107)や平安後期の須恵器(142)などが出土しているものの、わずかである。本格的に地形の造成などを伴う開発がおこなわれるのは15世紀頃からである。

中世の遺構が分布しているのはA・C・E・F・Jブロックである。基本的には弥生時代と同じく、もともとの斜面地形の尾根上に出っ張った部分を利用したと考えられる。Cブロックでは特に中世の遺物が出土したピットや土坑が多く、段状遺構も設けられている。Aブロック際のP002からも中世の土器が出土していることから、A・Cブロック間の段差は中世の段階に造られたものと思われる。比較的大きな平坦面の造成が行われたものと思われる。Eブロック南端部からFブロックでは掘立柱建物跡(SB01)、土坑、ピットから中世の土器が出土しているが、後世の削平が大きいためかCブロックよりは少ない。

16世紀代の遺物はほとんどなく、Cブロックで16世紀末の肥前系施釉陶器、Fブロックで17世紀前葉の備前焼播鉢、17世紀後葉から18世紀前葉の肥前系染付磁器碗が出土している。おそらく遺跡は一旦途絶え、新たにかつて造られた平坦地部分を利用したものと思われる。Dブロックで18世紀後半の肥前系染付磁器碗が出土し、Gブロックで19世紀代の備前焼播鉢、堺・明石系播鉢が出土していることから、下段のFブロックを中心に南北へ平坦面を拡張したものと思われる。最下段のJブロックについては近現代まで利用されていた。

15世紀には比較的上段の部分から開発が行われたようである。あるいは下段部の造成が大きいため古い段階の小規模な造成の痕跡がほとんど残存していないのかもしれない。16世紀末以降は下段においてより大規模な造成を行いながら、より下方へ造成が移っていったようである。

参考文献

- 赤穂市教育委員会 2008『有年原・クルマ遺跡発掘調査報告書』
- 阿部芳郎 1994「後期Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 泉拓良 1984「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻
- 植田文雄 1998「縄文時代における食料獲得活動の諸相」『古代文化』第50巻第10号
- 近世九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 佐用郡教育委員会 2005『平成5年度 埋蔵文化財調査年報』
- 佐用町教育委員会 2009『平成元年度 埋蔵文化財調査年報』
- 高砂市教育委員会社会教育課 1964『日笠山貝塚』
- 竹野町教育委員会 1990『小森岡遺跡』
- 千葉豊 1989「緑帯文土器群の成立と展開」『史林』第27巻第6号
- 千葉豊 1990「近畿北部・山陰東部の成立期緑帯文土器」『小森岡遺跡』竹野町教育委員会
- 千葉豊 2008a「緑帯文土器」『総覧縄文土器』
- 千葉豊 2008b「赤穂市内出土の縄文土器について～後期を中心に～」『有年原・クルマ遺跡発掘調査報告書』赤穂市教育委員会
- 友久伸子 2009「播磨における「摂津系太頭広口窓」」『兵庫発信の考古学』
- 長友朋子・田中元浩 2007「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年～播磨編～』
- 乗岡実 2000「備前焼鉢鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
- 橋本雄一 1994「彦崎K2式に先行する土器群について」『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 長谷川眞 2007「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』21
- 平井勝 1993「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集
- 深井明比古 2000「兵庫県太子町東南遺跡」『関西の縄文墓地』
- 藤木透 2005「兵庫県佐用郡の縄紋遺跡」『第1回西日本縄文文化研究会 西日本縄文文化の特徴』
- 藤木透 2009「西播磨地域」『第10回播磨考古学研究集会資料集 播磨の弥生時代堅穴建物を探る』
- 柳浦俊一 2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『鳥根考古学会誌』第17集

付表1 土器一覽表

No	種別	器種	出土地区	遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	腹径 (cm)	厚 (cm)	備考
001	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK10			(21.8)	7.8	(29.3)	0.9	胎土分析
002	縄文土器	深鉢	森ノ本2区	SK36		-	(13.0)	-	34.5	0.6	胎土分析
003	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK02		-	3.8	-	-	0.6	
004	縄文土器	体部	森ノ本1区	SK04		-	4.0	-	-	0.5	
005	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK04		-	3.9	-	-	0.5	
006	縄文土器	底部	森ノ本1区	SK05		-	1.9	8.0	-	-	
007	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK07		-	6.2	-	-	0.8	
008	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK08		-	4.7	-	-	0.7	
009	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK08		-	5.0	-	-	0.9	
010	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK08		-	2.7	-	-	0.7	
011	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK12		-	2.1	-	-	0.7	
012	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK15		-	3.3	-	-	0.6	
013	縄文土器	浅鉢	森ノ本1区	SK15		-	5.2	-	-	0.8	
014	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	3.6	-	-	0.5	
015	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	3.1	-	-	0.8	
016	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	3.9	-	-	0.7	
017	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	4.5	-	-	0.9	
018	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		(32.5)	(13.8)	-	-	0.7	
019	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	3.9	-	-	0.6	
020	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK16		-	6.1	-	-	0.6	
021	縄文土器	底部	森ノ本1区	SK16		-	5.9	9.2	-	0.6	
022	縄文土器	底部	森ノ本1区	SK16		-	1.9	10.6	-	-	
023	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17		-	4.1	-	-	0.7	
024	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	6.2	-	-	0.7	
025	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	2.9	-	-	0.5	
026	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	5.0	-	-	0.7	
027	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17		-	4.6	-	-	0.6	
028	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	9.8	-	-	0.6	
029	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	(16.6)	(7.8)	-	(17.0)	0.5	
030	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	2.7	-	-	0.5	
031	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17		(26.8)	(7.0)	-	-	0.7	
032	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	6.5	-	-	0.6	
033	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	3.2	-	-	0.6	
034	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17		(12.8)	(3.9)	-	-	0.7	
035	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	5.7	-	-	0.6	胎土分析
036	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17		-	4.3	-	-	0.6	
037	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	5.5	-	-	0.7	
038	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	8.7	-	-	0.5	
039	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	7.3	-	-	0.6	
040	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17		-	2.4	-	-	0.7	
041	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17		-	3.9	-	-	0.8	
042	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17	下層	-	7.0	-	-	0.7	胎土分析
043	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17		-	6.3	-	-	0.7	
044	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK17		-	5.5	-	-	0.8	
045	縄文土器	底部	森ノ本1区	SK17	下層	-	(4.5)	(6.3)	-	0.7	
046	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK19		-	2.8	-	-	0.6	
047	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK19		-	4.6	-	-	0.6	
048	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK19		-	3.5	-	-	0.6	
049	縄文土器	鉢	森ノ本1区	SK19		-	8.0	-	-	0.7	
050	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	SK24		-	2.9	-	-	0.6	
051	縄文土器	深鉢	森ノ本3区	P202		-	3.6	-	-	0.5	
052	縄文土器	深鉢	森ノ本3区	P202		-	3.2	-	-	0.5	
053	縄文土器	深鉢	森ノ本3区	P202		-	6.5	-	-	0.6	
054	縄文土器	深鉢	森ノ本1区	包含層		-	7.4	-	-	0.6	
055	縄文土器	深鉢	森ノ本2区	包含層		-	1.2	-	-	0.7	
056	縄文土器	底部	森ノ本2区 (確認57T)	包含層		-	(2.5)	(6.0)	-	0.6	
057	弥生土器	高杯	森ノ本2区	SD01		(21.5)	(3.5)	-	-	-	
058	弥生土器	底部	森ノ本2区	SD01		-	(1.7)	(9.6)	-	-	
059	須恵器	碗	森ノ本2区	SD02		(14.0)	(2.4)	-	-	-	
060	土師器	底部	森ノ本2区	SD03		-	(1.3)	-	-	-	
061	須恵器	碗	森ノ本2区	P201		-	(1.5)	(6.1)	-	-	
062	弥生土器	甕	森ノ本2区	包含層		(16.0)	(1.9)	-	-	-	
063	弥生土器	甕	森ノ本2区	包含層		(13.6)	(6.7)	-	-	-	

No	種別	器種	出土地区	遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	腹径 (cm)	厚 (cm)	備考
064	弥生土器	壺	森ノ本2区	包含層		-	(38)	-	頸径 (12.0)		
065	弥生土器	底部	森ノ本1区	包含層		-	(5.9)	(10.3)		0.7	
066	土師器	甕	森ノ本2区	包含層		12.5	19.2	-	18.0		
067	須恵器	杯A	森ノ本2区	包含層		-	(0.9)	(8.0)			
068	須恵器	碗	森ノ本2区	包含層		-	(1.3)	(5.4)			
069	弥生土器	壺	岡1区	SH01	床面	(16.6)	(31.5)	-	(27.5)		
070	弥生土器	壺	岡1区	SH01	埋土	-	(10.6)	-			胎土分析
071	弥生土器	甕	岡1区	SH01	床面	(18.2)	(16.4)	-	(26.7)		
072	弥生土器	甕	岡1区	SH01	埋土	(11.6)	(3.1)	-			
073	弥生土器	水差し	岡1区	SH02	埋土	-	(8.5)	-			
074	弥生土器	無蓋壺	岡1区	SH02	埋土	-	(5.0)	-			
075	弥生土器	甕	岡1区	SH02	埋土	-	(3.0)	-			
076	弥生土器	底部	岡1区	SH02	埋土	-	(2.6)	(9.3)			
077	弥生土器	高杯	岡1区	SH02	埋土	-	(3.2)	(11.4)			
078	弥生土器	脚部	岡1区	SH02	埋土	-	(4.1)	(12.2)			
079	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	-	(12.7)	6.2	-		
080	弥生土器	高杯	岡1区	SH03	床面	24.2	(7.8)	-	-		
081	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	(21.6)	(7.7)	-			
082	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	(15.3)	(28.8)	6.5	(23.9)		胎土分析
083	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	11.5	(19.0)	-	(17.3)		胎土分析
084	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	(11.6)	(12.2)	4.9	(11.7)		
085	弥生土器	甕	岡1区	SH03	床面	(10.8)	(10.7)	-	(16.1)		
086	弥生土器	甕	岡1区	SH03	中央土坑	(16.0)	(26.4)	(4.4)	(21.6)		胎土分析
087	弥生土器	甕	岡1区	SH03	中央土坑	(15.7)	(12.9)	-	(23.8)		
088	弥生土器	底部	岡1区	SH03	中央土坑	-	(5.4)	8.2			胎土分析
089	弥生土器	甕	岡1区	SH03	埋土	(29.0)	(23.6)	-	(37.4)		胎土分析
090	弥生土器	甕	岡1区	SH03	埋土	(16.6)	(5.35)	-	-		胎土分析
091	弥生土器	壺	岡1区	SH03	埋土	(14.2)	(4.4)	-	-		
092	弥生土器	鉢	岡1区	SH03	埋土	(9.2)	(9.5)	-	-		
093	弥生土器	底部	岡1区	SH03	埋土	-	(7.6)	4.7	-		
094	弥生土器	底部	岡1区	SH03	埋土	-	(2.2)	5.5	-		
095	弥生土器	小型高杯	岡1区	SH03	埋土	(6.2)	(5.2)	-	頸径 (2.2)		
096	弥生土器	高杯	岡1区	SH03	埋土	(18.6)	(6.0)	-	-		
097	弥生土器	器台	岡1区	SK21		-	(4.0)	-	-		
098	弥生土器	広口壺	岡1区	P113		(17.0)	(4.4)	-	-		
099	弥生土器	広口壺	岡1区			(16.0)	(5.3)	-	-		
100	弥生土器	甕	岡1区			(19.4)	(9.1)	-	-		
101	弥生土器	高杯	岡1区			-	(7.8)	(12.0)			胎土分析
102	弥生土器	器台	岡2区			(12.0)	(2.7)	-	-		
103	須恵器	杯B蓋	岡2区			(15.0)	(2.3)	-	-		
104	須恵器	杯	岡1区			(13.8)	(3.2)	-	-		
105	須恵器	杯A	岡1区			-	(1.15)	(9.5)	-		
106	須恵器	杯B	岡1区			-	(1.3)	(10.0)	-		
107	須恵器	甕	岡1区			(23.0)	(2.3)	-	-		
108	土師器	皿	岡1区	P002		(11.2)	2.25	(7.6)	-		
109	土師器	皿	岡1区	P002		(9.4)	2.2	6.5	-		
110	土師器	皿	岡1区	P038		(10.2)	1.3	(7.2)	-		
111	土師器	皿	岡1区	P040		(9.0)	1.7	(7.2)	-		
112	土師器	皿	岡1区	P047		(8.0)	2.0	(4.4)	-		
113	土師器	皿	岡1区	P041		(9.6)	1.4	(5.7)	-		
114	土師器	皿	岡1区	P041		(9.0)	1.5	(5.8)	-		
115	土師器	皿	岡1区	P048		(9.0)	(1.75)	-	-		
116	土師器	皿	岡1区	P097		(8.0)	1.6	(4.1)	-		
117	土師器	皿	岡1区	P053		(7.8)	(1.4)	-	-		
118	土師器	皿	岡1区	P052		(7.7)	(1.4)	-	-		
119	土師器	皿	岡1区	P052		(7.7)	(1.9)	(4.2)	-		
120	土師器	皿	岡1区	P090		(9.8)	(2.1)	-	-		
121	土師器	皿	岡1区	P090		(8.0)	(1.8)	-	-		
122	土師器	皿	岡1区	P100		(9.0)	(2.1)	-	-		
123	染付磁器	鉢	岡1区	P093		(11.0)	(2.9)	-	-		中国製
124	施釉陶器	皿	岡1区	P049		(11.2)	3.15	4.8	-		肥前丞
125	無釉陶器	襜鉢	岡1区	P097		(25.0)	7.0	-	-		備前
126	無釉陶器	襜鉢	岡1区	P090		(30.0)	(8.3)	-	-		備前

No	種別	器種	出土地区	遺構	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	腹径 (cm)	厚 (cm)	備考
127	土師器	皿	岡1区	SK03		(9.6)	1.5	(6.9)			
128	土師器	皿	岡1区	SK03		(9.0)	(1.2)	-			
129	青磁	碗	岡1区	SK03		(15.0)	(4.45)	-			龍泉窯系
130	土師器	皿	岡1区	SK04		(9.0)	(1.6)	-			
131	土師器	皿	岡1区	SK04		(9.0)	(1.3)	-			
132	土師器	皿	岡1区	SK12		(9.0)	2.0	(4.2)			
133	土師器	皿	岡1区	SK37		(8.4)	1.8	(5.2)			
134	土師器	皿	岡1区	SK32		(9.0)	1.5	(6.1)			
135	土師器	皿	岡1区	SK32		(9.0)	1.5	(8.6)			
136	土師器	皿	岡1区	SK32		(8.0)	1.5	(6.2)			
137	土師器	鉢	岡1区	SK32		(26.0)	(4.5)	-			
138	無釉陶器	擂鉢	岡1区	SK32		-	(6.9)	(14.3)			備前
139	無釉陶器	擂鉢	岡1区	SK35		-	(7.8)	(12.4)			備前
140	無釉陶器	擂鉢	岡1区	A包含層		(27.6)	(11.2)	(16.5)			備前
141	無釉陶器	擂鉢	岡1区	A包含層		(27.2)	(10.7)	(14.8)			備前
142	須忠器	碗	岡2区	包含層		-	(3.0)	(5.6)			
143	白磁	碗	岡1区	A包含層		-	(2.1)	5.1			
144	青磁	碗	岡1区	A包含層		-	(4.6)	(5.9)			龍泉窯系
145	土師器	皿	岡1区	C包含層		(4.6)	(1.7)	-			
146	土師器	皿	岡1区	C包含層		(8.1)	2.3	4.5			
147	土師器	土鉢	岡1区	C包含層		3.4	1.1	-	重 35g	1.0	
148	瓦質土器	鉢	岡1区	C包含層		(28.0)	(2.2)	-	-		
149	無釉陶器	擂鉢	岡1区	C包含層		(28.0)	(6.7)	-	-		備前
150	無釉陶器	擂鉢	岡1区	C包含層		(27.0)	(4.8)	-	-		備前
151	無釉陶器	壺	岡1区	C包含層		(10.4)	(4.0)	-	-		備前
152	青磁	碗	岡1区	C包含層		(14.0)	(5.25)	-	-		龍泉窯系
153	青磁	碗	岡1区	C包含層		(12.0)	(3.2)	-	-		龍泉窯系
154	青磁	碗	岡1区	C包含層		(10.9)	(4.0)	-	-		龍泉窯系
155	青磁	碗	岡1区	C包含層		-	(2.2)	(6.8)			龍泉窯系
156	無釉陶器	蓋	岡1区	D包含層		(7.8)	2.5	8.0			京・信樂系
157	染付磁器	碗	岡1区	D包含層		-	(3.0)	3.5			肥前系
158	土師器	皿	岡1区	E包含層		(9.7)	(2.0)	-			備前
159	染付磁器	碗	岡1区	F包含層		(11.2)	(5.8)	-			肥前系
160	無釉陶器	皿	岡1区	F包含層		7.9	1.4	3.4			備前
161	無釉陶器	擂鉢	岡1区 (確認 59T)	G包含層		(31.1)	(8.7)	-			備前
162	無釉陶器	擂鉢	岡1区	G包含層		(33.0)	(15.0)	(15.0)			堺・明石系
163	土師器	羽釜	岡1区 (確認 29T)	J包含層		(24.4)	(3.7)	-			
164	青磁	碗	岡1区	包含層		-	2.7	-			龍泉窯系

付表2 金属製品一覧表

No	種別	器種	出土地区	遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考
M1	鉄製品	火打金	岡1区	包含層		4.3	1.35	0.5	
M2	鉄製品	釘	岡1区	包含層		5.6	0.7	0.7	
M3	銅製品	銅銭	岡1区	P114					開元通寶
M4	銅製品	銅銭	岡1区	P114					開元通寶
M5	銅製品	銅銭	岡1区	P114					開元通寶
M6	銅製品	銅銭	岡1区	P114					天禧通寶
M7	銅製品	銅銭	確認 35T	包含層					大聖元寶
M8	銅製品	銅銭	岡1区	包含層					皇宋通寶

付表3 石器一覧表

No	種別	器種	出土地区	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備 考2
S01	石器	石鏃	森ノ本1区	表土	-	21	14	04	07	サヌカイト
S02	石器	削器	森ノ本1区	SK09	-	34	54	07	91	サヌカイト
S03	石器	石匙状石製品	森ノ本2区	SK32	-	85	57	09	349	サヌカイト
S04	石器	大形船形石斧	森ノ本1区	PO03	-	130	69	46	7210	角閃石ひん岩
S05	石器	磨石	森ノ本1区	SK04	-	133	122	64	15260	花崗斑岩
S06	石器	磨石	森ノ本1区	SK14	-	102	101	73	10455	石英閃緑岩
S07	石製品	敲き石	森ノ本1区	SK04	-	158	113	71	18	石英閃緑岩
S08	石製品	石皿	森ノ本1区	SK02	-	339	291	56	88	流紋岩貫層灰岩
S09	石製品	石皿	森ノ本1区	SK02	下層	316	1905	53	417kg	流紋岩貫層灰岩
S10	石製品	石皿	森ノ本1区	SK03	-	392	279	103	170kg	流紋岩貫層灰岩
S11	石製品	石皿	森ノ本1区	SK12	-	467	352	126	(342kg)	デイサイト貫火山礫凝灰岩
S12	石製品	石皿	森ノ本1区	SK14	-	3425	242	107	144kg	流紋岩貫層灰岩
S13	石製品	石皿	森ノ本1区	SK16	-	482	323	53	136kg	石英斑岩
S14	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	472	376	120	(258kg)	流紋岩貫層灰岩
S15	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	280	202	83	8.0kg	流紋岩貫層灰岩
S16	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	234	314	129	11.1kg	石英斑岩
S17	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	208	119	37	1.5kg	凝灰岩質
S18	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	317	334	88	10.6kg	デイサイト貫火山礫凝灰岩
S19	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	339	180	69	5.6kg	流紋岩貫層灰岩
S20	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	491	326	66	(150kg)	流紋岩貫層灰岩
S21	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	497	216	114	23.5kg	石英斑岩
S22	石製品	石皿	森ノ本1区	SK19	-	5315	3525	85	(210kg)	流紋岩貫層灰岩
S23	石器	楕形石器	圃1区	SH03-5	埋土	(1.6)	17	07	14	サヌカイト
S24	石器	石庖丁	圃1区	包含層	-	74	83	12	924	凝灰質頁岩
S25	石器	扁平片刃石斧	圃1区	SH03-3	周壁溝	13.6	7.7	1.2	2498	細粒砂岩

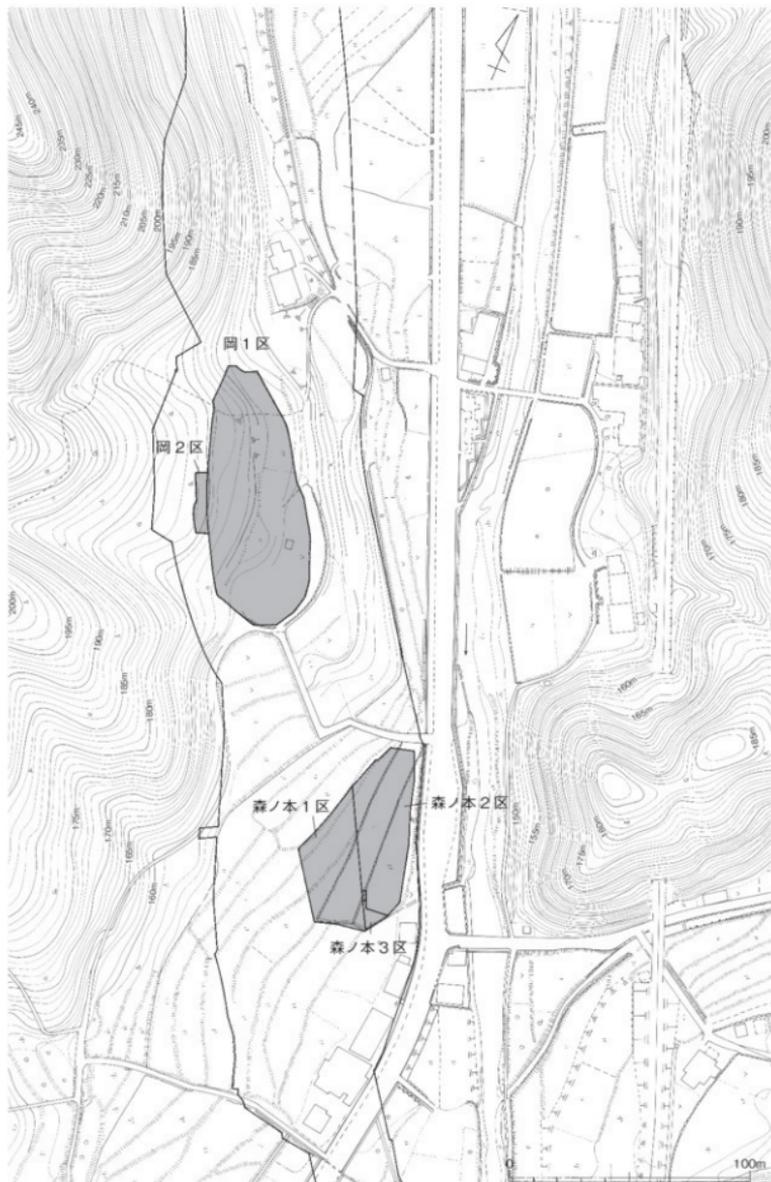
付表4 未図化石皿一覧表

番号	遺構名	取り上げ	石材	礫の形状	礫の規模	使用度	平坦面	備考
1	SK02	No.1	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	中	平滑	
2	SK02	No.2	デイサイト質火山礫凝灰岩	亜角礫	小	弱	あり	
3	SK02	No.3	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	小	強(石皿)	平滑	くぼまない
4	SK02	No.4	石英斑岩	角礫	中	弱		
5	SK02	No.5	安山岩質凝灰岩	角礫	中	弱	あり	
6	SK02	No.6	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
7	SK02	No.7	安山岩質凝灰岩	板石	小	弱	あり	
8	SK02	No.8	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
9	SK02	No.9	安山岩質凝灰岩	円礫	小	強(石皿)	平滑	
10	SK02	No.10	石英斑岩	角礫	中	弱	平滑	
11	SK02	No.11	中粒砂岩	円礫	小	弱	なし	自然礫か
12	SK02	No.12	珪長岩	板石	小	弱	あり	
13	SK02	No.13	砂岩	円礫	中	弱	あり	
14	SK02	No.14	流紋岩質火山礫凝灰岩	亜角礫	中	弱	微妙	
15	SK02	No.15	中粒砂岩	亜角礫	中	強(石皿)	平滑	わずかに浅くくぼむ
16	SK02	No.16	デイサイト質火山礫凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
17	SK02	No.17	流紋岩質凝灰岩	角礫	小	弱	あり	
18	SK02	No.18	流紋岩質凝灰岩	円礫	中	弱	平滑	
19	SK02	No.19	石英斑岩	亜角礫	小	弱	あり	
20	SK02	No.20	石英斑岩	板石	小	弱	平滑	
21	SK02	No.21	石英斑岩	円礫	小	弱	微妙	
22	SK02	No.22	閃長岩	円礫	中	弱	なし	自然礫か
23	SK02	No.23	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	強(石皿)	平滑	
24	SK02	No.24	石英斑岩	板石	中	弱	平滑	
25	SK02	No.25	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
26	SK02	No.26	石英斑岩	亜角礫	小	弱	なし	自然礫か
27	SK02	No.28	石英斑岩	亜角礫	小	弱	あり	
28	SK02	No.29	流紋岩質凝灰岩	円礫	中	弱	平滑	
29	SK02	No.30	安山岩質凝灰岩	亜角礫	大	中	平滑	
30	SK03	No.2	デイサイト質火山礫凝灰岩	亜角礫	中	弱	平滑	わずかに浅くくぼむ
31	SK04	No.2	砂岩	亜角礫	小	弱	平滑	
32	SK04	No.3	石英斑岩	角礫	小	中	平滑	
33	SK04	No.4	石英斑岩	角礫	小	弱	あり	
34	SK08	No.2	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	中	あり	
35	SK08	No.3	石英斑岩	角礫	中	弱		
36	SK12	No.2	石英斑岩	亜角礫	小	弱	あり	
37	SK14	No.2	石英斑岩	亜角礫	中	弱	あり	
38	SK15	No.1	石英斑岩	円礫	中	弱	微妙	
39	SK17	No.1	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	小	弱	微妙	
40	SK17	No.3	デイサイト質凝灰岩	円礫	小	弱	あり	
41	SK17	No.4	石英斑岩	円礫	小	弱	微妙	
42	SK17	No.5	デイサイト質火山礫凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
43	SK17	No.6	流紋岩質凝灰岩	角礫	中	中	平滑	
44	SK17	No.7	石英斑岩	角礫	中	弱	あり	
45	SK17	No.8	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	中	弱	あり	
46	SK17	No.9	石英斑岩	角礫	小	弱	平滑	
47	SK17	No.10	砂岩	円礫	中	弱	あり	
48	SK19	No.3	流紋岩質凝灰岩	亜角礫	小	中	平滑	
49	SK19	No.6	流紋岩質凝灰岩	角礫	中	弱	平滑	
50	SK19	No.7	石英斑岩	亜角礫	中	弱	あり	
51	SK19	No.14	流紋岩質火山礫凝灰岩	亜角礫	中	強(石皿)	平滑	

*規模の基準：0～24cm：小、24～32cm：中、33cm～：大

*平坦面の状況：(粗 coarse) 微妙→あり→平滑 (滑 smooth)

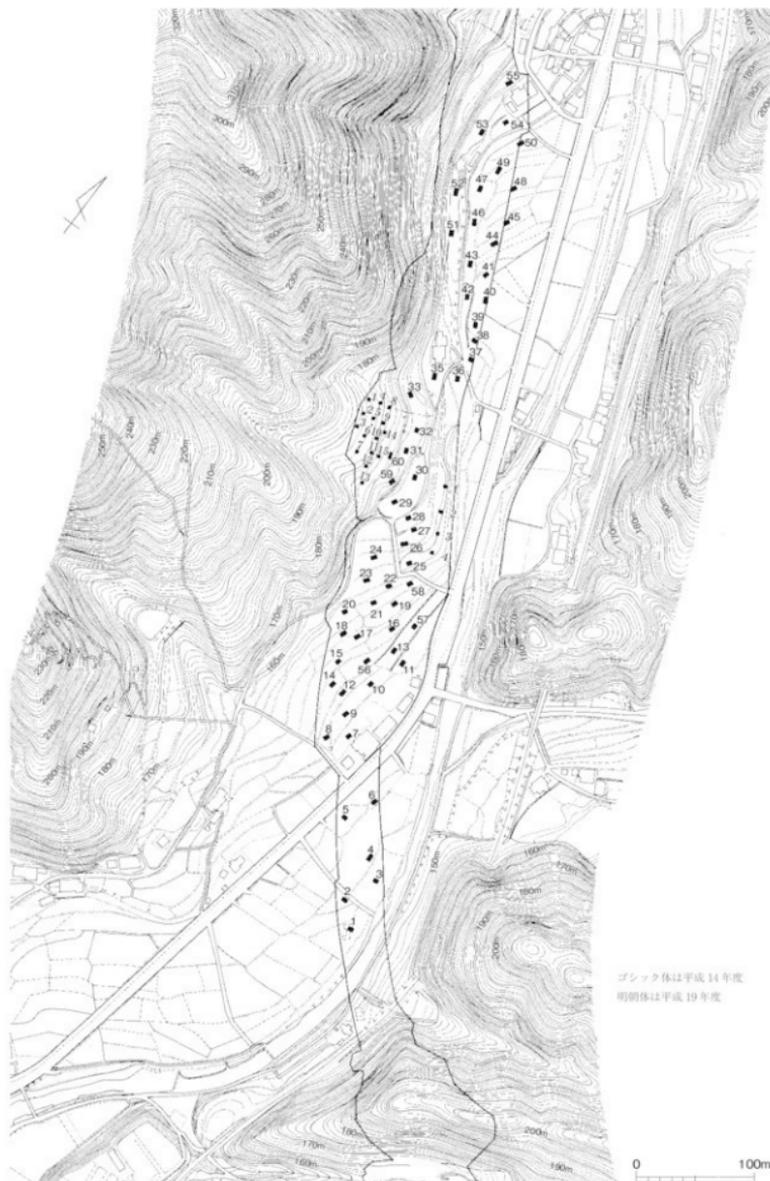
圖 版



調査区配置図



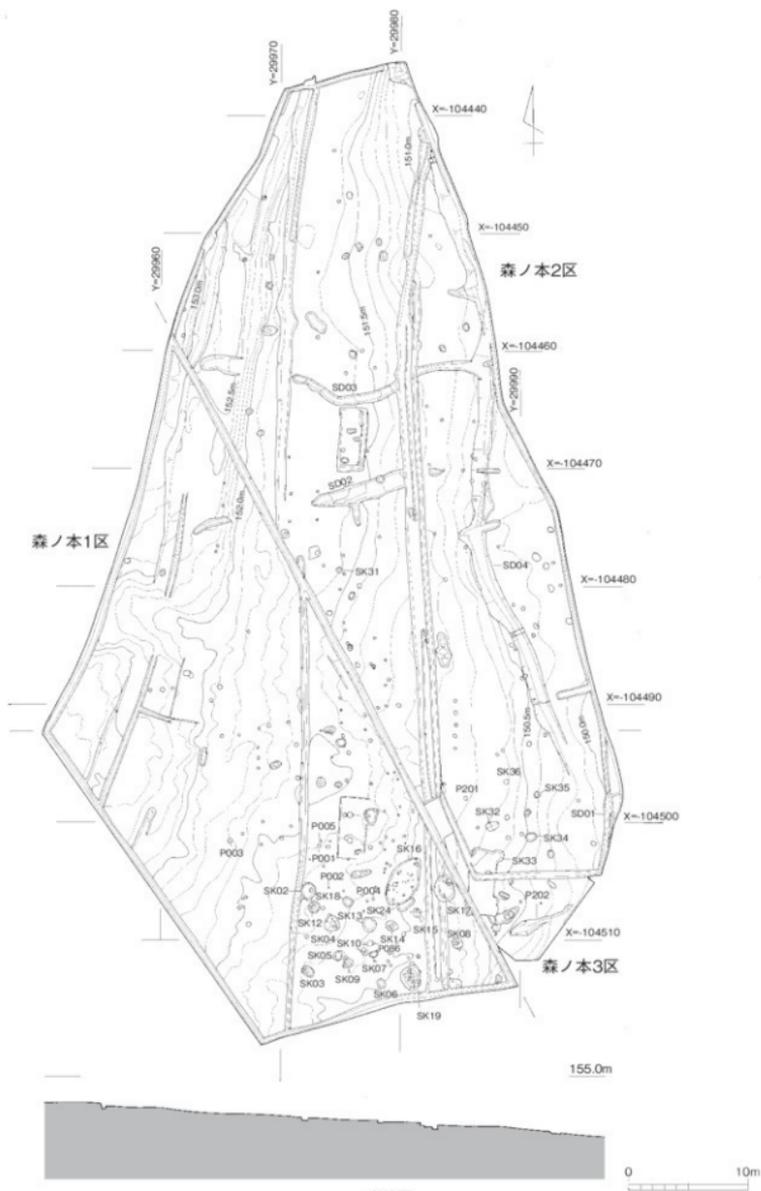
調査区周辺地形図



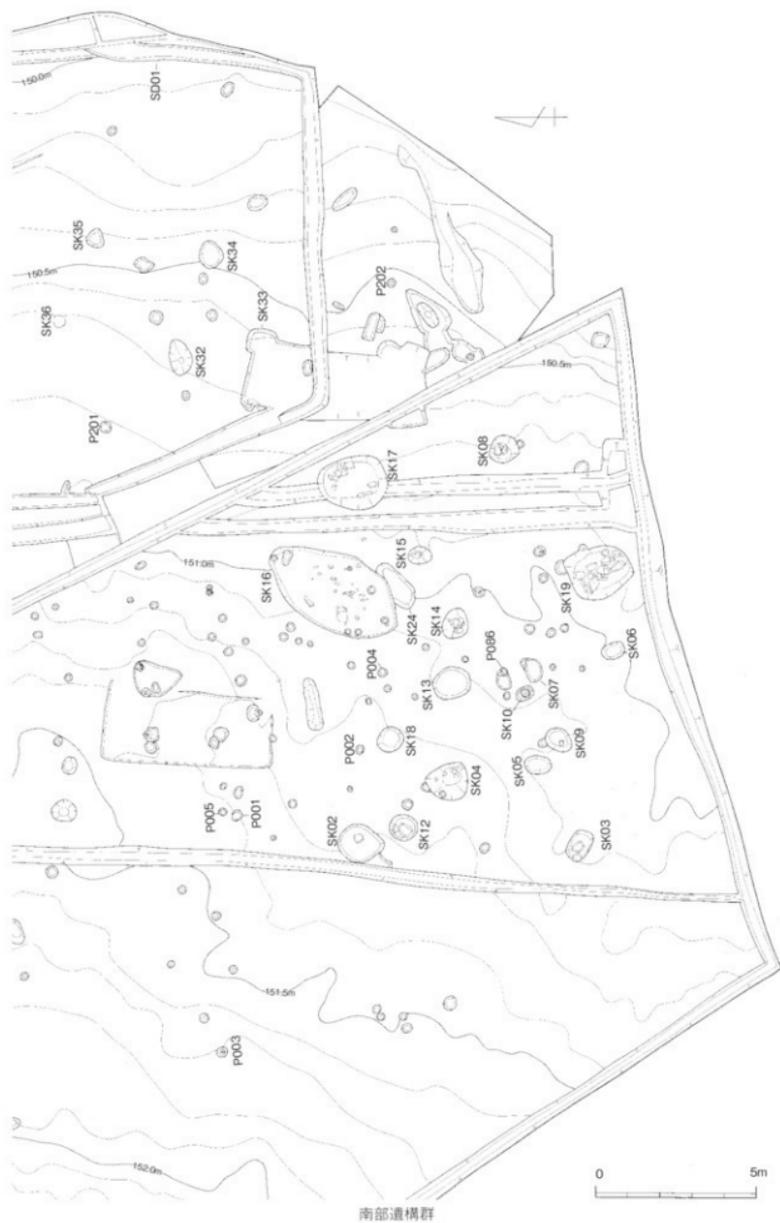
確認調査位置図

図版 4

森ノ本地区

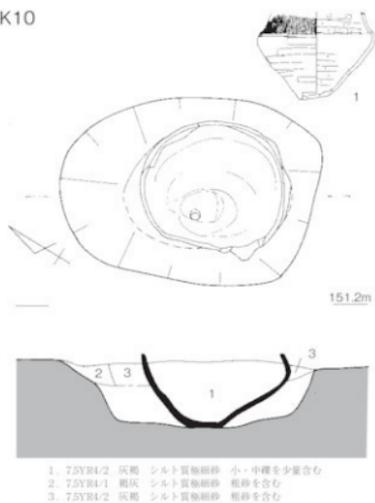


全体図

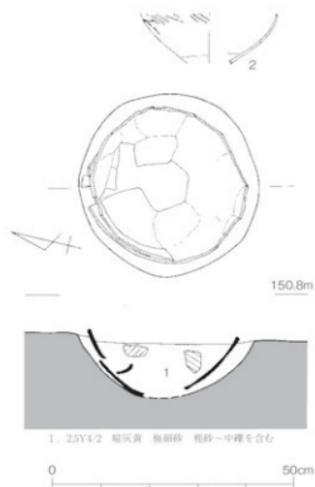


南部遺構群

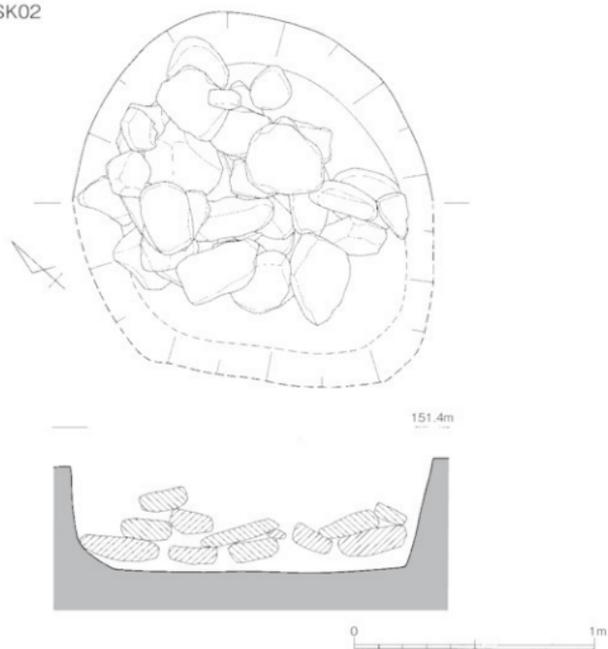
SK10



SK36

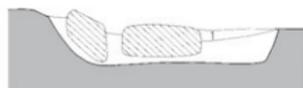
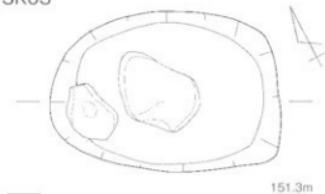


SK02



埋設土器 SK10・36・配石土坑1 SK02

SK03



1. 5Y4/1 灰 シルト質粘細砂 小礫を含む

SK08



1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂～中礫を含む

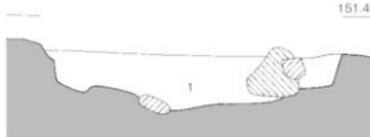
SK09



1. 10YR3/2 茶褐色 シルト質粘細砂 粗砂を多く含む 中礫を少量含む

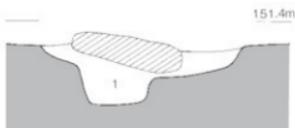
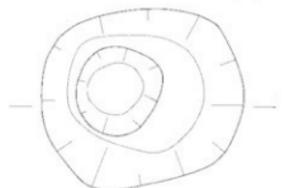
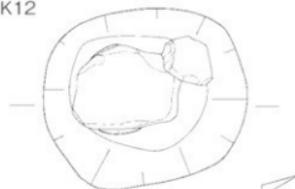


SK04



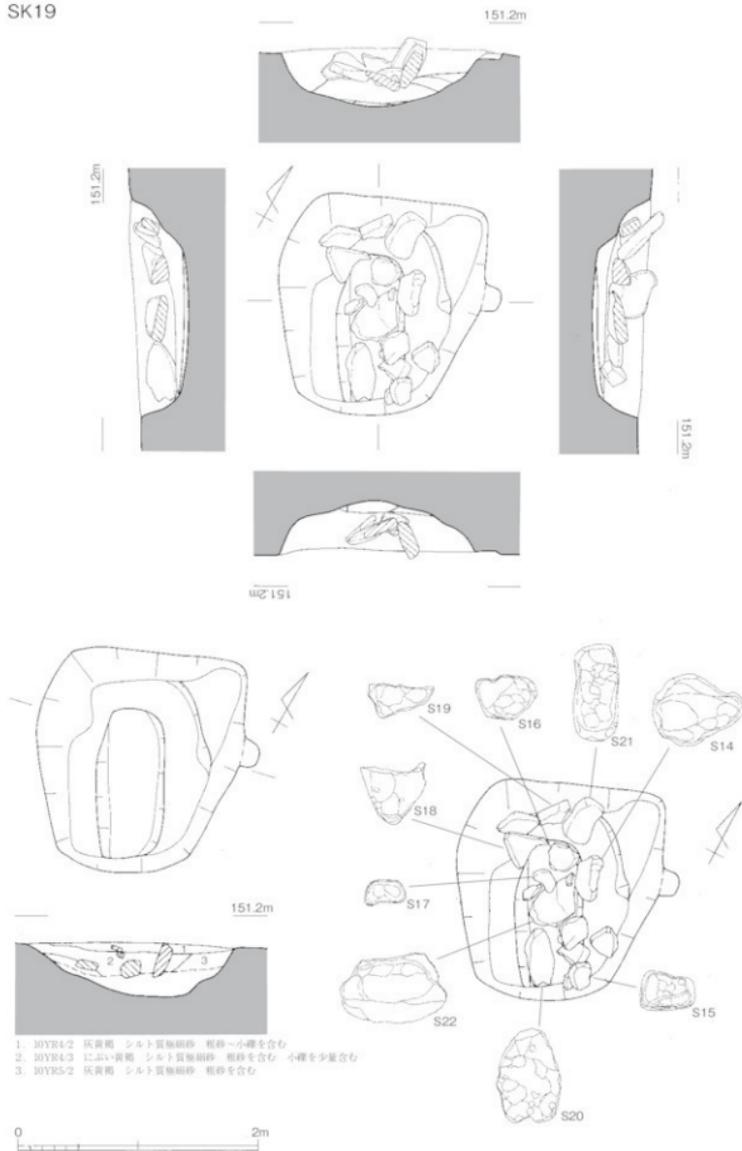
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む

SK12



1. 10YR4/1 褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む

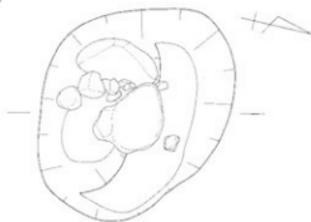
SK19



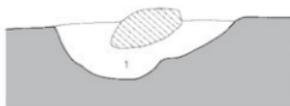
1. 10YR4-2 灰黄褐色 シルト質微細砂 粗砂～小礫を含む
2. 10YR4-3 にごい黄褐色 シルト質微細砂 粗砂を含む 小礫を少量含む
3. 10YR5-2 灰黄褐色 シルト質微細砂 粗砂を含む

配石土坑 3 SK19

SK14

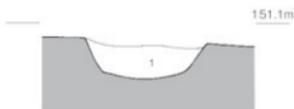
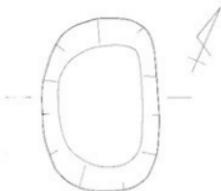


151.2m



1. 30YR4-2 灰黄期 シルト質粘細砂 粗砂・小礫を含む 炭を少量含む

SK06

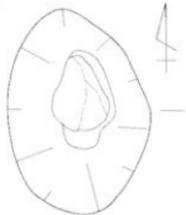


151.1m

1. 30YR4-1 褐色 シルト質粘細砂 粗砂・小礫・炭を含む



SK15

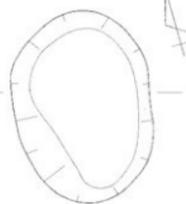


151.1m



1. 30YR4-2 灰黄期 シルト質粘細砂 粗砂・小礫を含む

SK05

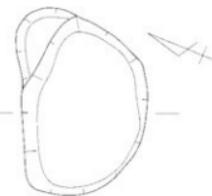


151.2m



1. 75YR3-1 明期 シルト質粘細砂 小礫・炭上を少量含む
2. 30YR4-2 灰黄期 シルト質粘細砂 粗砂・小礫を含む

SK07

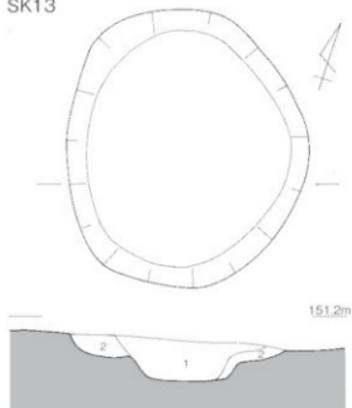


151.2m



1. 10YR3-2 灰期 シルト質粘細砂 小礫を多く含む

SK13



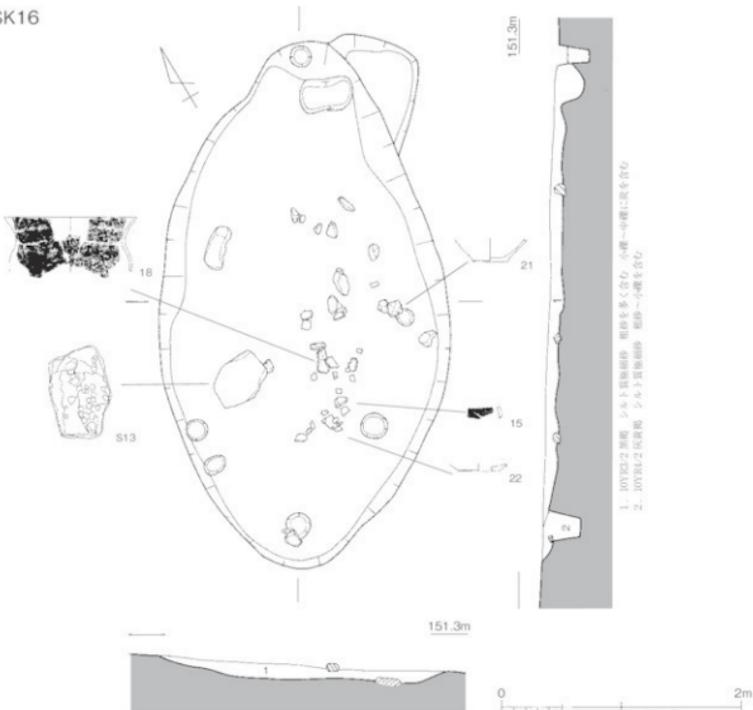
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘細砂 粗砂・小礫・中礫を含む
2. 10YR4/3 灰黄褐色 粘細砂～粗砂 粗砂・小礫を含む

SK18



1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂・小礫を含む 灰を少量含む

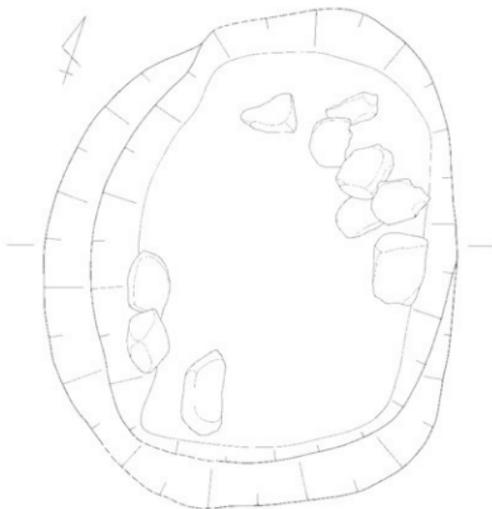
SK16



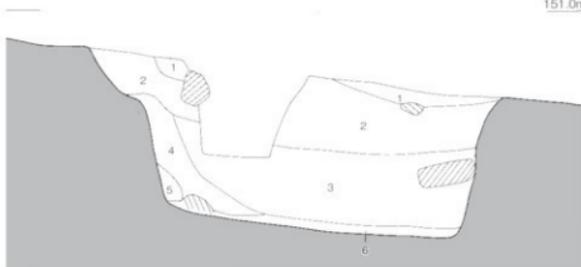
1. 10YR3/2 暗褐色 シルト質粘細砂 粗砂を多く含む 小礫・中礫に灰を含む
2. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂・小礫を含む

土坑2 SK13・16・18

SK17



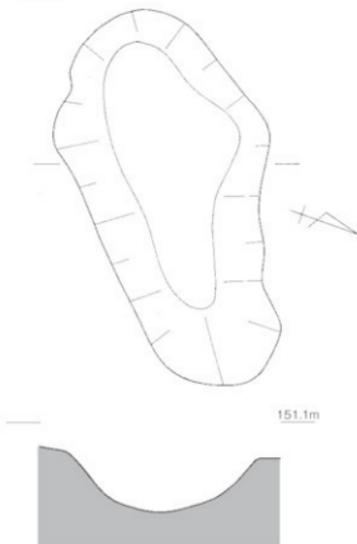
151.0m



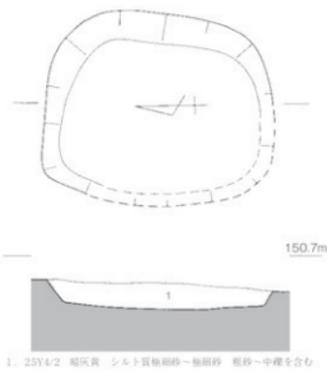
1. 7SYK3-2 黒褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む
2. 10YK3-3 暗褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小、中礫を多く含む 炭を含む
3. 2SY4-1 黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫、炭を含む
4. 7SY5-1 灰 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む
5. 7SY4-2 灰オリーブ シルト質粘細砂 粗砂～小礫を少量含む
6. 5Y4-1 灰 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を多く含む



SK24



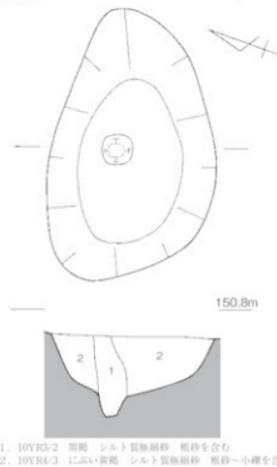
SK33



1. 25Y4/2 燧石質 シルト質粘細砂～粘細砂 粗砂～中礫を含む

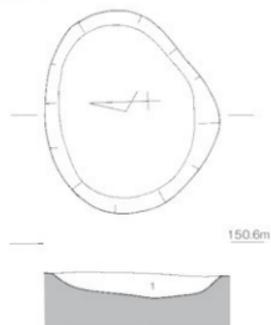


SK32



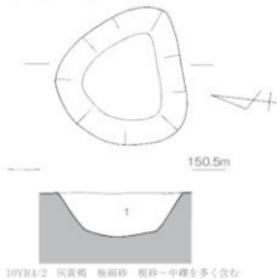
1. 10Y23/2 炭酸 シルト質粘細砂 粗砂を含む
2. 10Y24/3 に近い黄褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む

SK34



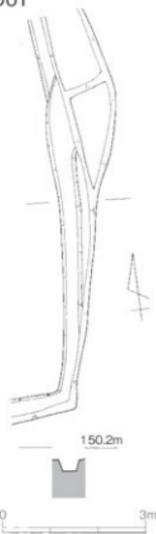
1. 10Y24/2 灰質粘 粘細砂 粗砂～中礫を含む

SK35



1. 10Y24/2 灰質粘 粘細砂 粗砂～中礫を多く含む

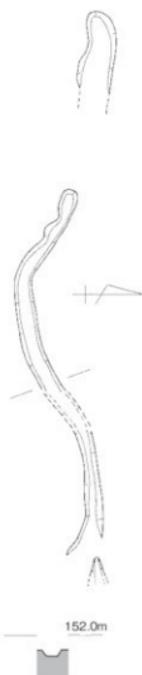
SD01



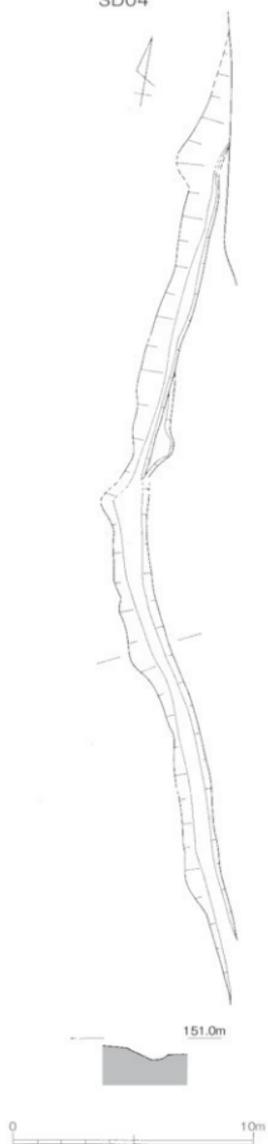
SD02



SD03



SD04

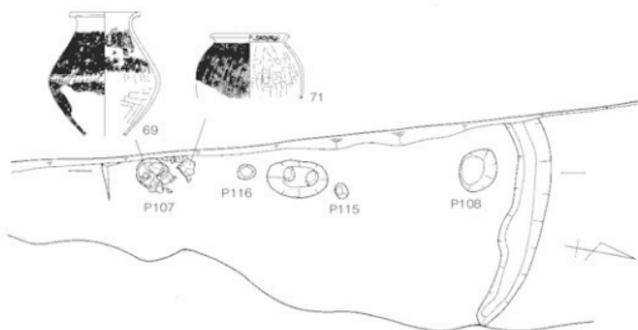




全体図

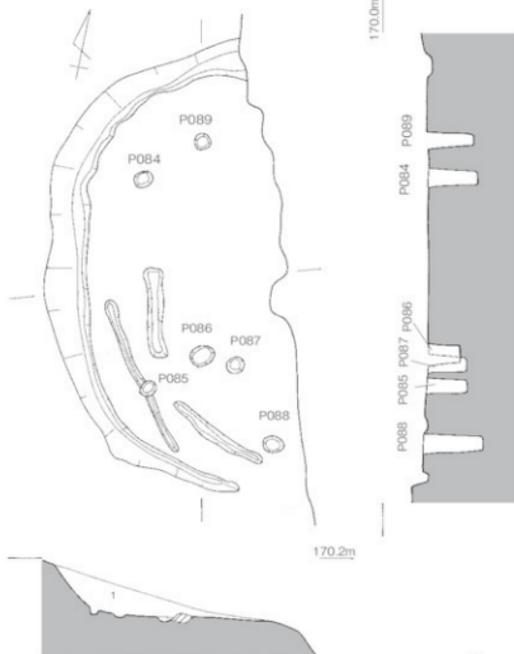


SH01



1. 10YR3-3 粘質 シルト質粘土層-粘砂層 磁砂-中礫を含む
2. 10YR3-3 粘質 シルト質粘土層 磁砂を含む
3. 7.5YR4-6 粘 シルト混じり粘砂層
4. 7.5YR4-4 粘 シルト混じり粘砂層
5. 10YR3-4 粘質 シルト質粘土層 磁砂・炭を含む

SH02

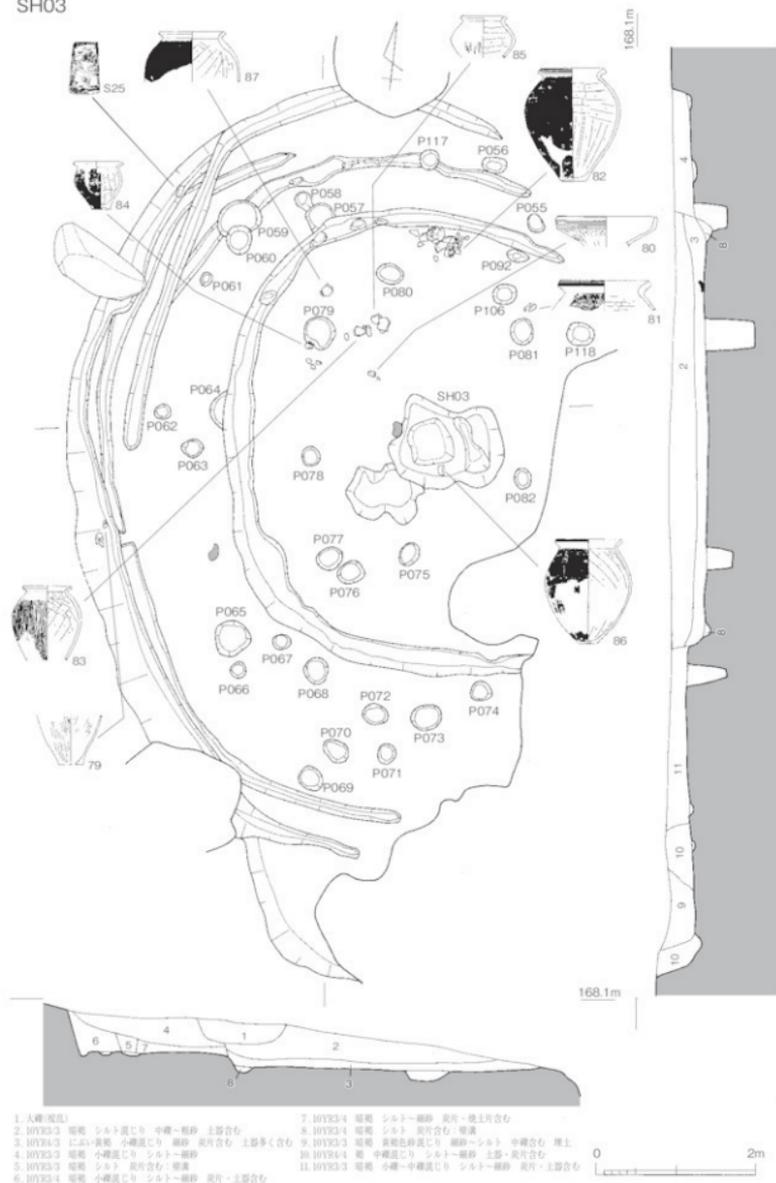


1. 10YR3-3 粘質 中礫混じり シルト-粘砂

竪穴住居跡 1 SH01-02



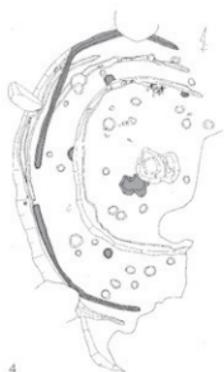
SH03



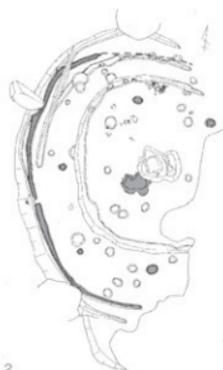
壑穴住居跡 2 SH03



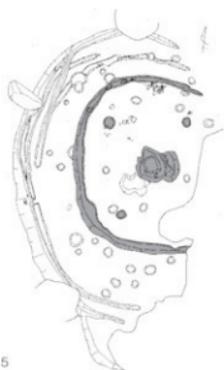
1



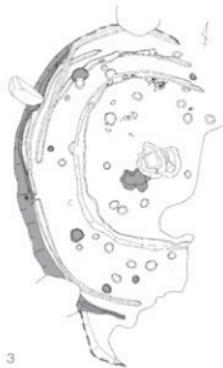
4



2



5

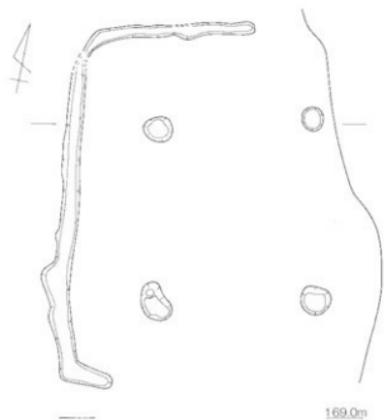


3



竪穴住居跡 4 SH03変遷図

SH04

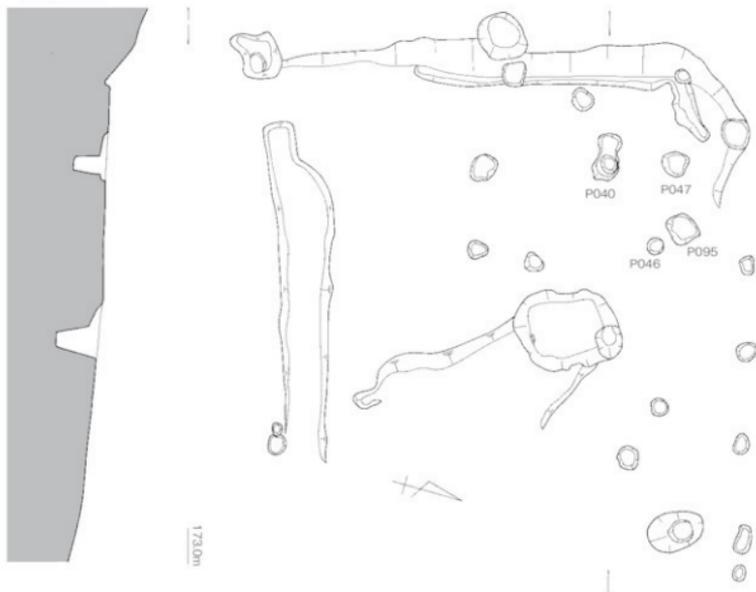


SB01

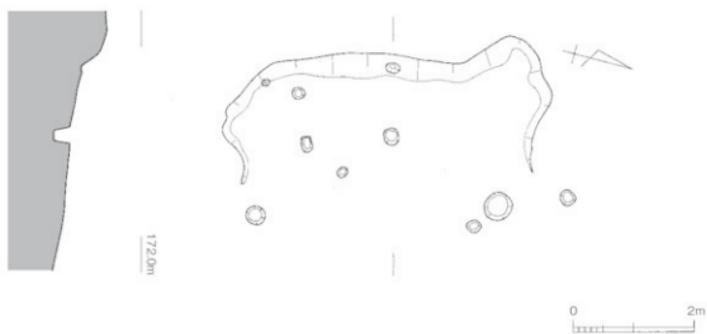


竪穴住居跡 5 SH04・掘立柱建物跡 SB01

段状遺構1

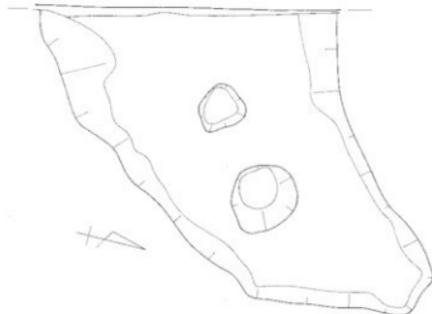


段状遺構2

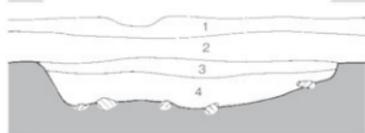


段状遺構1-2

SK04



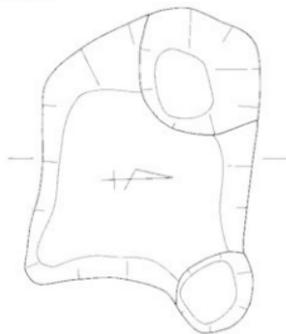
174.2m



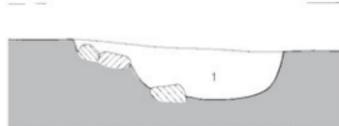
1. 表土
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘細砂 粗砂を多く含む 小礫を含む
3. 10YR5/4 に近い黄褐色 粘細砂 粗砂～小礫を含む 地山ブロックを含む
4. 10YR3/3 暗褐色 粘細砂～シルト質粘細砂 粗砂～中礫を含む



SK10



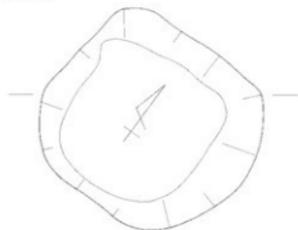
171.8m



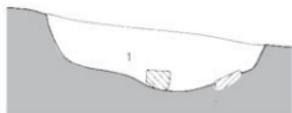
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘細砂 小礫～中礫を多く含む



SK03

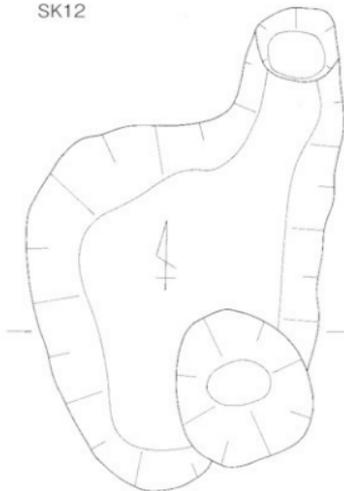


173.8m

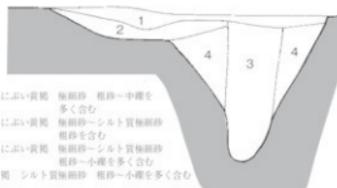


1. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘細砂～粘細砂 粗砂・炭を多く含む 小礫を含む

SK12



172.0m



1. 10YR5/4 に近い黄褐色 粘細砂 粗砂～中礫を多く含む
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘細砂～シルト質粘細砂 粗砂を含む
3. 10YR4/2 に近い黄褐色 粘細砂～シルト質粘細砂 粗砂～小礫を多く含む
4. 10YR4/6 暗褐色 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を多く含む

土坑 1 SK03・04・10・12

SK32



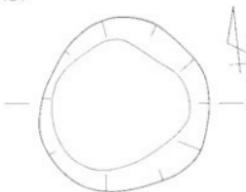
171.8m



1. 10YR4-6 黄 粘細砂～シルト質粘細砂 粗砂～中礫を含む
2. 10YR5-8 黄褐 粘細砂 粗砂～小礫を多く含む



SK37



169.9m



SK35

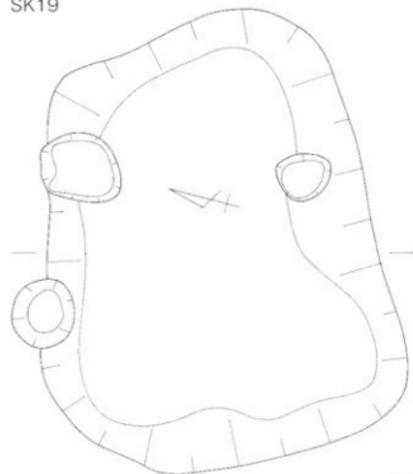


168.1m



1. 10YR3-3 褐黄 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を含む

SK19



168.4m



1. 10YR3-3 褐黄 シルト質粘細砂 粗砂～小礫を多く含む 中礫・泥を含む

